五)。祭司長に對する辨明は智慧と勇氣と靈力とを兼ね有する一大說敎であつた(七の二—五三)。人々ステパノが火の如き彈詰を怒りて彼を殺さんと近よるや、彼は「聖靈に充たされ天を仰ぎて神の榮光と其右にイエスの立てるを見て……視よわれ天ひらけて神の右に人の子の立てるを見る」と叫んだ(七の五六)。而して其最期の有樣は次の如く記してある。

彼等が石をもてステパノを擊てる時、かれ祈りて曰ひけるは主イエスよ我靈魂を納け給へと、また跪づき大聲に呼び曰ひけるは主よ此罪を彼等に負はしむる勿れと、此言を云ひ終りて寢りに就く。

イエスが死するに當つて、「父よ彼等を赦し給へ、その爲す處を知らざるが故なり」と敵人のために祈りしにも似て、げにいみじくも淸き最期である。

蓋しステパノの人物たる、熱誠、壯烈、激越、崇高、全心全靈イエスの生命を以て充ちてゐた。かれはパウロの如き、フヨックスの如き、ウェスレイの如き偉大なる傳道

者特有の素質を備へて居た。彼に假すに尙ほ十年の時日を以てせば、或はパウロにも比すべき大業を成したかも知れぬ。幸か不幸か彼は基督敎最初の殉敎者として倒れ、異邦傳道の大功を後進パウロに讓つてしまつた。

彼の傳道は甚だ獨立直往であつた。蓋し彼の位置を以てせば、忠實に執事の職に當るのみにて止むべきであつた。しかし彼の衷心に大靈の動くありて彼は特色ある傳道をなした。表面はペテロ、ヤコブ等使徒の驥尾に附して傳道したのであるが、其述ぶる處は彼等よりも超猶太的であつた。彼は少しも猶太人と調和し又は迎合するの態度を示さずして、自己の信ずる處を斷々乎として述べた。猶太人の形式主義を罵つた、猶太人の不信を責めた、猶太人の聽衆を面責して敢て怖れなかつた。イエスの活きた靈的生命が動ともすれば猶太敎化せられんとする當時の敎界に於て、基督敎が動ともすれば「改善せられたる猶太敎」たらんとする當時の敎界に於て、彼は唯ひとりイエスの根本精神を傳へて孤高の態度を取つた。使徒等に先だつて最初に彼が殺されしは、

彼が最も多く猶太人の憎惡を買つた爲である。彼の態度が最も鮮明であつたがために、最も初に殉教の死を招いたのである。而して彼が此思ひ切つた行爲に出づるや、彼は全然獨立的であつた、彼は少しも人に賴らなかつた。彼は一人で思ひ切つた事をやつて一人で死んだのである。彼に漲り溢れしものは獨往の精神であつた。之が彼を生かし又彼を殺したのである。孤獨の奮鬪！　これぞ泥土に委せられたる彼の屍を飾る花輪であつた。

ステバノの所說の特色を窺ふ前に、我等は彼の希臘的猶太人であつたことに注意せねばならぬ。由來當時の猶太民族は二つに大別せられて居た。第一類はユダヤの國語を用ひユダヤの習慣を守つた猶太人であつた、之をヘブル人（Hebrews）と呼んだ。第二類はギリシャの國語を用ひギリシャの風習に從へる猶太人である、此希臘化せられたる猶太人はヘレニスト（Hellenist）と呼ばれた。假に之を玆に希臘的猶太人と譯す。苟も猶太當時の國語たるアラミ語を用ふるものは、其居處のパレスチナたると希臘世

界たるを問はず、ヘブル人である。又苟も希臘語を日常語とするものは、希臘世界に住むとパレスチナに住むとに係らず、ヘレニストである。聖書に於ては前者を「ヘブル方言のユダヤ人」と稱し、後者を「ギリシャ方言のユダヤ人」と稱してゐる。

さて使徒等がヘブル人であるのに對して、ステバノはヘレニストであつた、即ち希臘化したる猶太人であつた。――かく想像せらるゝ根據は次の如くである。

(一)ステバノと云ふ名は希臘の名である。

(二)使徒行傳第六章に於て彼が選任の事情を見るに、「ギリシャ方言のユダヤ人（即ちヘレニスト）その寡婦等が日々の施濟に見落されしを以て、ヘブル方言のユダヤ人（即ちヘブル人）に向ひ怨言し事」のあつたために、ステバノ其他六人が「施濟」の執事に選ばれたのである。使徒等はヘブル人であるためにヘレニストの方まで目が達かなかつたのであらう。されば此際はギリシャ語のわかる者を執事に選ぶのが當然である。されればステバノはヘレニストであると察せられる。

(三)ステパノを迫害したのはエルサルム在住のヘレニストであつた（使徒行傳六の九）。彼は多くギリシヤ語を以てヘレニストの間に傳道したと見える。

右の如きが彼のヘレニストたるを證する根據である。さて希臘的猶太人として彼は希臘の文物思想の感化を受けて居たであらう。超猶太的、超律法的の所があつたであらう。從つて彼の宣ぶる所も超律法的、超猶太的であつた。パウロのそれの如く充分ではないとするも、使徒行傳に於ける彼の所論たる甚だ心靈的である。少くとも彼は、當時の教會の猶太的基督教と後に出づるパウロの世界的基督教の中間に立つて居た。律法的基督教と福音的基督教との間を占めてゐた。狹い教が廣い教となる間の「橋渡し」となつた。それ丈彼は心靈的であつた。(附記、彼の思想の超猶太的であつたと云ふことが彼のヘレニストたる證據の第四ともなるのである)。

彼を訴へた時の敵人の語はかうであつた。

此人（ステパノ）は聖所と律法を瀆すことを語りて止めず、そは彼れ語りて「此

ナザレのイエスは此所を毀ち且モーセの我等に授けし所の例を更ふべし」と曰へるを我等聞きたればなり

と。けだしステパノは專ら精神的の敬神を力說し、神殿に於ける形式的禮拜と律法の習慣的墨守とを責めたのであらう。七章に於ける大說教の終にも左の語がある

……ソロモン神のために殿を建てたり、然れども至上き神は手にて造れる所に居給はず、そは預言者の曰へる如し、即ち「主曰ひ給はく天は我座位なり、地はわが足臺なり、汝我がために如何なる屋を建てんとするか、又わが息む所は何處なるや、我が手は凡ての物を造らざりしや」と、强頑にして心と耳に割禮を受けざる者よ……

以て彼が形式儀禮を離れたる靈的信仰を高唱せし事を知るに足る。

彼が所說の詳細はわからない、しかしそのイエスキリストに中心を置きしことは明かである。第七章に於ける大說教は未完であること、論述の次第によりて知られる。

しかしイスラエルの過去を說述し來つてソロモン王に及び、急轉直下忽ちにして國人の不信を責めて曰ふた。

汝等の先祖等は孰れの預言者をか窘迫さゞりし、彼等は義者（キリスト）の來らんことを豫め語りし者を殺し、汝等は今その義者（キリスト）を賣り且これを殺す者となれり

と。かく說くや忽ち彼は國人の殺す處となつたが、思ふに之よりキリストについて說く積りであつたのだらう。然らずとするも、彼が長き過去の歷史を聽衆の前に描き出したのは、イスラエル史の究極にしてユダヤ人の理想完成者としてのキリストを紹介する前段であつたことは察するに難くない。要するに彼の說く處は「イエスを立てゝ神これを主となしキリストとなし給ひしこと」であつた。且つ彼の將に死せんとするや、彼の靈眼は「神の榮光と其右にイエスの立てるを見」た、「主イエスよ我靈魂を納け給へ」と祈つた。彼はイエスに醉へる人であつた。

(二)

使徒行傳てふ初代敎會の劇詩に於て、此ステパノの舞臺を去る時はかのパウロの初て舞臺に上る時である。パウロはステパノの死狀を目擊して居た（七の五八）、そしてステパノの殺されしを可しとした（七の六十）。彼は其後も尙ほ暫くは基督信者を迫害した（八の三及び九の一、二）。忽ちダマスコ城外に靈光は彼を環り照らし、彼は絕大なる使徒となつた（九の三）。

史に於て見ればパウロは突として改信したやうである。さりながら玆までに至るには彼の心に或變化が動いて居たに相違ない。彼が信者を迫害しつゝ其信者の堅信不拔なるを看たことは、少からず彼の多感なる心を動かしたであらう。殊にステパノの悲壯なる殉敎は彼に非常なる感動を與へたと想像せねばならぬ。後間もなく彼は改信したのである。且やステパノとパウロの間には種々相似の點が多い。それで自分はステパノの靈的生命がパウロに移り行つたのであると云ふ推測を下し度い。一步源に溯つ

てイエスの生命がステバノを通過してパウロに及んだと考へ度い。

ステバノとパウロとの類似點とは何か。

前段ステバノの特色を記すや、讀者は既に其の甚だしくパウロに似たるを聯想したことであらう。ステバノが執事より出でて熱烈なる傳道者となつたと相似て、パウロは基督教迫害者の中より出でゝ一轉して偉大なる宣教者となつた。パウロはイエスの生前に直接に任ぜられし使徒ではなかつた。肉に於てイエスを見なかつた點に於て、彼の證言(あかし)は他の使徒のそれより權威を缺いた。彼は自ら己を「月たらぬ者」(哥林多前書十五の八)と稱し、「使徒と稱ふるに足らざる者」「使徒の中の至微者(いとちいさきもの)」(同十五の九)となした。彼もステバノも共に人から見て正當なる資格を缺く傳道者であつた、免許狀を有たぬ教師であつた、神學校に學ばぬ傳道師であつた。二人は共に有形上の資格に於て足らざるものであつた。

パウロの人物は大にステバノに似て居る。パウロが聖靈に充ち滿ちたる熱誠、勇旺、

激越、高邁の士たるは云ふ迄もない。且彼が殉教者の死を遂げたとの傳說は事實であるらしい。たとへそれを虛なりとするも、その席暖まるの暇もなき傳道生活の間に受けし迫害困苦に至りては、世にも甚だしきものであつた。パウロはステバノより偉大であつたかも知れぬ、しかし二人が人物の類似は炳乎(へいこ)として明かである。

パウロの傳道はステバノに似て甚だ獨立直往であつた。彼は肉に於て又靈に於て十二使徒より獨立して居た。パウロの此態度は加拉太書第一章に於て特に明瞭である。其第一節、十節、十一節、十二節、十六節、十七節、十九節、廿二節の如き彼の獨立的態度を示して遺憾ない。且彼は其思想に於て世界的なりしため、猶太の律法的臭味を帶べる基督信者(所謂ユダヤ派)と戰つて、唯ひとり最も徹底せる福音主義を宣傳し、以てイエスの生命を律法の把持より救ひて之を世界の廣野に放たんと力めた。彼はかくして益々孤立となり、益々奮鬪の人となつた。彼が此獨往の精神――この孤高の健鬪――これ彼のステバノと酷似せる重なる點である。

ステパノが希臘的猶太人（ヘレニスト）であつたと對して、パウロは「ヘブル人より生れたるヘブル人」（腓立比書三の五）と自ら稱した。しかし之はたゞ己の國籍を明示した語であつて、彼は實に立派なヘレニストであつたのである。彼は希臘的教育を可成に受けてゐた。彼の書翰はパリサイ宗の法教師たりし彼の昔を語ると共に、その希臘思想の痕跡を處々に露はしてゐる。

されば パウロの思想の超猶太的、超律法的、心靈的なりしことは、ステパノに似てステパノよりも甚だしかつた。パウロが靈的信仰の高唱者たりしは誰も知る、敢て茲に詳述するを要せぬ。又パウロの思想に於てイエスキリストと其救濟とが中心たることも茲に例證するに及ばぬ、パウロの書翰全部に明である。パウロの所說は聖書に表はれたゞけのステパノのそれよりも博大高遠であつた、しかし二人の間の相似は否認し得られぬ。

かくの如くステパノとパウロとは相似て居る。たゞへ二人の間に直接の關係はなか

つたとしても、パウロはステパノの進展せる者、ステパノはパウロの未完成なる者と云はざるを得ぬ。二人はイエスの生命の靈的繼承者である。

（三）

かく論斷するはあながち輕卒ではないと余は信ずる。その故は彼等二人をイエスと比較して知ることが出來る。

イエスは片田舍の工人にして、普道の教育はありしとするも、何等法教師としての教養を經なかつた。民の教育者としては彼は有形上の資格を缺いて居た。學者にあらざれば民を教へなかつた當時に於て、彼は實に教界の亂入者であつた。此點に於てステパノもパウロも等しくイエスに倣ひたる無資格傳道者であつた。共にこれ「工匠の棄てし處の石、家の隅の首石（おやいし）となれる者」であつた。

イエスは絕代の聖者であつた。故に其人物はステパノやパウロに比すべきではない。パウロの偉大もイエスに比しては日輪の前の月である。イエスはステパノやパウロよ

りも遙に多く聖德、慈光に溢れて居た、靜謐和平の他に類なきものがあつた。しかしイエスがステパノ、パウロと相似て聖靈に充ちたるは云ふまでもなく、時に激越熱旺の態度彼等に越ゆるものあつた。彼は聖フランシスの聖德とヂョージ・フォックスの熱火とを純化して、兼ね備へて居た。常は湖水のごとく靜かなる彼は、時としては火山の如く動いた。その神殿の掃淨の如きパリサイ攻擊の如き、彼の此一面を示して遺憾ない。我等はステパノやパウロの人物に於てイエスの片影を認めざるを得ない。彼等二人はイエスに似たる多難の生涯に迫害の甘きを味ひて、イエスの如く殉敎の死を遂げた。かくして彼等は「キリストの患難の缺けたる所を補」つたのである。

ステパノとパウロに似てイエスが直往獨立の傳道者たりしは云ふまでもない。邊陬、學乏しきの工人を以てして當時の敎界に我旗幟を立て、學者を恐れず、有司を憚らず、衆愚の聲に惑はされずして、唯ひとり斷々乎として神國の福音を高唱した。彼は天父のみに從つて孤獨の奮鬪を續け、人に賴らず、また惡魔の援助を斥けた、そして孤獨

の死を遂げた。イエスが救世の業に從ふの發途に立つや、惡魔は先づ彼を誘ふに金力に賴るべきことを以てした(馬太傳四の三)。次に人に賴り民衆の人望を基礎とすべしと誘つた(同四の五、六)。最後に惡魔に隨ふて世界を獲得すべきことを勸めた(同四の八、九)。イエスは之等の誘惑を悉く斥けて、神にのみ賴る孤獨の戰をなさんと決心した。而して彼は此決心を死するまで變へなかつた。死に迫つてさへも劍を以て我を防ぐの誘惑を斥けた(馬太傳二六の五二—五四)。「父と我とは一なり」とは彼の生涯の實證せし處であつた。

イエスはアラミ語を語るヘブル人であつた、希臘思想の直接感化を受けなかつた。しかしながら彼が比類なき敎訓の超猶太的、超形式的、超律法的たるは云ふ迄もない。そは全然精神的であつた、心靈的であつた、世界的であつた。ステパノ及びパウロの敎は、其精神に於てイエスの敎を學べるものたること云ふまでもない。

(四)

凡そ上述の如くイエス、ステパノ、パウロの三者は多くの點に於て相似て居る。生命の連續は其最も純粹なる形に於ては、イエスより十二使徒ならぬステパノ、パウロに及んだのである。使徒時代に於て、イエスの根本精神を最も能く享けたものはステパノとパウロである、(約翰傳を使徒以後の作と假定して)。思ふにイエスの眞生命が十二使徒によりて動(ウ)ともすれば猶太化せられんとするがために、神は希臘的猶太人(ヘレニスト)にして執事たるステパノを選んで最も純粹なる生命の繼承者となし、ステパノの死するや更に敵人の中よりパウロを拔きて之に代らしめたのではあるまいか。或學者は使徒等の猶太的基督敎がパウロの世界的基督敎に轉ずる「過渡」としてステパノを見て居る。ステパノとパウロがイエスの大靈に動かされし人たるは勿論のことであるが、進んで此三者間に大精神の繼續を認むるも不合理ではあるまい。

生命は生命を生ぶ。かくてイエスの生命は幾度か(或は恒に)敎會化、制度化、形式化せられんとするに係らず、凡て途に横る大巖巨石を破りて今にまで流動し來りて

已まぬ。之を規矩の中に收めんとする者をして然かせしめよ、生命は永劫に流れて盡きないのである、生命は永久に生命を生んで已まぬのである。(大正三年八月稿)

新約聖書の二大潮流

猶太的基督敎と世界的基督敎

○新約聖書は一人の筆に成れる一書ではない、多くの人の筆に成る諸書の輯合(しふがう)である。收むる所は二十七書の多きに達し、其記者は古代の傳說に依るも八人、近代の研究に依れば十二人又は其以上である。卷頭の馬太傳より卷尾の約翰默示錄に至るまで、其

文體に於て、其思想に於て、全く同一なるものはない。同じ記者の筆に成るものの間にさへ少からぬ相異がある。パウロの書きし帖撒羅尼迦前書と以弗所書とを比較して同一人の作にはあらずと思はるゝほどの差異を見出す。多趣多樣とは實に此書のことである。

○近代の聖書研究は二大潮流の新約聖書を横流することを認める。二大潮流とは猶太的思想と希臘的思想である、有形的信仰と心靈的信仰である、律法的救濟と恩惠的救濟である、國家的宗教と世界的宗教である、人種的思念と人類的思念である。そして此二大思潮の對立に於て初代教會の特徴を見、之に原始基督教の內的歷史を探らんとする――これ近代聖書研究の著しき一面である。

○有形的信仰の代表者は十二使徒の首導者たるペテロであつて、心靈的信仰の戰士は異邦傳道の勇者たるパウロである。ペテロ系の書と云へば馬太傳、馬可傳、雅各書、猶太書、彼得後者、約翰默示錄等であつて、パウロ系の書と云へば羅馬書以下のパウ

ロの書翰全部、希伯來書、彼得前書、約翰傳等を重なるものとする。路加傳、使徒行傳の如きは之をペテロ思想の產物と見るものあり、パウロ主義の提唱となすものがあり、學者の意見一致せざるやうであるが、之等は兩思想の影響を受けて居るものと思はれる。

○キリストが心靈的信仰を唱道して、國權に執する國家と教權に據る教會の上に立ちしことは云ふ迄もない。然るが故に、彼は國家の代表者たる有司と教會の代表者たる祭司等の殺す所となつたのである。さりながら彼は一面猶太人として、其脚は多く國境を出でず、「イスラエルの迷へる羊の外に我は遣はされず」と唱へ、或は民の不信を責め、或は國の滅亡を叫ぶ等愛國的の言動多く、又踰越節を守る等國家の風習に從ひし點もあつた。ペテロ等十二使徒がキリストの靈能に動かされて、生命賦與の熱旺なる傳道をなした心靈界の勇者であつたことは言ふまでもない。しかし彼等がイエスの猶太的方面に拘泥して、イエスの福音を世界の曠野に放つの度量なく、之に猶太て

ふ小さき外衣を着せたことも慥かである。

○ペテロ等は教會を建てた。使徒行傳第二章後半に記さるゝ初代教會の有樣を見よ。こゝに熱誠なる信者の信仰と雄偉なる生命の靈動とがある。しかし其外形の如何に甚だしく形式に泥めるよ、いかに甚だしく教會的なるよ。

ペテロ彼等に曰ひけるは、汝等おの〳〵悔改めて罪の赦しを得んがために、イエスキリストの名に託りてバプテスマを受けよ、然らば汝等も聖靈の賜を受くべし(三十八節)

とある。洗禮を受くる者は罪の赦免を得、且聖靈を受けんとは、甚しく教會的ではないか。

汝等この邪なる世より救ひ出されよ(四十節)

とは生活の改造を促す語として遺に適切であるが、直ぐ次に「其時この語を聞き納れし者はバプテスマを受けたり、この日弟子に加はれる者大凡三千人」とあるを見れば、

教會加入の意味を含む語と見ねばならぬ。而して信者は相互の交際を重んじ、常に聖餐會、祈禱會に列し(四十二節)、各自財産を提供して共産的生活を營んだ(四十四節、四十五節)と云ふのは、當時の信仰が個人的、心靈的なるよりは、むしろ團體的、教會的なしを示してあまりある。

信者は皆一處に集りて諸物を共にし、産業と其所有とを賣りて、各人の用に從ひ之を分與へぬ(四十四節、四十五節)

とは初代基督教の美はしき天國を見るが如くであるが、教會が凡てにして個人が無なる團體本意の教會主義の萠芽を茲に認めざるを得ないのである。(四章三十二節以下も同一のことを語つてゐる)。又教會が「すべての民に悅ばれた」とあるが(四十七節)、基督信者の團體が此世に歡迎さるゝを悅ぶは、今も昔も變らぬ教會氣質であつて、信者に生命の乏しき證據である。そして使徒が絶對の教權を有して信者に信仰の自由なかりしことは、次の語に照らして明かである。

彼等は常に使徒等の教訓を受け……（四十二節）。
是に於て恐怖人々の心に生ず、又使徒等に託りて多くの奇跡と休徴行はれたり（四十三節）。

○之を要するに十二使徒の建てし初代教會が、確實なる生命と美はしき信仰とを抱持し居りしにも係はらず、甚だしく猶太的色彩を帶びて、教權と律法とを以て濃く彩られしは明かなる事實である。イエスの生命は慥かに彼等の中に存してゐたが、彼等が之に猶太教の古き革袋を被せたことを否定するは難い。

○十二使徒側より出でし文書に、之等猶太的色彩の強きことも直ぐわかる。馬太傳と雅各書と約翰默示錄とは其絕好なる代表者である。馬太傳、雅各書の律法的なる、默示錄に終末、再來、地の改造等凡て猶太思想の色濃きこと、そこに有形的、民族的、教權的、律法的信仰を觀取せぬものはない。

○此猶太的束縛と相對してパウロ等の世界的解放のいかに鮮かなるよ。而してパウロ

の先驅者とも見るべきステパノの信仰の如何の心靈的なりしよ。抑も當時の傳道界に於てステパノのみ殉教の死を遂げて十二使徒に此事なかりしは、ステパノの信仰が最も反形式的なりしことを示して居る。そしてステパノの流を汲みしが如くにして、しかも獨一無二の境地に達したる使徒パウロは、猶太的基督教と戰ふて心靈的信仰を高唱するを以て其任務となした。彼がアンテオケに於て、ペテロを衆人稠坐の中に面責したのは、當に其然る所であつた（加拉太書二の十一以下）。又彼が常に「僞りの兄弟」と戰つたのは所信に忠なる行動であつた。

○パウロの書翰は何れも彼が心靈的信仰の發表である。加拉太書は律法的宗教に對する心靈自由の雄叫びである。羅馬書は信仰にのみ立つ世界的宗教の説明である。哥林多書は教會的信仰に對する眞信仰の辯護である。以弗所書、腓立比書、哥羅西書等、何れも精神主義の上に立つ信仰の披瀝である。

○希伯來書がパウロの流を汲む人の作であつて、其切實なる信仰の專ら心靈的なるは

誰人も疑はぬ處である。そして約翰傳が、パウロの思想を繼承して更に之を心靈化したる一大思想家の作であるとの學者の推定は、多くの信ずべき理由を以て維持せらるゝのである。

○吾人は約翰傳が心靈的福音書なることについて二三の證據を擧げて見たい。先づ第一に考へらるゝことは、共觀福音書と對立せらるゝ約翰傳全體の特色である。其特色、即ち共觀福音書と異る處の多かる中に、全體の調子の靈的であると云ふことを第一に數ふべきは明かである。馬太傳が冒頭にイエスの系圖を掲げ、路加傳が誕生物語を詳述せると對して、約翰傳は劈頭第一、「太初に道あり」の語を掲げて根本的斷案を下してゐる。そして、其「道」の本性を說き進み、「それ凡ての人を照らす眞の光は世に來れり」と云ひ、又「それ道肉體となりて我等の間にやどれり」と云ひて、キリストの降生を一語の下に斷定してゐる。茲に物と肉の衣は少しも着せられてない。說き方は專ら原理的である。此書の卷尾に至る迄橫溢せる靈味は全然猶太の臭味を脫してゐる。

○馬太傳はイエスを猶太人の王として見てゐる。東方の博士が「ユダヤ人の王として生れ給へる者は何處に在す乎」とて尋ね來りしとは、いかにも馬太傳的である。そして若し馬可傳がイエスを世界の救主として紹介し、路加傳がイエスを人類の救主として說述してゐるならば、約翰傳は正にイエスを神の靈的表現として提示するのである。「道」(Logos) と云ひ、「光」と云ひ、「神の獨子」と云ひ、皆其意味を有するのである。

○約翰傳に記さるゝ奇跡は「カナの婚筵」より「ラザロの更生」に至るまで七つある。共觀福音書に記さるゝイエスの奇跡は多く病者醫癒、殊に惡鬼排逐(exorcism)であり、且病者に對する同情を動機として行はれたものである。之に反して約翰傳所載の七の奇跡は神の子としてのイエスの榮光を顯はせしもので、病者醫癒はあれども惡鬼排逐は一もない。そして各奇跡の間に狹まるゝイエスの語は、敎訓と云ふよりも寧ろ「神の獨子」としての自證である。此聖語と彼奇跡と相伴ひ相待って、神の表現としての靈的基督を闡明するのである。

○約翰傳に「變貌」と「ゲッセマネの苦悶」のなきは一の大なる疑問である。共觀福音書に於て力說せる此二項目を、何故約翰傳作者は除いて居るのであらうか。思ふにこれ作者が初よりイエスを神の化身として說きしための自らなる結果ではなからうか。もし然りとすれば之も此書の靈的性質を證するものである。

○そして約翰傳全部にわたりてイエスの語は「我を信せよ」と云ふ自證を基礎として信仰の要道を說いたものである。之に何等道德的敎訓はない、實踐的倫理はない、主として靈的信仰そのものゝ提唱である。ニコデモに對する說法も、サマリヤ井畔の談話も、弟子に對する訣別の訓誡(十四章、十五章、十六章)も皆此點に於ては一である。之を共觀福音書の實踐的敎訓に豐かなると比して、何と大なる相違ではないか。所詮「靈的」と云ふ形容詞は約翰傳に附隨して離れぬものである。

○ペテロ的基督敎は世の終末に於ける「イエスの再來」を主張し、其時死者生者の皆一時に審判せらるゝを敎へ、「新しき天と新しき地」生れ、「聖き城なる新しきエルサレム備へ整ひ神の所を出でゝ天より降る」ありて(默示錄二十一章)、然る後吾人が永生に入るを說く。凡てこれ目以て見るを得べき事件又は現象である。以て如何に其有形的なるかを知る。

○之に反して約翰傳の再來、審判、永生は凡て心靈的であつて、人の心に起る靈的事實である。ペテロ的基督敎の精華たる默示錄の結尾にある「主イエスよ、來り給へ」の語は、眞に能くこの有形的信仰を代表せるものであつて、猶太的基督敎の凡ては此一希望に掛つて居るのである。しかし約翰傳の言ふ處によれば、イエスの再來は信者の心靈に降るイエスの靈であつて、信ずる各個人の心靈內に旣に事實として起りつゝあるものである。將來も常に然るのである。即ち一の連續的事件であつて、必ずしも世の終末に一回のみあるものではない。

我なんぢらを捨てゝ孤子とせず、また汝等に來らん(約翰傳十四の十八)

とある。「汝等」とは弟子を指したものである故、此約束は弟子の生存中に實現せられ

たものであるに相違ない。して見れば世の終末の再來の預言ではなく、イエスが死後聖靈として彼等の心に臨んだことを指したものであると見ねばならぬ。即ち「父必ず別に慰る者を汝等に賜ひて窮なく汝等と共に在らしむべし」と云ふのと同一事實を指したものと見るべきである。又、

もし人われを愛せば我言を守らん、且わが父は之を愛せん、我等來りて彼と共に住むべし（十四の二三）

と云ふ語を以て見ても、右の如きイエスの心靈的再來が、約翰傳の再來觀であることは明かである。

○審判とは約翰傳によれば今行はれつゝある事實である。左の如き語がある。

彼（キリスト）を信ずるものは審判かれず、信ぜざるものは既に審判かれたり、そは神の生み給へる獨子の名を信ぜざるによる。審判とは光世に臨りしに人その行の惡きに因りて光を愛せず反りて暗きを愛することなり（三の十八、十九）。

我言をきゝ我を遣はしゝ者を信ずる者は永生を有つ、かつ審判に至らず、死より生に遷れり（五の二四）。

即ち審判とはキリストを信ぜぬことである。光を受けよと曰はれて光を受けぬこと——此事が審判を受けたのである。そしてキリストを信ぜしものは審判を受けずして、現世にありて其儘既に永生に入つたのである、即ち心靈的に永生が彼の衷に始まつたのである。（ペテロ的基督教にありては、世の終末に於て、萬人神の臺前に立ちて審判を受くるので、信者と雖も其信仰の不足なるものは外の暗黑に投げ出さるゝと云ふて居る。然るに約翰傳はキリストを信ずる者は既に永生の特權に與りしなりと云ふ）。

○永生とは右の如きものである。前掲の五章廿四節の語なる「信ずる者は永生を有つ且……死より生に遷れり」は、此事を些の疑點なく明示して居る。又左の如き語がある。

誠に實に汝等に告げん、我を信ずる者は永生あり（六の四七）。

永生とは唯獨の眞神なる汝と其遣はしゝイエスキリストを知るこれなり（十七の三）。

○其他靈的新生を說きし三章三節―八節あり、靈的禮拜を勸めし四章二十三節、二十四節あり、約翰傳の心靈的福音書なることは誰人も否定し得ぬ處である。以上の說明を讀み來りし人は、約翰傳記者の信仰がパウロの流を汲みて、而もパウロよりも更に純心靈的に至れるものなるを知り得たであらう。吾人は約翰傳に於てパウロの思想の醇化、渾成、圓熟、完璧に達せしを認めざるを得ない。實に此書はパウロ派の心靈的基督敎の絕頂である。

○右の如くにして新約聖書に流るゝ二大潮流を眺め來りし余は、今其何れを選ぶべきかを定めねばならぬ塲合になつた。余自身は心靈的基督敎の方に多く傾く者である。しかし有形的基督敎と雖も「敎權の宗敎」として一概に排斥し去るべきでない。其外形は兎に角、其核心に多くの貴むべき眞理を藏して居る。且又初代敎會時代に於ては

其の中に靈的生命の大に働きつゝありしを疑ふことは出來ぬ。殊に此思想の代表者たる馬太傳、雅各書、默示錄等が種々の意味に於て偉大にして貴重なる書たるは云ふまでもない。要は全く一方の呑み去る處とならぬにある。心靈的宗敎貴しと雖も、一歩を過れば空理的、哲學的となりて實際的生活を離るゝに至る。ともすれば敎權的、形式的に固まりて頑瞑と排外とを生み易き律法的宗敎も、其中に含まるゝ健全なる生命を採れば、實際的信仰を生むに資する處が多い。吾人は一言の下に何れをも排斥すべきでない。

●而して吾人は如何なる思想を採るにしても、其中心にイエスキリストを置くことを忘れてはならぬ。彼を中心とすることが確實であれば、あらゆる思潮も亦以て我を研き我を勵ます所以である。パウロの左の語は極て貴重なる語である。

神の我に賜ひし恩に循ひて、われ賢き工師の如く既に基礎を据ゑたり……この基礎は即ちイエスキリストなり、もし人この基礎の上に金、銀、寶石、木、草、木稿

を以て建てなば各人の工は明かならん、かの日これを顯すべければなり、これは火にて顯はれん、その日おの〳〵の工の如何を試むべし、もし其建つる所の工たもたば賞を得、もし其工燒かれなば損を受く、されど己は火より脫れ出づる如く遂には救はれん(哥林多前書三の十一—十五)。

我等は「遂には救はれん」ために基礎を固く据ゑねばならぬ。これ根本問題である。そして其上に建つる我等の家は、良きほど貴きは勿論ながら、これ第二の問題である。これ飽くまで忘れてはならぬことである。(大正四年三月稿)

初代信者の信仰

帖撒羅尼迦前書の研究

(一)

○帖撒羅尼迦前書は使徒パウロの四大書翰と稱せらるゝ羅馬書、哥林多前書、同後書、加拉太書と共に最も慥かなるパウロの作である。腓立比書、以弗所書等所謂獄中書翰を全部疑ふ所の極めて懷疑的なる批評家と雖も、遂に帖撒羅尼迦前書を疑ふことは出來ぬのである。而して大多數の學者によりて、牧會書翰と希伯來書を除く外のパウロの書翰が悉く眞正なるものと認められつゝある今日、帖撒羅尼迦前書の純眞は益打ち毀し難くなつたのである。

○學者はその高等批評を以て事を定むるがよい。かゝる迂餘曲折に携はる遑なき我等

平信徒は端的に自己自身の斷定を下さねばならぬ。落款と無落款とは繪畫の眞僞を定むる標準とはならぬ、繪畫の眞僞を定むる標準は繪畫そのものゝ中に存する。バウロの眞作には其文字の中にバウロの眞作たる證據がある。彼の四大書翰を熟讀したる人が、一度轉じて帖撒羅尼迦前書に臨む時、そこに同一の精神と同一の鋭氣と同一の靈味が他の模倣をゆるさゝる程度に於て漲れるを看取せぬわけにはゆかぬ。實に此書に於て雄渾なる作者の筆の墨痕淋漓として躍れるを見る時、我等はこれが彼の記せし一大手記なることを確信せずには居られないのである。

○此意味に於て帖撒羅尼迦前書は同後書よりも有價値である。何となれば一讀せし時の第一印象を以て判斷する時、後者は前者ほどには「バウロ的」でないからである。たとへば其第三章に於て「命ず」と云ふ文字の四回用ひられしが如き其の一例である。後書も或はバウロの作なるべしと雖も、少くとも之れに於てはバウロは前書に於てほど强烈且明確に現はれて居ない。後書が前書と異なりて屢々疑はるゝも亦故あるのである。しかし今自分はそれについて此上云ふを要しない、たゞ後書と比較しての前書の値を暗示すれば足りるのである。

○帖撒羅尼迦前書はバウロの書翰中最も古きものである。近頃は加拉太書を以て尙古き書翰とする學者もあるが、加拉太書の年代に就ては異論多く俄に此說を承け納れ難いのである。そして帖撒羅尼迦前書を最も古しとするは多數の一致する處である。何れにするも之がバウロ書翰中最も古きか、又は少くとも最も古き物の一なることは明かである。そして學者はバウロの四大書翰に帖撒羅尼迦前後書を加へて彼の第一時代の作となし、其以外を以て彼の第二時代の作とする。前者は捕囚前の作、後者は捕囚後の作である。而して渾成と圓熟とに於ては後者まされど、純粹と熱誠とに於ては前者を採らねばならぬ。殊に前者のうちにありても最も早き作なる帖撒羅尼迦前書に於て、我等は絕大なる傳道者の初て抱きたる純粹なる信仰と思想と態度とを知ることが出來るのである。帖撒羅尼迦前書の價値は特に此點に於て著しい。

○然のみならず我等の帖撒羅尼迦前書に於て見る處は、最も原始的なる基督敎である。何となれば此書は單にパウロ書翰中に於てのみならず、新約全書のうちに於て最古の文書であるからである。(雅各書を以て最も古しとする人もないでもないが、多くは之を帖撒羅尼迦前書より數年乃至數十年後の作と見做してゐる)。もし四福音書に於て最も原始的なる基督敎を知り得べしとする人あらば、そは大なる誤りである。四福音書は概ね書翰以後の編纂に成るものであつて、使徒又は其弟子たる著者の眼を通して見たるイエスを傳へしものである。もとよりイエス其人を知るに於ては最上の憑據(ひょうきょ)であるが、最も原始的なる基督敎を知るがための最適書ではない。幸にも茲に帖撒羅尼迦前書の存するありて、我等は之に依りて紀元五十年頃の基督敎と基督信者とを知ることが出來るのである。(此書は早くも紀元五十年遲くも同五十三年に認められた)。この意味に於ける帖撒羅尼迦前書の價値は極て大なるものである。

○帖撒羅尼迦前書はその冒頭に於て

パウロとシルワノとテモテ、書を……テサロニケ人の敎會に贈る

と記してある。此三人が何の必要ありて又如何なる場合に此書翰をテサロニケ人に贈りしか。この問題に答へんとして我等は先づ使徒行傳に於けるパウロの活動を見ねばならぬ。第一回の傳道旅行を終へてアンテテケに歸還せしパウロは、止まること旬日にして第二回の傳道旅行に出で立つた。嚴格なる彼はバルナバの態度に慊(あきた)らずして之と分離し、シラス(シルワノ)を伴うて出立した(使徒行傳十五の三五以下)。途中に於てテモテを同行者のうちに加へた(同十六の一—三)。フルギヤとガラテヤを過ぎてのち小亞細亞に於ける傳道の路はふさがつた。彼は西の方トロアス港に下つて海を隔てゝ遙かに歐羅巴大陸と相對した。此時偉大なる聖望は偉大なる傳道者の心に起つた。彼は新生命の福音を歐洲大陸に傳へて以て

水の海をおほへる如くエホバを知るの知識地に充たん(以賽亞書十一の九)

日を來らしめんとした。彼はこの大希望に勇み立ちつゝ同行者と共に船出してマケド

ニヤに上陸した。これ福音の宣傳者がその足跡を歐洲大陸に印したる最初であつた。

○最初の傳道地はピリピであつた。こゝに彼等三人は福音宣傳者の受くべき當然の苦痛と歡喜とを得た、即ち大體に於て斥けられて少數の信者を獲た（使徒行傳十六章）。彼等は去つてマケドニヤの首府なるテサロニケに到つた。こゝに亦少數の信者が起つた。しかるにユダヤ人等の賤視と嫉妬は迫害となつて現はれ、彼等は「夜の間に急ぎ」て此處を逃るゝの已むなきに至つた。彼等はベレア、アテンスを經てコリントに到つた。此處にパウロはテサロニケ信者の安否を氣遣ふこと甚だしく、自ら訪ふ能はざりしためテモテをして之を見舞はしめた。師命かしこしとテモテはテサロニケに到つて信者の狀態を視た、そして師に復命した。その時彼等よりの書信をもたらし來つた。パウロは彼の復命に接し又此書信を見て直ちに返書を認むることゝなつた。これ即ち帖撒羅尼迦前書である。パウロ、シルワノ、テモテと三者の名を連ねし理由は茲に於てか明かである。書信の目的は迫害中に孤獨の信仰を維持する少數の信徒を慰め、且

勵ましさんためであつた。

○この意味に於て帖撒羅尼迦前書は、最も原始的なると共に最も純粹なる基督敎を傳ふるものである、最も純粹なると共に最も普遍的なる基督敎を傳ふるものである。何となれば、加拉太書は律法的基督敎を破碎するを目的とし、哥林多前後書はコリント敎會特有の問題に關し、羅馬書は基督敎と猶太敎の渾成を牛の目的とする等、各々特殊的なるに比して、帖撒羅尼迦前書は迫害中の少數信徒を慰むる書として勢ひ純粹たり且普遍的たらざるを得ないのである。そは凡ての眞なる基督信徒の生涯は苦難と孤獨を特徵とするからである。帖撒羅尼迦前書は凡ての場合に適用せらるべき書である。凡ての眞なる信徒に共鳴と同感とを惹き起すべき書である。

（二）

○以上に於て帖撒羅尼迦前書の特殊的價値を述べたる余は、其第一章に於てテサロニケ信者の信仰狀態を探つてみよう。紀元五十年頃に於ける歐洲大陸最初の信徒の有樣

は、第一章に於て生けるが如く我等の面前に躍つて居るのである。

○バウロは挨拶の後直ちに「汝等もろ〳〵のために神に感謝す」と云ふた(二節)。そして三節より其感謝の理由を幾つも擧げるのである。感謝の理由は即ちテサロニケ信者の信仰狀態の優秀なることである。そしてバウロの判斷の正確と所言の誠實とを知れる我等は、こゝに現はれたるそのまゝが歐洲最初の信者の信仰的態度であつたことを疑はぬのである。

○感謝の理由として先づ彼は、

これ汝等が「信仰の行爲」と「愛の勞苦」と「我等の主イエスキリストに於ける希望の忍耐」を我等の父なる神の前にて念ふが故なり(三節改譯)

と云ふた。信仰と愛と希望とは使徒バウロの力說せし處である。五章八節に於ても「晝につける我等は信と愛の護胸を着、救の望を冑として愼むべし」とすゝめてゐる。また有名なる「愛の稱讃」(哥林多前書十三章)の結論として「それ信仰と望と愛と此三

の者は常に在るなり、その中最も大なる者は愛なり」と說いてゐる。此三はバウロの全書翰に漲る色濃き色彩である。そして彼と離るゝことの出來ぬ彼の生命其者である。

○併しながら我等の注意すべきはバウロの敎說そのものではない、このバウロの敎說を事實に於て體現し得たるテサロニケ信者の態度である。見よ彼等は信望愛の三者を明かに體驗し、鮮かに體得したではないか。信仰を行爲に於て實現し、愛のために勞苦を敢てなし、希望より生ずる所の忍耐に安住せしは實に彼等であつた(三節)。それ行爲と勞苦と忍耐とは人間生活の三方面である。而して此三者を如何樣に營めるかに依りて其人の價値を判定することが出來る。そして大多數の人はたゞ自己のために行ひ、自己のために勞苦し、自己のために忍耐してゐる。主我と私利とが此三者の基となつてゐる。行爲の基礎を信仰に置き、勞苦は凡て愛のためにし、忍耐の源をイエスにある希望に置く者は蓋し此世の珍である。テサロニケの信者はかくの如き信者であつた。肉に屬ける人を變じてかくの如き靈に屬ける信者とせし原始基督敎は偉なるか

な。またその與ふる力を充分に享受して强き靈の人となりし初代信者は偉なりしかな。

○パウロは感謝の理由としてまた次のことを擧げた。

神に愛せらるゝ兄弟よ、またこれ汝等の選ばれたる事を知るによりて也（四節）。

神に愛せらると云ひ又選ばると云ふ、これ彼が後に羅馬書に於て說きたる豫定の敎義の萠芽とも見るべきものである。併し彼は未だ豫定と云はずして單に選擇と云ふた。萠芽であるだけそれだけ純粹なのである。而して使徒パウロがテサロニケ信者を以て「神に愛せらるゝ選ばれたるもの」と見做したるは、彼等が眞に信者らしき信者であつたからである。此世の人と全く異りたる彼等の行爲と勞苦と忍耐とを見て、彼は彼等の「選ばれし」を思はざるを得なかつたのである。彼は敎義として玆に「選擇」を說いたのではない。彼等の信仰の强健なるを見、彼等が世の人と全く異る世界に住するを見て、おのづから此語を發したのである。偉大なる使徒をして此言を發せしめし彼等は、決して今日の如き軟弱なる信者ではなかつた。

○第五節はラゲ譯の如く、

我等の福音は汝等に於て、たゞ言のみに止まらず能力及び聖靈によりて全き確信を獲たりき

と譯すを原意に近しと思ふ。與ふる者の福音は、言の外に力と聖靈を有し、受くる者は全き確信を以てする。パウロの福音が言のみに依らずして、力と聖靈とに充ちたるは誰人も知る處である。「言の智慧を用ひざるパウロの福音が「亡ぶる者には愚なるもの」にして「救はるゝ者には神の力なる」ことは皆人の知る處、又彼の特に宣べ傳ふるキリストが「ユダヤ人には躓くものギリシャ人には愚なるもの」にして「召された者には……神の力また神の智慧」たることは敢て珍らしき事ではない。玆に彼と彼の基督敎の特色が存すと雖も、帖撒羅尼迦前書の研究に於て我等の注意すべきは他の點にある。即ちかくの如き福音を受けし人が「全き確信」を以て之を受けた一事である。希臘語の plērophoria (full conviction, firm persuasion) である、充分に滿たさる

ゝことである、不可抗的なる證據を以て充分に打ち建てらるゝことである、理性と情意の凡ての應諾を以て確實に或眞理を受け入れることである。これ最も健全にして且最も確實なる信じ方である。そしてテサロニケの信者はかくの如き確信を以てパウロの「力と聖靈に充つる福音」を受けたのである。傳ふる者も能く傳へたり受くる者も能く受けたりと云はねばならぬ。茲に理想的傳道者に對して理想的信者が生れたのである。

○今日の如く基督敎が世界的宗敎として、文明國の宗敎として、又優秀なる宗敎として認められ居る時に於ては、之を受くる者の確信は早く起り易い。併し乍らその歐洲に初て傳へられし時に於て、人は未だ福音の價値を認めずして之を猶太敎の一派としつゝありし時に於て、之を羅馬大帝國の邊鄙なる一屬領より出でたる奇怪なる地方的宗敎と思ひつゝありし時に於て、しかも之を傳ふる者が位階の尊と勳章の美と風采の溫雅とを有せずして唯一介の天幕職工たりし時に於て、之を受け之を信じてしかも

充分の確信を以てするは容易の業でない。我等を彼等の境に立たせて想見る時、我等はたゞ彼等を歎稱するほかはない。

○全き確信を以て福音を受けたる彼等は又、

大なる苦難のうちに聖靈の歡喜をもて道を受け（六節）

てパウロ等及び主イエスに效ふものとなつたのである（六節）。即ち大なる苦難の中に聖靈の歡喜に醉ふ點に於て、彼等はイエス及びパウロ等に似たのである。大なる苦難とは彼等にのぞみし迫害を指すのである。大多數者たる不信者の嫉視と嘲弄と迫害を受けつゝ、數人又は數十人が信仰に立ちし時の特殊の苦難である。而して迫害の中に立つ點に於て眞の信者なりし彼等は、又此迫害の中に聖靈の歡喜に住せし點に於ても眞の信者であつた。特殊の苦難と特殊の歡喜と——此二者は眞信者の附屬物である。その一を缺いては全からぬ。苦難の中にあるものは多しと雖も聖靈の歡喜を以て之に處する者は少ない、聖靈の歡喜にあるものは多しと雖も基督者特殊の苦難にある者は

少ない。二者を兼ね有して彼等は眞の信者であつたのである。故あるかな彼等が迫害の中に孤獨の信仰を保ち得しや。

○彼等は右のごとき信者でありしために、「マケドニヤとアカヤにある凡ての信者の模(か)楷(た)となる」を得た(七節)。他の信者は皆な彼等を模範としたのである。試みに當時の地圖を按して見よ。多島海をへだてゝ小亞細亞と相對する歐洲大陸の尖端の一劃地はギリシヤである。地峽に依つて其北方に連なるはアカヤである。更にアカヤの北なるはマケドニヤである。知るべし、マケドニヤの一角より彼等はバルカン半島全部に信仰の模範を垂れたのである。のみならず、彼等が熱誠なる信者たる噂(うはさ)は「唯にマケドニヤ、アカヤのみならず尙ほ……すべての處に廣ま」るに至つた(八節)。マケドニヤ、アカヤ以外の凡ての處と云へば、思ふに小亞細亞方面を指したのであらう。彼等の眞實なる信仰的態度は海を隔てゝ亞細亞洲にまで及んだのである。彼等はかくの如くにして知らず〳〵大なる傳道をなした。實に眞正なる信仰を少數の者が把持する時に於

てその勢力は無限なのである。貴むべきかな少數無援の信者よ、慰めよ此世に於て孤獨なる信徒よ。

○而して人の噂に依れる彼等の特色は第一「偶像を棄て神に歸して活ける眞神(まことのかみ)に事(つか)へ」しこと、第二「その子(イエスキリスト)の天より臨(きた)るを待つ」ことであつた。眞神に事へる事とキリストの再臨を望むことゝ、此二つが人の噂にのぼりし彼等の信仰の特徴であつた。知るべし、彼等が神とイエスと此二つを信仰と希望の對象とせしことを。

汝等心に憂ふること勿れ、神を信ずべし、また我(イエス)を信ずべし(約翰傳十四の一)

とのイエスの遺訓は彼等によりて遺憾なく實現せられた。彼等は神とイエスを信じ得しがために、憂ふべき場合に立ちて憂へざるを得たのであつた。彼等の强固なる生活を說明し來りし余は、玆にその源泉を探りあてし感に堪へぬのである。

(三)

○帖撒羅尼迦前書の第二章と第三章とに於て我等の知る所は、傳道者としてのパウロの熱誠と信者としてのテサロニケ人の切實である。かの傳道の熱誠は萬人の歎稱やまざる處、たゞこの信仰の切實にいたりては往々にして看過され易い。しかし此書を文字のまゝに讀みて我等はそれを認むる外はないのである。

○第二章、第三章は專らパウロとテサロニケ信者の關係について記してある。理解を助くるため之を二部に分つを便とする。第一部は二章一節より十六節に至る間にして、茲に我等はパウロがテサロニケ滯在中の有樣について知ることが出來る。第二部は二章十七節以下三章全部にして、茲に記さるゝ處はパウロがテサロニケを去りし後の事柄である。この兩者に於て我等は異なる文字と異なる事實に接する。さりながら其精神にいたりては全く同一である。同一の生命と呼吸が明かに兩者を一貫してゐるのである。

○先づ第一部を見るに傳道者としてのパウロの態度はそこにいと鮮かである。二章一節—十二節がそれである。彼は「さきにピリピにて苦難を受け又屈辱を受け」た（二節）。この苦難と屈辱とは、使徒行傳十六章に於て明かなるが如く、福音宣傳者のみ受くる特有の迫害のためである。パウロはピリピに於て此種の迫害を受けた。「されど」かれは之に頓着せずしてテサロニケにてまた福音を說いた、しかも「大なる紛爭のうちにて」說いた（二節）、ユダヤ人の嫉視と妨害の中にありて說いた（使徒行傳十七章）。しかるのち彼は此處を去つて他の處に至つた。甲地に福音を語つて迫害に逢へば、去つて乙地に到りて倍舊の勇氣を以て語り、再び迫害に會すれば逃れて丙地に到る、かくの如くにして盡きざるがパウロの傳道法であつた（もし彼にも傳道法なるものがあつたとするならば）。

○彼の「勸說は惑より出づるに非ず、汚より出づるにあらず、亦詐を以てせず」（三節）、彼が福音を說くの心的根據は「神の選を得、福音を傳ふることを託ねられたるに」あ

り、而してその目的は「神を悅ばする」にある(四節)。決して「人を悅ばする」ためではない。彼の傳道はその本源と根據と目的とを全然神に置くものであつた。彼は唯神の忠實なる通辯であれば宜かつたのである。神と彼と、大宇宙のなかに唯二人立つてそこに傳道は開始せられた。人、同胞、人類は其時彼の眼に映らなかつた。彼は神と共にのみ事を計り事を開始した。而して偶々その前または後を通りし人の中、或者は彼に反對し若くは無關心であつて、或者は彼のために天國の榮光を見るに至つた。かくの如くにして、人を悅ばすためならずして神を悅ばすための彼の傳道は、つゐに多くの人を悅ばすに至つたのである。人を對手とせぬ點に彼の傳道の秘訣があつた、(もし彼にも傳道の秘訣があつたとするならば)。今日の敎會傳道が効果少きは、人を悅ばすことに日も亦足らずして、神を悅ばす工夫に於て足らざるためである。然り、人を對手とするためである、神を對手とせぬためである。彼等は福音の傳道法を牧會學、交際術、說敎術等に於て學ばずして、單純なる聖書の記事に於て學ぶべきである。

○パウロはかく人を喜ばすために福音を說かぬ。しかし乍ら他面に於て彼は非常なる愛心を以て人に對するものである。

かく汝等を慕ひて、たゞに神の福音のみならず己れの生命をも汝等に與へんことを喜べり、これ汝等は我愛するものなればも也(八節)

とは欺かぬ彼の心情の告白である。彼は「乳母その赤子を養ふ如く」(七節)、又「父がその子を待ふ如く」(十一節)に彼等を愛擁し、撫育し、彼等の悔改のためならんには生命を失ふも可なりとの決心を有つてゐたのである。實に至醇なる愛心である。人を對手とせずしてしかも人を切愛す、かくてこそ眞の傳道が出來るのである。

○人を對手とせず、故に「いつも諂ふ言を用ひ」なかつたのである(五節)。人を愛す、ゆゑに「事に藉せて貪ることを」しなかつたのである(五節)、また彼等の「一人をも累はせざるために夜晝工を作し」たのである(九節)。彼の自給は必しも彼の獨立のためのみではない、また實に人を累はせざらんためであつた。げに貴きは彼の愛のため

の勞苦である。

○神をのみ對手としてしかも人を熱愛する偉大なる傳道者に接したるテサロニケ信者は、まことに傳道者その人に相應しき信徒であつた。その事は二章十三節以下に於て明瞭である。パウロは彼等が「神の道を聞きし時これを人の道とせず神の道として受けたるを斷えず感謝す」と云ふてゐる。「召されて使徒となり神の福音のために選ばれたるパウロの切なる願は、その傳ふる所が、たとへ少數者になりとも、「人の道とせず神の道として」受けられんことであつた。そのために彼は己を小にして福音を大ならしめんとした。「我等この寶を土の器に持てり」と自ら稱したる彼は、その器をあくまで土の器としてそれに盛れるものの寶たることを示さんとした。即ち彼は「これ大に優れたる力は我より出づるに非ず神の力なる事の顯れんため也」と云ふた（哥林多後書四の七）。彼は己を美はしく、又は貴く、又は高くする時に、その背後に福音の光輝の隱るゝを懼れた。ゆゑに己れを鄙くして福音をして其光輝を充分に發せしめんと

した。されば彼は或時は人の前に「弱くかつ懼れまた多く戰慄」くことを意としなかつた。そして言と智慧の美れたるを以てせず、人の智慧の婉言を用ひなかつた。これ信者の信仰をして人の智慧に由らず神の力に由らしめんと、願つたからのことである（哥林多前書第二章）。彼が多くの苦難を忍び孤獨の生涯に堪へて、以てその獨立を終まで保ちしは、神の道の純正を失はざらんがための配慮であつた。まことに彼は「神の道」を「人の道」とせられざらんために、「神の道」をして飽くまで「神の道」たらしめんために、あらゆる卑下と苦難を厭はなかつたのである、あらゆる犧牲を甘受したのである。ゆゑにテサロニケの少數信者が彼より福音を聽いて、之を人の道とせず神の道となしたるは彼の大なる歡喜であつた。以て知るべし、テサロニケ信者の眞正なる信者なりしことを。福音に接して直に之を神の道として受け得る者は幸である。かくして彼の信仰と生命とはその正しき道を上進せずには居られない。

○先づ神の道として福音を受けたるテサロニケ信者は、その信仰に於て進まざらんと

するも能はない。而して信仰の進みし結果は不信者の嫉視と迫害を受けざらんとするも能はない。果然テサロニケ信者はその同胞の迫害を受くるに至つたのである。

兄弟よ、汝等ユダヤの中なるキリストイエスにある神の敎會に傚へる者となれり、そは彼等ユダヤ人に苦められし如く汝等も己が國人に苦められたればなり（十四節）

とパウロは云ふてゐる。ユダヤの信者等がその同胞たるユダヤ人に窘められし如く、テサロニケ信者も亦その同胞たるマケドニヤ人に窘められたのである。かくて彼等は眞の信者たる印記を身に佩ぶるに至つたのである。

○次に我等は第二部（二章十七節—三章十三節）に於て、パウロがテサロニケを去りし後の事を見ねばならぬ。此處に最も鮮かに表はるゝものは、パウロのテサロニケ信者に對する切々痛むがごとき愛心である。千九百年後の今日、不完全なる飜譯に依りても、彼がいと熾烈なる情感の鼓動といと豐けき生命の呼吸とは、その一語一語に傳

へられて讀者に逼るを感せぬわけにはゆかぬ。彼れは先づ彼等に會はんと企てしことを力强く發表してゐる（二の十七、十八）。そして自ら行く能はざりしため代理としてテモテを遣はしたことを記してゐる（二の十八及び三の一、二）。これ彼等を堅固くし彼等を慰め、「一人もこの患難に動かされざらんがため」であつた（三の三）。そして彼は遂に左の如くに彼の痛切なる愛心を表はしてゐる。

●晝夜切りに願ふは汝等の顏を見んことゝ汝等の信仰の足らざる所を補はんことなり、願くは神すなはち我等の父みづから我等の主イエスキリストと共に我等を導きて汝等に至らしめ給はんことを（三の十、十一）。

○彼は彼等を慰むるに、彼等にのぞめる患難が基督者に當然起るべきものであることを以てした。

それ患難は我等に定まれることなるを汝等自ら知れり、われ等汝等とともにありし時我等患難に遭はんとすることを豫め汝等に告げたり、今はたしてその如くな

れり（三の三、四）。

これ彼の慰藉の言辭であつた。彼は世の「淺く民の傷を醫す者」のごとくに、圓き語を以て事實を蔽ふことをしなかつた。患難の嚴寒の如く一時的なるを說いて、陽春の近きをのみ高く叫ぶ事をしなかつた。彼は前以て患難の到來を告げ置いた、そして今は患難は基督者に定まれる事であると明言してゐる。之を懼るゝ者は信仰を棄つる外はないと云ふ意が言辭の裡を流れてゐる。これ眞理そのまゝの提示であると共にまた最も根本的なる慰藉である。無慈悲なるが如き此斷定のなかに無限の慰藉が含まれてゐるのである。この斷定を以てのみ眞に患難に在る信者を慰むることが出來る。

○またパウロは彼等に自重心を起させて、彼等をして自らこの迫害に堪へしめんとした。彼は彼等が彼の望、また喜、また誇の冠、また榮なることを明かに云ふた（二の十九、二十）。そして「樣々の禍害と患難とのうちに」ありて、彼等の信仰の堅固なるに因りて安慰を得たことを記してゐる（三の七）。「汝等もし固く主に屬かば我等生

くべし」とまで云ふてゐる（三の八）。彼等のためにいとも熱き祈をなしてゐる（三の十一―十三）。これ彼の眞情ありのまゝの告知であると共に又彼等の自重を促せし語である。物の數とも覺えぬ少數の信徒をかくまで愛し且重んぜし處に、偉大なる傳道者の俤が髣髴として漂ふてゐる。かゝる牧者ありてこそ彼等は良き綿羊たり得たのであつた、かくてこそテモテも彼等の「信仰と愛の嘉音」を師に復命する外はなかつたのである（三の六）。耻ぢ[illegible]は多くの師を有しながら信仰の墮眠に耽れる今日の信者である。

（四）

○四章十三節より五章十一節までは再臨問題に關する敎である。嘗てテサロニケに傳道せし時パウロは主の再臨を力說した、そしてテサロニケの信者は堅く之を信じてゐた（一の十）。主の再び來るや茲に此世の大審判は行はれ、不虔の徒は永遠の暗黑に投げやられて、「光の子ども」は天國の榮光を味ひ得べしと信じてゐた。然るに茲に彼等

の間に一の疑惑が起つた、既に死せし者は如何、又主の再來前に死する者は如何、彼等の中信仰にありて眠れる者も亦永久の睡眠を續けざるべからざるかと。茲に於てパウロは四章十三節—十八節の語を以て彼等を敎へたのである。

それ主、號令と使長の聲と神の筬を以て自ら天より降らん其時、キリストに在りて死にし者さきに甦り、後に活きて存る我等彼等と共に雲に携へられ空中に於て主に遇ふべし、かくて我等いつまでも主と偕に居らん（四の十六、十七）。

かく敎へてパウロは彼等の憂慮を取りのぞいたのである。

○また彼等の中には再臨の時期を知り度しと願ふ者もあつた、或は近かるべき再臨の未だ無きに惑へるものもあつた。ゆゑにパウロは云ふた、時期を知ることは要なし、ただ其突如として起るを知り居れば宜しと。

兄弟よ、時と期については我れ汝等に書き贈るに及ばず、そは主の日の來ること盜人の夜來るが如くなるを汝等つまびらかに知ればなり、人々平和無時なりと曰

はん時亡滅忽ちに來らん……絶えて避くることを得じ（五の一—三）。

○また彼等の中には自己の薄信を覺りて審判の豫期に恐れ戰くものもあつた。されば パウロは慰めて云ふた。

されど兄弟よ、汝等暗黑に居らざれば其日盜人の來るごとく汝等に來ることなし（五の四）、そは神われらを怒に遭はせんと定めたるに非ず、我等の主イエスキリストに由りて救を得しめんと定め給ひたればなり、彼れ我等のために死にたり、是れ我等をして……彼と共に生かしめんとてなり（五の九、十）

と。げに深に慰安の言辭である。

○而して主の再臨を待望するについて最も大切なることは、その時期を知ることでもない、又徒らに恐怖に慄へることでもない、最も大切なることは平生の信仰生活である。ゆゑにパウロは勸めて云ふたのである。

されば我等ほかの人の寢るが如く寢ることをせず醒めて愼むべし（四の六）、晝に

つける我等は信と愛の護胸を着、救の望を冑として愼むべし（四の八）

と。愼むべしである、眞面目なれである、不眞面目なる勿れである、醉う勿れである。nēphōmen である、be sober である、nüchtern sein である、（恐れよではない、恐れ戰けよではない）。かくありさへあれば、主の再臨は光の子等にとつては少しも恐ろしい事ではない、否彼等を此の世の束縛より救ひて永遠の生命に入らしむるのである、信徒に取りて之より喜ぶべきことはないと。これパウロの說く所である。

○而して信徒の信仰的生涯は心靈の鍛錬を眼目とすべきであつて、こは主再臨の時その前に完からんためである。彼の彼等のための祈願の題目は常に此事であつた。

また願ふ主……汝等の心を堅くし、我等の主イエスその凡ての聖徒と共に來らん時汝等をして父の前に潔くして責むべき所なからしめんことを（三の十二、十三）。

同一の願が五章廿三節に繰返されてゐる。所謂基督教道德なるものは、帖撒羅尼迦前書に於ては專ら信者が主の再來に備ふる爲のものである。これ此書の全部殊に四章、

五章を讀みて我等の受けざらんとするも能はざる明かなる印象である。

○余は今こゝに再臨問題に關する余の意見を提示する心はない。たゞ一事の云ふべきことがある、それは大迫害に圍まれしテサロニケ信者にパウロが殊に此事を力說し、而して彼等が强く之を信ぜしことの歷史的事實なることである。使徒以後の大迫害時代の作なりと推定せらるゝ彼得前書、默示錄等にも此希望は極めて著しい。以て知る、再來の希望は信徒が大迫害に苦めらるゝ時に於て自ら湧起し、而して苦境に立つ彼等を最も强く慰むるものであることを。

* * * *

○帖撒羅尼迦前書一卷、こゝに初代信者の苦鬪と希望と信仰とはいと鮮かである。これ彼等が生ける生命の記錄である。世に稀なる名工の筆に描き出されて、彼等の切實なる精神は彼等と境遇を等しうする基督者の心に永遠に宿ることであらう。彼等の信じたる明確なる基督教は、近世の茫漠たる新基督教とは全然その品質を異にしてゐる。

その外形は如何にもあれ、彼等の信仰の核心は永刧の眞理であらねばならぬ。我等もまた彼等にはげまされて、明確かれ等の如き信仰と希望を把持せねばならぬ。

（大正五年八月稿）

大事の依託

基督信者の責任

誠に實に汝等に告げん、我を信ずる者は我行す處の事を行さん、且之より大なる事を行すべし、そは我れ我父へ往けばなり（約翰傳十四章十二節）。

（一）

これはイエスが此世を去らんとするに臨みて、弟子に語りたる多くの著しき語の中の一である。之を文字通りに（literally）解すべきか、或は形容的に（figuratively）解すべきかは、輕々しく論斷すべき問題ではない。短なりと雖も是れイエスの發し給ひし語である。その解釋如何によりて我等は深き眞理を發見することもあり、又見逃すこともあるのである。

此節の傳ふる思想を次の如く三分することが出來る。

一、**我を信ずる者は我行す所の事をなさん**＝イエスを信ずる者はイエスが行せしと同一の事を行すを得。

二、**且之れより大なる事をなすべし**＝右に止まらずして信者はイエスの業爲より大なる事を行すを得。

三、**そは我れ我父へ往けば也**＝其故はイエスが父なる神のもとに往きし故なり。

そして「文字通りの解釋」とは之を文字のまゝに事實と認むる事である。換言すれば基督信者はイエスと同一の業爲――否それより大なる業爲を行し得と信ずることである、少くともイエスは此事を豫言したのであると認むることである。そして此解釋は當然困難を含む解釋である。基督信者にして誰か己れをイエスと等しうするものがあらうか。況してや己をイエス以上と認むるが如きは夢にも爲し得ない處である。して見れば信者がイエスと同等又は以上の行爲を實現し得べしなどゝは、たとへイエスの語と雖も信ずるを難しとする所である。

茲に於てか「形容的の解釋」が生れるのである。此解釋に依れば此語を以て信仰の力を形容した者と認むることになるのである。イエスを信ずる事は高尚にして偉大なる行爲の源であると云ふことを、此語を以て比喩的に述べたこととするのである。要するに此語を以て「イエスを信ずる者は大事を爲し得べし」と云ふ意味を力説したものに過ぎぬとなすのである。決して文字通りに解すべきものではない、一の形容に

過ぎぬと云ふのである。

此解釋の支持せらるゝ第一の根據はそれが安全であると云ふ點である、それに困難が伴はぬと云ふ點である。信仰は力なりと云ふことは事實上正確である故、此解釋の傳ふる內容は少くとも事實であるに相違ない、英語を借りて云ふならば so far it is true（それ迄は慥か）である。然るに文字通りに解して、信者がイエスと同等又は以上の業爲を實現し得べしとなすは、事實に背くやうに思はれる。故に比喩的解釋は極めて安全なのである。

此解釋の支持せらるゝ第二の根據は、イエスの語の中に他にも之に類する比喩的の語が見出さるゝ點である。

我れまことに汝等に告げん、もし芥種の如き信あらば此山に此處より彼處に移れと命ふとも必ず移らん、又汝等に能はざる事なかるべし（馬太傳十七の二十）。

信ずる者には左の如き奇跡從ふべし、我名によりて惡魔を逐ひ出し、異邦の方言

を云ひ、また蛇を捕へ毒を呑むとも害なく、又手を病む者に按けなば即ち癒えん（馬可傳十六の十七、十八）。

共に信仰の力を比喩的に說いたものである。故に信仰の力の比喩的力說（エムフヘシス）は他にも類例があつて、決して不合理ではないのである。（佛敎の觀音經にも此種の力說的又は誇張的文字のあるは人の多く知る處である）。

然しながら玆に考一考すべきことがある。凡そ言語には比喩的にのみしか取れぬものと、比喩的と文字通りと孰れにも解せらるゝ者とがある。そして後者の場合に於ては出來るならば文字通りに取るべきは理の當然である。今前揭の二つの引例を見るに、「山に移れと命ふとも必ず移らん」とか「蛇を捕へ毒を呑むとも害なし」など云ふのは、比喩的にしか解せられぬものであるとは、吾人の常識の認むる處である。然るに吾等が研究の主題たる約翰傳十四章十二節は比喩的にも文字通りにも何れにも解することが出來るのである。故に出來るならば文字通りに取るを以て宜しとするのである。そして余は之を文字通りに取らんとするものである。

(二)

先づ第一にイエスが此語を發せられ之時を考へねばならぬ、即ち此語はイエスが死に近づいて述べられた語である。されば「我爲す處の業（わざ）」とは彼が生時の業爲を概括的に稱（い）ふたものと見ねばならぬ。之をいかに長く見ても、彼が生と死に於ての業――即ちベツレヘムよりゴルゴダに至るまでの行動を指したものである。短く見れば三年間の公生涯中の事業を指したものである。何れにするも、甦（よみがへ）りて「神の右に座し」たる後のキリストの聖業を指したものでないことは慥かである。

イエスが其生涯に於て爲せし事業は、根元的には絕大なるものであつた。しかし玆に一事の注意すべきがある。彼の事業の絕大は救濟の根原を据ゑしと云ふ點に存して、救濟の普及弘布と云ふ點に存しなかつた。彼は三年間の傳道に於て幾許の信者を作り得しぞ。衆愚の彼を見んと狂亂するは多かりしも、眞に彼を信ぜしは果して誰々ぞ。

辛く選り出したる十二の弟子も、一人は彼に背き他は悉く彼を棄て去つたではないか。彼の生時に時ける救濟事業は外形的には全然失敗に終りて、萬民を救はんとせし彼は一人の眞正なる追從者をも得ずして、屢々此世の不信に悲痛の聲を絞るの已むなきに會し、遂にはたゞ一人十字架上の人となつたではないか。之を釋迦に比し又マホメットに比せよ、如何にイエスの此世に於て成就せし處の數量的に小なりしぞ、否皆無なりしぞ。唯彼の非業の最期が却て救濟の根本を確立し、彼の復活が彼の生命の絶對なるを證して彼は永遠の救主となつたのであるが、彼が生涯の事業を其外形に於て見る時、決して成功又は絶大を稱し得べきものではない。

彼を去つて使徒パウロに至らんか、吾等は此點に於て其全然異るを見るのである。見よ彼の救濟事業の如何に成功せしかを、彼の傳道區域の如何に廣大なりしかを。イエスが「イスラエルの迷へる羊の外に我は遣はされず」と稱して其宣教を自國に止めしに反して、パウロは廣く當時の羅馬世界に福音の種子を蒔いて、しかも偉大なる成

功を贏ち得たではないか。かくして彼に因りて基督教は世界の宗教となつたのである。そしてパウロの事業は福音の弘布と云ふ點に於てのみ絶大なりしにあらずして、其組織と云ふ點に於ても絶大であつた。即ちイエスの福音を一の組織ある基督教となしたのは彼であつた。救濟の本義を明かにし、イエスの福音に明確なる形を與へて之を世界に放つたのは彼であつた。基督教を基督教となしたのは主として彼の力であつた。

彼の事業はかくも偉大であつた。故に今や或人は曰ふのである、基督教の始祖はイエスにあらずしてパウロであると。又或人は曰ふのである、我等はパウロを去つてイエスに還らねばならぬ、パウロの學究的煩瑣を去つてイエスの原始的單純に還らねばならぬと。又或人は云ふのである、パウロがなかつたならばイエスの福音は改良せられたる猶太教として猶太の國教たるに止まつたであらうと。吾人は今之等の諸說について論じようとはしない、たゞかゝる說の出づる程にパウロの事業の偉大であつたことは注意すべき點である。

而して基督教史に於てパウロに似たる大成功を遂げたる偉人は少くない。ルーテルも、カルビンも、フチックスも、ウェスレイも、皆この種の人であつた。實に彼等は或意味に於てイエスに等しき業、又はイエスより大なる業を行したる人々であつた。否我等は必ずしも斯かる偉人をのみ掲ぐるに及ばない。無名の基督信者にして此世に於ける事業に於てイエス以上に成功した人は少なくない。數多の靈魂を救ひし傳道者、愛の實現に於て大をなせし事業家、凡そ此種の人は今も昔も多いのである。されば我等はイエスの「我を信ずる者は我行す處の業をなさん」との語を、文字のまゝに信じ得るのである。否更に進んで「且之より大なる事をなすべし」との語を其儘に信ずるのである。

(三)

しかし茲に考ふべきは「そは我れ我父へ往けばなり」との聖語である。之は何を意味するであらうか、又如何なる意味で前の語の理由となるのであらうか。信者がイエスよりも大なる事を行し得るのは、イエスが父の御許に往きし故なりと曰ふ。抑も之は何の意味であらうか。之を了解するには次の十三節、十四節を見ねばならぬ。十三節、十四節は曰ふ。

汝等すべて我名に託りて求ふ所の事は我れ凡て之をなさん、父の榮の子に因りて顯はれんがため也、若し汝等何事にても我名に託りて求はゞ我れ之をなさん

と。之を十二節の「そは我れ我父へ往けばなり」と云ふ語と續けて考ふるに、イエスが天父の許に往きし後は天父に代りて信者の希願に應ぜんと云ふ意となるのである。「我れ凡て之をなさん」である、「我之れをなさん」である。信者の求むる處をイエスが爲すのである、換言すれば信者を通ほしてキリストが動くのである、又換言すれば聖靈が信者の中に臨みて業爲をなすのである。而して此事はイエスの死後千九百年間の事實であつた。將來も此世のある限り此通りであらう。キリストは聖靈として信者の心に臨み、聖靈は信者の中に於て業爲をなすのである。パウロの大業は要するにパ

ウロを通ほしてキリストの爲した處である。凡て此世に於ける靈魂救濟の業は、直接此事に當りし信者を通してキリストの爲せし處である。聖靈の働きがイエスの死後今日まで繼續して居るのである。

われ父に求めん、父必ず別に慰むべし、之は即ち眞理の靈なり（約翰傳十四の十六）

とある。之と等しき意味の語が十五章二十六節にもある、又次の如き語がある。

わが名に託りて父の遣はさんとする慰むる者即ち聖靈は衆理を汝等に敎ふ（同十四の二六）。

之と等しき意味を十六章の十三節が傳へてゐる。また、

我が往くは汝等の益なり、もし往かずば慰むる者汝等に來らじ、若し（われ）往かば彼れ（慰むる者）を汝等に遣らん（十六の七）

とある。皆イエスが訣別の語である。而してイエスの約せし如く、聖靈はイエスの死

後イエスを信ずる者の衷に臨みて靈魂救濟、現世聖化の大業をなしつゝ來つたのである。そして其働くや必ず信者を通してゞある。故に之を信者の側より見れば、信者は聖靈に託りてイエスが生前の事業よりも大なる事業を爲し得るのである。パウロやルーテルは其絶好なる實例である。茲に於て我等は

誠に實に汝等に告げん、我を信ずる者は我行す處の事を行さん、且之より大なる事を行すべし、そはわれ我父へ往けば也

との語を文字其儘に解して、茲に聖業の秘義を學び、又聖靈に因る大事遂行の希欲を抱くことが出來るのである。

（四）

神を愛の神として見る時、われ等の最も不審に堪へざるは聖旨の天に成る如く地に成り居らぬ現下の狀態である。如何に此世の不完全にして惡虐と悲慘とに充つること よ。非道なる少數の强者は高きに居りて正直なる多數の弱者を苦しめ、正義は勢を得

ずして不義は到る處に横行して居る。人類相殺の慘劇は文明國に於ても尙且つ行はれて、徒らに人類は惡魔の物凄き笑に呪はれて居る。道義の敗頽は世界一般の實狀である。信仰の光は基督敎國に於てさへ微かである。況してや異敎國に於て暗黑の中にもがへて居る者はどうして慰められやうぞ。然るに神が全智全能にして「人の爲し得ざる所は神の爲し得る所」であり、且愛の神であるならば、現世を此儘に棄て置き給ふは何故ぞ。速かに其能はざる所なき力を揮ふて一擧に此世を天國となし、以て「聖旨の天になるごとく地にも成らせ給」ふべきではないか。必竟神なる者は存在しないのであつて、人間が「神よ神よ」と叫ぶのは空しき叫喚に過ぎぬのではないかと。疑問一たび茲に至れば篤信者も亦信仰を危うせんとする。況んや之を理由として神の愛を信ぜぬ人の多いのは無理ならぬことである。

神は宇宙を造り給ふた、故に造花の一片にも或意味に於て神は宿るのである。テニスンが路傍の薔薇花に神の愛を拜し、ウォルヅヲスが巖上の櫻草に宇宙の父を認めたのは當に其然る處であつた。此意味に於ては此世に神の靈の宿れることを認めざるを得ないのである。然し吾人は神の靈は聖靈に於て、キリストを通して、殊に信者の心に臨むものであることに注意せねばならぬ。人の靈と交はる聖靈としては、神は主としてキリストを信ずる者の衷に在り給ふことを我等は認める。從て神が此世に對して働くのは信者を通してである。神は聖靈として信者の心靈に臨み、信者の心靈より他の人に及ぶのである。宇宙の主としての神は萬物を統べ給ふのであつて、此意味に於ては神は此世に對して直接に働き給ふのであるが、しかし人間の心靈に訓化靈激を與ふるには、先づ聖靈として信者の心に臨み、其信者より他に及ぶのである。

イエスの訣別の語に於て之を見よ。

こは即ち眞理の靈（聖靈）なり、世これを受くること能はず、そは之を見ず又知らざるに因る、されど汝等は之を識る、そは彼れ（聖靈）汝等と共に居り且汝等の衷に居れば也、我れ汝等を捨てゝ孤子とせず復汝等に來らん、暫くせば世われ

を見ることなし、されど汝等は我を見る、われ生くれば汝等も生きん（約翰傳十四の十七、十八、十九）。

即ち世は（世人の多くは）聖靈を受けない、聖靈は此世一般には臨まない、唯キリストを信ずる者と共にのみ在ると云ふ意である。そしてイスカリオテならざるユダが、「主よ如何にして自己（みづから）を我等に顯し世には顯はさざる乎」と、誠に能く我等の疑問を代表して問ふた時、イエスの答はかうであつた。

人もし我（キリスト）を愛せば我言を守らん、又我父は之を愛せん、我等（父とキリストと）來りて彼と共に住むべし（約翰傳十四の二三）。

實に神の靈はキリストを信ずる者にのみ充分に注がれるのである、そして此世一般には臨まないのである。其の何が故に然るかは我等之を知らない、しかし是れイエスの約束であつて、且我等の實驗的に理性的に承認する一の事實である。そして之れ神が愛なるにも係らず現世の不完全なる理由である、聖旨が天に成れる如く未だ地には成

らぬ理由である、此世に慘虐横恣の多き理由である。神は此世を放棄し給ふのではない、世が神の靈を受けぬのである。之が此世の不完全なる原因である。

かく神は聖靈として信者と共に在る。されば此世にして少しなりとも改善せられ、聖化せらるるならば、それは主として聖靈が信者を通して他に及んだ時である。言ひ換へれば信者がキリストに在りて他の人を聖化し得た時である。即ち神を信ずる者が主に在りて他の一人に悔改を促し得た時は、それだけ現世改善が實現せられたのである。かくて現世改善の大業は信者に委ねられた事である。彼は現世の不完全に神の愛を疑ふが如き事をやめて、速かに改善の大業に當るべきである。斯く云ふたとて勿論信者自身に此大能力があるのではない、信者を通して働く神の大業に信者が翼賛するだけのことである、イエスの大旆（たいはい）の下に馳せ行いて一兵卒となるだけのことである。さりながら靈魂救濟、現世改善には大に信者の働きを必要とする、故に彼は自己の責任の大なるを感じて、勇氣と自重心とを以て大事遂行に向つて進むべきである。かく

して彼は「我を信ずる者は我行す處の事を行さん、且之より大なる事をなすべし」とのイエスの約束を實現すべきである。

されば吾人は大事遂行の希欲を抱くべきである。神に頼りて靈魂の救濟、現世の改善に當るべきである。イエスは訣別の語に於て之を我等に依託したではないか、そして聖靈として吾人の心に臨みて今吾人を靈激しつゝあるではないか。（大正四年二月稿）

預言者エゼキエルと其福音

舊約に於ける新約の萌芽

（一）

紀元前五百九十七年、ユダの王エホヤキン（又の名エコニア）はバビロン王ネブカドネザルと戰ふて敗れ、國の精華七千人と共にバビロンに遷された。此時國は半ば亡びた。殘留者はゼデキアを立てゝ王となした。後十一年にして首都エルサレム陷落し、民は復バビロンに遷された。此時國は全く亡びた。

國の淆亂衰亡は偉人の出現を妨げぬ、否却て之を促す。國亂れて忠臣は現はれざるを得ない。此猶太亡國史を飾るべく二人の大預言者が現はれた、エレミヤとエゼキエルこれである。甲は肩摩轂擊のエルサレム市中に於て、乙は異邦ケバル河畔の流寓に於て、東西相呼應しつゝ、追放亡滅の非運の中に、各々其屬する民に向つてその偉大なる叫を揚げた。二人は其性情に於て大に異なつてゐた。甲は涙の人であつて乙は理の人であつた、甲は激情の人であつて乙は組織の人であつた、甲の直情徑行に對して乙は嚴肅自制を守つた。甲が「涙の預言者」と曰はるゝに對して乙は「立法的預言者」

と曰はれる。然しながら二人は其心の內奧に於て同一の人であつた。彼等は同一の核子を包むに違つた肉皮を以てした。我等はエレミヤに對すると同一の價値判斷を以てエゼキエルに臨まねばならぬ。

エゼキエルはエレミヤと等しく祭司の子であつた（耶利米亞記一の一及び以西結書一の三）。曾てテコアの牧人アモスを起して預言者と爲し給ひし神は、今この國家の逆運に當りて祭司の家より二人の預言者を起し給ふた。神は階級と性情とに依て人の價値を左右にし給はないのである。エレミヤはエゼキエルの先輩である。後者の若くしてエルサレムに在るや屢熱烈火の如き前者の大預言に血を湧した事であらう。彼の思想が大體に於てエレミヤと一致せるは學者の認むる處である。紀元前五百九十七年、エホヤキン王と共に七千人の猶太人がバビロンに捕へ遷さるゝや、エゼキエルも其一人としてケバル河の邊に西の方遠く故國を偲ぶ身の上となつた。然るに彼の同胞は追放の逆運に會して、尙其罪と汚濁とを去らなかつた。絕望は彼等をして自暴自棄に陷

らしめた。偶像崇拜は依然として行はれ、僞の預言者と筮占師とは民の中に權威を有して居た。（耶利米記廿九章及び以西結書の處々に此事は明かである）。若き祭司は悲憤に戰きつゝ自己の周圍を見た。さはれ語るべき時があり默すべき時がある。彼は滿腔の慷慨を心に藏めて五年の間を默想の中に費した。五年の後彼の思想は熟した、一大靈感は彼の全心を領した、彼は遂に祭司の衣を脫いで預言者として立つた。かくて「預言者エゼキエル」は生れた。

以西結書一章—三章廿一節は、彼が豫言者として立つに至りし內心の經過を語るものである。捕囚の第五年目に、彼はケバル河畔にエホバの大なる靈光に觸れた。其靈光の莊重雄嚴を言ひ表はさんとして、彼は象徵的文字を以てする外はなかつた。これ即ち第一章の描く處である。これ彼の心靈に於て感受せしエホバの榮光の有形的發表である。これに物的神觀を認むるが如きは豫言者の心と語とを誤解するものである。エホバが彼に語りし語は即ち豫言者として起ちし時の彼の覺悟を示すものである。

我れ汝をイスラエルの人々に遣す、即ち我に背ける叛逆の民に遣はさん、彼等と其先祖我に悖りて今日に至る、その子女等は厚顏にして心の剛愎なる者なり、我れ汝を彼等に遣す、汝彼等に主エホバかく言ふと告ぐべし、彼等は之を聽くも之を拒むも豫言者の己等の中にありしを知らん、汝人の子よ（人の子とはエゼキエルのこと）、たとへ蔦と棘汝のまはりに在るとも亦汝蠍の中に住むとも之を懼るゝ勿れ、それ彼等は悖戻る族なり、彼等これを聽くも之を拒むも汝我語を彼等に告げよ（二の三―七）。

これ彼が其衷心に於て神の命と感じたる處である。一語一語に彼の其使命に對する領解と確信とが現はれてゐる。これほど深き領解と之ほど強き確信とを以て其天職遂行に入りし人は少ない。其出發點に於て深く且強かりし彼は其一生を通じて深く且強くあつた。

神は尙ほ語と靈とを以て其豫言者を勵ました（二の八―三の十四）。しかし豫言者たるべきは彼は、其使命のあまりに重きに一度は「驚きあきれ」た。彼は其民の間に茫然として七日を費した（三の十五）。彼の憂ふる處は民が彼の警告に耳を傾けざることであつた。七日の後エホバの聲はまた彼の耳を撲つた。

我れ汝を立てゝイスラエルの家のために守望者（watchman）となす、汝わが口より言を聽き我に代りて之を警むべし、我れ惡人に「汝必ず死ぬべし」と言はんに、汝彼れを警めず、彼を警め語り其惡き道を離れしめて之が生命を救はずば、其惡人は己が惡のために死なん、されど其血をば我汝の手に求むべし、されど汝惡人を警めんに、彼その惡と其惡き道とを離れずば彼は其惡のために死なん、されど汝は己の靈魂を救ふなり（三の十七―十九）。

彼はたゞ「守望者」として警告の聲を發すれば宜いのである。民が彼に聽いて悔改むると彼に聽かずして悔改めぬとは彼の關する處でない、彼はたゞ預言者の務をなせばよい。もし之を怠る時は責任は彼に歸する。彼にして其務を果たす以上、民の聽くと

聽かぬとに係らず、彼自身の靈魂(たましひ)は救はるゝと云ふのである（三章廿節、廿一節をも參照)。寔に是れ神の言を傳ふる者を最も深く慰むる語である。斯くの如き信念ありて其職に入らんか、彼は成敗を超越して常に晏如として其業に從ふことが出來る。預言者エゼキエルの强固なる意志と其一絲亂れざる態度とを見て、我等は其の因つて來る處深きを思はざるを得ない。

（二）

かくの如くにして彼は遂に預言者として立つた。後年彼の預言を彼れ自ら蒐輯したものが即ち以西結(エゼキエル)書である。四十八章より成る此書を前後の二篇に大別することが出來る。即ち初の二十四章は前篇にして猶太滅亡以前に屬するもの、後の二十四章は後篇にして滅亡後の預言である。以西結書は默示文學の一である、全篇象徴(しるし)と幻像(まぼろし)とを以て充ちて居る。其點に於て全く約翰默示錄と同一である。(默示錄は以西結書より多くの象徴語を借用した)。しかし以西結書は之を讀みて註解なくして其儘了解すること

が出來る、其點に於て全く默示錄と違つてゐる。我等はエゼキエルの思想を學ぶ爲に、先づ前篇即ち猶太滅亡以前の豫言（二十四章迄）を見よう。

彼は猶太人のバビロン追放を以て民の罪惡深重のために下りたる天の刑罰となした。また故國にある殘留者の衰運をも同一の意味に於て見た。刑罰である、併しながら唯の殘酷なる刑罰ではない、彼等に悔改を促すための天の警柝(けいたく)である。故に彼等は罪を悔い、そして忍んで其服役の滿つる日を待つべきである。其愆(とが)の宥さるゝ日を待つべきである。悔改と忍耐とは今の彼等にとつては最も必要なるものである。然るに彼等は依然として舊き罪の道を歩いてゐる。否彼等の非運は彼等を自暴自棄の民と化し、彼等は層一層の罪惡と昏迷とを重ねてゐる。あゝ斯くの如くにして改めずんば猶太國は遂に亡ぶる外はない、エルサレムは遂に陷落するにきまつて居る、刀を免かれて生き殘れるものも他鄉に追放せらるゝに相違ない。あゝ我國の滅亡、我民の壞亂、今や目前に迫れりと、これ彼の預言の第一題目である。

第四章はエルサレムが包圍されて大饑饉に陷る有樣を描いたものである。預言者の想像は其狀況を生けるが如く目の前に見たのである。第五章は罪の結果としてのエルサレム滅亡の光景である、民が飢饉と疫病と刀とを以て斃るゝ光景である。第七章はイスラエル滅亡の物凄き預言的描述である。左の如きは其一節である。

外には劍あり、內には疫病と飢饉あり、田畑に居るものは劍に死なん、町の中に居るものは飢饉と疫病之れを滅すべし（十五節）。

第八章―十一章は彼の幻にのぼりたるエルサレム滅亡の光景である。十二章はイスラエルの他邦に追放せらるゝを豫言せし者である。十三章以下二十四章に至るまで何れも皆滅亡の豫言である。各章皆熟讀玩味すべき大なる文字である。

エゼキエルが民の罪惡となしたるものは何であつたか。一は偶像崇拜である（八章）、二は他國との同盟である（十六章）、三は各種の背德汚行である（二十二章）。偶像崇拜は空しき神佛に歸依することである、同盟は此世の權力に依賴することである、背德

汚行は肉慾に執することである。之を要するにエホバ神を離れし事、其事が彼等の罪である（十六章、廿章）。罪の表現には種類が多い、しかし其原理は一である。其罪惡觀に於ては彼はイザヤ、アモス、エレミヤ等と何等異なる處はなかつた、何等新たなる提唱はなかつた。而して是れ固より當然のことである。

エゼキエルは民の積罪迷亂を見た。本國に殘れる同胞にもバビロンに流寓せる國人にも、何等反省悔改の模樣は見えぬ。「この禍にて殺されざる殘餘の人々は尙ほ其手のなす處を悔改めず、惡鬼を拜し、見ることを開くことを得ざる金、銀、銅、石、木の偶像を拜し、又その兇殺、魔術、姦淫、盜竊を悔改めず」（默示錄九章末節）とは實に此事である。大禍亂は目前に迫つて居る、亡國の哀歌は今や奏せられんとして居る、しかるに民は之を覺らずして私利肉慾の巷に惑溺して居る。豫言者の腸は今や寸斷せんとした、血涙は心臟を破らんとした。彼は渾心の熱誠と勇氣とを以て民の悔改を促した、國の滅亡の近きを告げた。しかし盲目なる民は徒らに嘲笑を以て彼の愛に酬いた。

彼等は曰ふた。

日は延び默示は皆空しくなれり（十三の廿二）、彼が見たる默示は多くの日の後の事にして彼は遙か後の事を豫言するのみ（十三の廿七）

と。彼等は豫言の速かに充たされざるを嘲笑つたのである。爲ぞ知らん後數年にして此大豫言の悉く事實となりて現はれんとは。愚かなりしは彼の時代の民であつた。凡て愚かなるは天の聲に耳を傾けざる世と人である。

罪と其刑罰としての滅亡を豫言するは豫言者に共通のことである。苟も眞正なる豫言者にして此事を說かぬものはない。故に一豫言者の特色を知らんとする時は、我等は刑罰の豫言以外を見ねばならぬ。換言すれば救濟に關する彼の思想に於て彼の特色を知らねばならぬ。されば以下余はエゼキエルの救濟觀について述べて見たい。

第一に注意せらるゝは彼が殘餘者の救濟を豫言した點である。八章—十一章のエルサレム滅亡の幻像に於て次の一節がある。

爰にイスラエルの神の榮光その居る處のケルビムの上より起ち上りて家の閾に至り、かの布の衣を着て腰に筆記人の墨盂を帶ぶる者を呼ぶ、時にエホバ彼に言ひ給ひけるは市の中、エルサレムの中を巡れ、而して市の中に行はるゝ處の諸々の憎むべき事のために歎き悲しむ人々の額に記號をつけよと。我聞くに彼また其他の者共（五人の審判の執行人）に言ひ給ふ、彼に從ひて市を巡りて擊てよ、汝等の目人を惜み見るべからず、憐れむべからず、老人も少者も娘も子供も女も悉く殺すべし、されど身に記號ある者には觸るべからず……と（九の三—六）。

即ち少數の殘餘者のあることが約束せられたのである。しかもベナヤの子ペラテアの死するに會して預言者の悲痛は其極に達し、彼は絶望の聲をあげて叫んだ、「あゝ主エホバよ、イスラエルの遺餘者を悉く滅さんとし給ふや」（十一の十三）と。而して主の語は大なる慰藉を以て彼に臨んだ。

われ汝等を諸々の民より集へ、汝等を其散らされたる國々より聚めて、イスラエ

ルの地を汝等に與へん、彼等は彼處（イスラエルの地）に到り其諸々の汚れたる物と其諸々の憎むべき物を彼處より取除かん、我れ彼等に一の心を與へ新しき靈を汝等の衷に授けん、我れ彼等の身の中より石の心を取り去りて肉の心を與へ、彼等をして我憲法に遵はしめ我法律を守りて之を行はしむべし、彼等は我民となり我は彼等の神とならん（十一の十七—二十）。

殘餘者は一たびは諸國に散らされんも、時來つて皆故國の地に集められ、新たなる靈を與へられて神の道に歩むに至り、以て理想の社會をなさんと——これ預言者エゼキエルの心を躍らせたる大なる理想國の姿であつた、大なる救濟の希望であつた。刑罰を免るゝ殘餘者と其最後の救濟と、是れ彼が暗雲を通して眺めたる希望の光輝であつた。（其他十六章に於て「我れ或者を汝等に殘す、即ち劍を逃れて異鄕の中に居る者、國々の中に散らさるゝ者これなり……」の語がある。また十二章に於て「但し我れ彼等の中に僅少の人を遺して劍と饑饉と疫病を免れしめん……」の語がある）。

（三）

不幸にしてエゼキエルの預言は適中した。エルサルムは包圍の後に陷落し、猶太は遂に亡びた。彼は其預言の餘りに善く適中せしに泣いたことであらう。先覺エレミヤは敵王の監視下に其預言の口を閉ざさねばならぬことゝなつた、其後の消息について は杳として聞く處がない。國人には斥けられ唯一人の同志は潛みて、エゼキエルはひし〳〵と身に迫る亡國の悲哀と孤獨の寂寥のまゝに其預言を廢めたであらうか。否々彼は益々筆を呵し舌を鼓して救濟の希望を高唱し、以て絶望に沈める民を鼓舞激勵した。これ以西結書の後編（廿五章以下）に記さるゝ處である。國亡びんとして民の不信を責め、國亡びて民に復興の希望を供す、まことに偉大なる預言者と云ふべきである。

後編即ち亡國後の預言を三部に分つことが出來る。第一部は廿五章—卅二章にして諸外國の滅亡の預言である。アンモン、モアブ、エドム、ペリシテ等の諸國及びバビ

ロニア、埃及等が驕慢のために遂に滅亡する有樣を描けるものである。其一つ〳〵が大なる叙事詩である。就中二十六章より廿八章にわたれるフィニシヤの繁榮と滅亡の描畫の如き、又三十二章の埃及滅亡の預言の如きは一大詩筆と云ふべきである。嚴肅冷頭の預言者も、大感情に撲たれては詩人たらざるを得ないのである。而して諸外國の滅亡を描きつゝも、彼は時々イスラエルの復興を暗示せざるを得なかつた（二十八章廿四節以下、二十九章廿一節等）。

第二部は卅三章—卅九章にして猶太國復興の預言である。左の如き其一例である。

主エホバかく言ひ給ふ、我自ら我群を探して之を守らん、牧者が其散りたる羊の中にある日に其群を守るごとく我群を守り、之が其雲深き暗き日に散りたる凡ての處より之を救ひとるべし、われ彼等を諸々の民の中より導き出だし諸々の國より集めて其國に携へ入り、イスラエルの山の上と谷の中及び國の凡ての住居處にて彼等を養はん、……主エホバ言ひ給ふ、我れ自ら我群を牧ひ之を偃さしむべし、

失せたる者は我れ之を尋ね、逐ひ放たれたる者は之を引返り、傷けられたる者は之を裹み、病める者は之を强くせん（三四の十一—十六）。

尙三十七章前半（有名なる白骨復活に因る預言）及び三十九章末尾に於て、同樣の預言がある。

散亂せるイスラエルの歸還して成立する國はダビデの王國である。これ卅四章後半、卅六章後半、及び卅七章後半に記さるゝ處である。

我れ彼等の上に一人の牧者をたてん、其人彼等を牧ふべし、これ我僕ダビデなり、彼は彼等を牧ひ彼等の牧者となるべし、我れエホバ彼等の神とならん、我僕ダビデ彼等の中に君たるべし……（卅四章後半）。

一人の王彼等全體の王たるべし、彼等は重ねて二つの民となることあらず、再び二つの國に分れざるべし、……彼等は我民となり我は彼等の民とならん、わが僕ダビデ彼等の王とならん、彼等全體のものゝ牧者は一人なるべし、彼等は我律法

二イザヤ」の如き世界的思念はなかつた。況んやイエスキリストに於て初て見出さるゝ人類的思念、來世的信仰をや。彼は慥かに國家的にして狹くあつた。しかし又彼は個人的思想に於て甚だ強くあつた。即ち人を國家の一員と見る外にたゞ人を人として見た、神と相對する一人の人として見た。神と一人の人との關係を見たること是れ彼の創意であつた。現今に於ても世は尙個人を個人として認むるに吝なるに、二千五百年の古に於て此事ある、實に異數とすべきである。而して個人的なるは世界的なるの源である。人は世界に普くある、故に人を一個の靈的實在者と認めて遂に世界的ならざらんとするも能はぬ、遂に人類的ならざらんとするも能はぬ。世界的ならぬエゼキエルは、個人を個人として見て、次で起るべき世界的思念の先驅をなしたのである。

此意味に於て注意すべきは前篇の十八章及び後篇の卅三章、卅六章である。先づ十八章を見ると、「それ凡ての靈魂は我れ（エホバ）に屬す」（四節）と說きて神と人との個人的關係を示し、次に罪を犯せる靈魂は死すべく、公義に步み眞實を行ふ義者は生

くべきを說いてゐる（九節まで）。責任は凡て個人に在る。故に父義しくとも、子惡しくして「諸々の憎むべき事」を爲さば子は死ぬる、父の義のために子の惡は赦されぬ。又父惡しくも子義しくば子は生くる、父の罪は子の義を妨げぬ。

罪を犯せる靈魂は死ぬべし、子は父の惡を負はず、父は子の惡を負はざるなり、義人の義は其人に歸し惡人の惡は其人に歸すべし

とある。人の神に對するや、父の子としてにあらず、國の民としてに非ず、たゞ一個の靈魂としてゞある。其間に他人の介在をゆるさない。神と彼とのみ相對して他は凡て無に等しい。これ彼の極力主張せし處である（二十節まで）。

責任は凡て個人にある。しかし惡人も一度悔改むる時は過去の罪を負はぬ、過去の惡は悉く忘れられる、即ち彼は義人として生きる。同時に義人惡に陷る時は過去の義は悉く消滅する、彼は在來の惡人と何等異なる處はない、即ち彼は惡人として亡ぶる。人は其父母より自由なるが如く又過去の生活より自由なのである（三十二節まで）。

に歩み我法度を守りて之を行はん、……我れ彼等に平和の契約を立てん、之は彼等の永遠の契約となるべし、我れ彼等を堅うし彼等を殖し、わが聖所を長久に彼等の中に置かん……(卅七章後半)。

これ預言者エゼキエルが夢みたる理想國の姿である、メシヤの國である、ダビデ王國の再興である。その地上の國なるの故に由り淺薄を以て預言者を責むる勿れ、その此世の王國なるために非心靈的の語を以て彼を貶する勿れ。國破れて山河のみ殘る荒凉の廢址に理想國の再現を夢みたる彼に偉大の語を冠せよ。

後篇の第三部即ち四十章以下は幻に托して新王國の宗教的制度を述べしものである、即ち神殿の構造と禮拜の儀式とを述べしものである。記して頗る精細に渡つて居る。これ彼に立法的預言者の稱ある所以である。彼が形式的信仰を脱し得ざりしか如何、そは我等の知らぬ處である、ゴーデー氏の如きは之の文字的解釋を排して、之を以て心靈的信仰を顯はすに有形的文字を借りたるものとなして居る。余は其當否を知

らぬ。何れにするもエゼキエルが茲に己の心に浮びたる新王國の信仰的完全を描きたるや明かである。もし形式の提示ならんか、最眞面目なる心靈的信仰を核心とする形式である。もし心靈的信仰の提示ならんか、形に托して心を現はしたものである。茲に彼は彼の理想とする宗教的完全の狀態を描き出でたのである。新理想國の出現(國の復興)と其國の宗教的及び道德的の完全(信仰の復興)、及び之が神の自發的恩惠として臨むこと……これ預言者エゼキエルが亡國の民に向つて述べたる救濟の福音であつた。

(四)

エゼキエルは專ら民族的の預言者であつた。先づ自國の滅亡を預言し、次に他國の滅亡と相對する自國の復興を預言した。彼れの思想はイスラエル以外に出でなかつた。自國滅亡の前後に活動したる預言者として、國の大危機に臨んで心かそれにのみ集注せしは固より當然のことである。然り彼には彼に後るゝこと數十年にして出でたる「第

二イザヤ」の如き世界的思念はなかつた。況んやイエスキリストに於て初て見出さるゝ人類的思念、來世的信仰をや。彼は慥かに國家的にして狹くあつた。しかし又彼は個人的思想に於て甚だ強くあつた。即ち人を國家の一員と見る外にたゞ人を人として見た、神と相對する一人の人として見た。神と一人の人との關係を見たること是れ彼の創意であつた。現今に於ても世は尙個人を個人として認むるに吝なるに、二千五百年の古に於て此事ある、實に異數とすべきである。而して個人的なるは世界的なるの源である。人は世界に普くある、故に人を一個の靈的實在者と認めて遂に世界的ならざらんとするも能はぬ、遂に人類的ならざらんとするも能はぬ。世界的ならぬエゼキエルは、個人を個人として見て、次で起るべき世界的思念の先驅をなしたのである。

此意味に於て注意すべきは前篇の十八章及び後篇の卅三章、卅六章である。先づ十八章を見ると、「それ凡ての靈魂は我れ（エホバ）に屬す」（四節）と說きて神と人との個人的關係を示し、次に罪を犯せる靈魂は死すべく、公義に步み眞實を行ふ義者は生

くべきを說いてゐる（九節まで）。責任は凡て個人に在る。故に父義しくとも、子惡しくして「諸々の憎むべき事」を爲さば子は死ぬる、父の義のために子の惡は赦されぬ。又父惡しくも子義しくば子は生くる、父の罪は子の義を妨げぬ。

罪を犯せる靈魂は死ぬべし、子は父の惡を負はず、父は子の惡を負はざるなり、義人の義は其人に歸し惡人の惡は其人に歸すべし

とある。人の神に對するや父の子としてにあらず、國の民としてに非ず、たゞ一個の靈魂としてゝある。其間に他人の介在をゆるさない。神と彼とのみ相對して他は凡て無に等しい。これ彼の極力主張せし處である（二十節まで）。

責任は凡て個人にある。しかし惡人も一度悔改むる時は過去の罪を負はぬ、過去の惡は悉く忘れられる、即ち彼は義人として生きる。同時に義人惡に陷る時は過去の義は悉く消滅する、彼は在來の惡人と何等異なる處はない、即ち彼は惡人として亡ぶる。人は其父母より自由なるが如く又過去の生活より自由なのである（三十二節まで）。

されど惡人もし其凡て行ひし處の惡を離れ、我凡ての法度を守り、律法と公義を行ひなば必ず生きん、死なざるべし、其爲しゝ處の咎は皆覺えられざるべし、その爲しゝ正しき事のために彼は生くべし、主エホバ言ひ給ふ我いかで惡人の死を好まんや、寧ろ彼が其道を離れて生きんことを好まざらんや。もし義人其義を離れて惡を行ひ、惡人の爲せる諸々の憎むべき事を爲さば生くべきや、その爲しゝ正しき事は皆覺えられざるべし、彼はその爲せる咎と其犯せる罪とのために死ぬべし（二十一節—二十四節）。

かくの如くに說き來つて彼は彼等の悔改を促して居る。

汝等その諸々の咎を悔改めよ、然らば惡汝等を躓かせて滅ぼすことなかるべし、汝等その行ひし諸々の罪を棄て去り、新しき心と新しき靈魂を起すべし、イスラエルの家よ汝等何ぞ死ぬべけんや、我は死ぬる者の死を好まざるなり、然らば汝等悔いて生きよ、主エホバ之を言ふ（三十節以下）。

「悔いて生きよ」、新しき心を抱け、新たなる生に入れよ、さらば生きん、舊き罪は皆忘れられんと。個人的である、而して又如何に心靈的、且福音的なるよ。

同一の思想が卅三章十節—二十節、卅六章廿五節—廿八節にある。共に個人的にして且福音的である。峻嚴なる預言者にも此優雅なる福音があつた。義に深くして又愛に深しとは彼のことである。國難は彼の心靈を深くした。熱淚の屢々なると辛らき經驗の度重なりしとは、彼に嘗て見ざりし新なる心靈の世界を示した。國は亡びて彼の心に國家以外、民族以外の個人心靈が映つた。恰も東方道塞つて西方新大陸を發見せし比である。而して個人を個人として神と相對して見たる時、個人心靈の尊貴は大浪の如く彼の心に及びて、律法の重苦しき空氣に育ちたる彼も遂に福音的ならざるを得なかつた。イエスの此世に生まるゝ六世紀以前に於て、此心靈的にして福音的なる大思想ありしを知りて、我等は之を發せし預言者の偉大なりしを懷はざるを得ない。

* * * *

エゼキエルが神殿再興を夢みたるはバビロン追放の廿五年目、エルサレム陷落の十四年目であつた（四十章一節）。これ彼の最後の預言であつた。時に彼は五十歳を超えて居たであらう。其後の彼の運命については何等知る處ない。波斯王クロスの庇護の下に猶太國の再建せられしは尙三十四年の後なれば、恐らくは彼は之を見すして世を去つたであらう。そしてそは寧ろ幸であつた。若し彼にして新王國の實狀を見しならば大なる失望を味はつたことであらう。所詮彼の希望たる理想の國は此世に於て生まるべくもない。彼の希望とせし王國は、イエスキリストの出現に由りて心靈的の意味に於て建設せられた。彼の理想は靈化せられ、醇化せられて、キリストに由りて充たされた。彼の最大希望たりし理想國の觀念と彼の創意なりし福音的思想とは、彼に於て未だ完璧ならざりしものを、イエスキリストに在りて完成せられ且實現せられた。かくて彼は安んずべきである。彼も亦我等と共にイエスキリストの降誕を祝する一人であらねばならぬ。（大正四年十一月稿）

パウロの先驅者ヨナ

約拿書の精神

「預言者ヨナの休徵」とイエスの口に上りて名高きヨナも（馬太傳十二の三九、十六の四、路加傳十一の二九）、舊約聖書に於ては第一流の預言者と見られて居らぬ。十二小預言者の中に於ても、彼はアモスやホゼア等に劣るものと見られてゐる。彼の著作なりと言ひ傳へらるゝ約拿書は、舊約聖書中最も低しと言はれてゐる傳道之書よりも更に價値なきものと見られることが多い。此書を聖書の中に加へしは編纂者の大過失であると云ふ人さへある。その幼稚なる神怪譚を含む點より見て如何にも此書は荒唐無稽を傳ふるが如くに見える。しかし乍ら傳道之書を精讀してその偉大なる書たるを知り得る我等は、また約拿書に於て或貴き物を得ることが出來ないであらうか。

この書の物語には二樣の見方がある。甲は之を史的事實（實際にありし事）と見、乙はこれを一の寓話（或教訓を與へるための小說）と見る。史的事實と見ることに多少の困難の伴ふは此書を一讀して直にわかる。從つて乙のごとき見方の出づる餘地があるのである。しかも又甲の史的見解にも相當に立派な根據がある、（今これを略す）。かくて議論はどこまで行つても盡きぬ。それ討究は學者の生命である、ゆゑに議論はこれを彼等のなすまゝに任すべきである。それが何れにきまつても我等は何の痛痒をも感じない。われ等の知らんと願ふ處はヨナの精神である、そして又その思想である。彼がその思想の實行と鍛錬のために、果して異邦の大都ニネベに到りしか如何は、我等の多く關する處でない。思想は實行の母である、されば若し其思想の所有者がそれを實現しなかつたとしても、我等の其人に對する評價は毫も變らぬのである。そは何れとするも、我等は約拿書の記事を大體に於て史的事實とする假定の上に立つて、此の書の精神を探つてみよう。そして余が此假定の上に立ちしは唯說明の便宜のためである。

「エホバの言アミタイの子ヨナに臨めり」とある（一の一）。ヨナはイスラエル王ヤラベアム第二世の朝に預言者の聖職に立ちし人であつた（列王紀略十四の二五）。或時かれは天の聲に觸れた、「起ちてかの大なる市ニネベに往き之れを呼ばはり責めよ、その惡は其惡わが前にのぼり來ればなり」と（一の二）。これについて少しく記す處あらねばならぬ。

抑もニネベとは何處であるか？　云ふ迄もなく東方の大國アッシリヤの首府である。イスラエル王ヤラベアム第二世は紀元前八百廿三年に即位した。そしてアッシリヤの英雄君主シャルマナセルが卅五年間國を治めて、數十回の遠征を敢てし、其領土を波斯の山脈より地中海迄擴げしのち死せしは、正に紀元前八百廿三年であつた。これ恰もヤラベアム王即位の年である。ヤラベアム王の代の預言者たるヨナに此默示の降りしは、思ふに其數年又は十數年後の事であらう。即ち其時のアッシリヤは勇武なる國王

に基づく武力的發展の後、これを支へ得べき英主起らずして、社會の表に勢威と驕奢あるも內漸く頽廢と疲弊甚しからんとするの有樣にあつた。さらぬだに「血を流す市」（拿翁書三の一）と曰はるゝ此强國の首府が、戰勝後の虛榮に囚はれし時に於て、その汚濁腐敗の狀けだし我等の想像を超ゆるものあつたであらう。

此市の大腐敗を噂に聞きて、異邦の都とは云へ、その餘りに甚だしきを憤りゐたるヨナの心に、卒然として天の聲は響いた「汝到りて彼處の惡を責めよ」と。罪を責めて悔改を促すにはエホバの名を以てする外はない、即ちこれまさに異邦傳道の命である。猶太思想に育ちたる純粹の猶太人たる彼の、どうして躊躇せぬことが出來よう。猶太民族をのみ選民として保護と特寵とを加へるエホバ神の存在を信じ、凡ての異邦を以て神の慈愛の外にあるとなして輕蔑する猶太思想、ユダヤに於て世界を見るも世界を世界として見ざりし狹隘なる猶太思想——これ實に彼を養ひ、彼を生かしたる信念であつた。未だイザヤ、エレミヤの大預言出でずして、當時は最も狹隘なる時代なりしと學者は云ふ。預言者ヨナが異邦傳道の命に接して直ちに之を受くること能はざりしは、異邦の大都を恐れし怯懦に因るのではない、實にその思想の猶太的なりしに因るのである、異邦傳道の何故に必要なるかを理解し得なかつたに因るのである。

彼はこゝに一の問題を課せられていたく心を痛めた。新思想は彼の心に臨みて其舊思想と戰つた。彼の心靈は彼に向つて異邦人も亦同一の人類にあらざるかと問ふた、彼の肉情は之に抗して然らずと答へた。彼の「高き自己」は彼に向つて異邦十萬の民の滅亡を坐視し得べきかと嘱いた、彼の「低き自己」は之に抗して時代に背く彼が行爲の地位と名望とに禍すべきを告げた。彼は悶えた、そして此苦悶を拂ひのけんとした。然しそれは影の形に從ふごとく彼の身にまつはりついて離れなかつた。彼はこの心中の苦鬪と矛盾とに堪へずして、遂にエホバを避けて、其聲の達せざる處に往かんと決した。我等は彼のこの逃避を責むることは出來ぬ。否逃れしは偶々彼の誠實を語るものである。彼より低き人ならば肉を以て靈を壓して、安んじて本國に留まり得る

のであつた。

ユダヤ人は信じてゐた、異邦の空氣に全く圍まれてある時はエホバの聲は其耳に達せずと。ゆゑに異邦にありても尙エホバの聲を聞かんには、本國の土一塊なり木の葉一片なりを携へゆくを要した。ヨナは想ふた、故國の物を一も身につけずして逃れなばエホバの怖るべき聲は來らざるべしと。彼は踴躍して西の方ヨッパの港に行き、タルシシに向ふ船に便乘した。颶風は起つて船は將に覆へらんとした(一の四—六)。闔をひきし結果、此災の起りしはヨナの故なることが分つた(一の七)。人々は彼を責めた。ヨナは自己を海に投げて彼等を救はんとした(一の八—十二)。さすがに彼等も躊躇した。しかし「陸に漕ぎ戻さんと努め」てその效なきを知るや、已むなくヨナを海に投じた。「海の荒るゝこと」は歇んだ。ヨナは魚の腹の中に三日三夜止まつた(一の十三—十七)。神の聲を逃れし彼も永久に神を棄てることは出來なかつた。忽ち祈禱の精神は彼の心に起りて、彼の哀心の感謝はエホバに向つて捧げられた。エホバの命に

より魚はヨナを陸上に吐き出だした(二章全部)。

これを此儘に見る時、これは慥かに幼稚なる神怪譚である。海上の暴風雨を事實と見るも、ヨナの海に投ぜられしを事實と見るも、それがために波の鎭まりしと云ふは怪しく、「三日三夜大魚の腹中に活きしと云ふに至りては到底その儘には信ぜられぬ。しかし乍ら信じ難き事柄のうちに信じ得べき事實が含まれてゐる。この物語に僅少の推理を加ふる時、神怪譚は事實談となつて我等の面前に躍るのである。

本國を逃れし彼が異邦人のなかに交りて一の大患難に遭逢したことは明かである。そして此大患難が彼のために(彼の試錬のために、敎育のために)臨みしものなることも察せられる。即ち「時にエホバ大風を海の上に起したまひて烈しき颶風海にありければ……」(一の四)とある。又人々もそれがヨナの故を以て來りし災禍なるを知つた(一の七)。ヨナも亦「この大なる颶風の汝等(彼等)にのぞめるは我故なるを知」つてゐた(一の十二)。神は玆に大患難を備へて彼を敎育し給はんとしたのである。云ふ

勿れ患難は刑罰なりと。神は育てんがために其愛子を鍛ひ給ふのである。

そして此禍には彼の外に他人—異邦人—が捲きこまれてゐた。彼は此異邦人のために自己一身を犧牲にせんと決心した。嘗ては賤めてやまざりし異邦人も、近く交はりて見れば共にこれ同一の人類である。災禍に心おのゝきては切なる祈を神に捧ぐる民である。たとへ其神は偶像の神なりとは云へ、苦難に際して神を呼ぶ心情は一である。憐れむべき弱き彼等は我と比して何の異なるところかある。我も亦肉に負けて本國を逃れ來りし一個荏弱なる人の子にあらずやと。同感推察の心は油然として彼の心胸に湧きて、彼は一身を彼等のために棄てんと決した。然るに彼等異邦人は一人の命を斷つに忍びずして、協力以て苦難の中より脱せんと努めた。彼等も亦人情の子である。かくて彼の心に人類一如の思想は益々鮮かになつた。彼は遂に一身を棄てゝ彼等に代つた。災禍は去つた。彼等はエホバを信ずるに至つた。異邦傳道を避けて逃れし彼は圖らずも茲に一の犧牲的行爲に因て、異邦人に傳道するを得たのである。

「さてエホバすでに大なる魚を備へ置きてヨナを呑ましめ給へり。ヨナは三日三夜魚の腹のうちに在りき」(一の十七) とは何を云ふたのであらうか。もとより委細は知る由もない。たゞ一事明かなるものがある、それはエホバが或る方法を以て死せんとする彼を支へ、或所を設けて彼を護り給ひし事である。曾てアブラハムが其子イサクを献げんとせし瞬間に於て之を止め給ひしエホバは、今また茲に神の人ヨナが其身を棄てゝ異邦人を救はんとせし瞬間に於てその命を支へ給ふたのである。荒れ狂ふ大海に身を投げしとは、人力を以て救ふ能はざる境に身を投せしことを示すのである。そして魚を以て救ひしとは、人力の達せざる處に神の奇跡力の臨みしことを示すのである。かく解する時この神怪なる記事も、我等は自己の實驗を以て之を讀むことを得るのである。

神に護られて或時期の間を過ごせし間に、彼はたゞ神へ感謝の祈をする外はなかつた。

然るに我神エホバよ、汝は我命を深き穴より救ひあげ給へり、わが靈魂衷に弱りし時われエホバを思へり、而して我祈汝に至り汝の聖き殿に及べり、……我は感謝の聲をもて汝に献祭をなし、又わが誓願を汝に償さん、救ひはエホバより出づるなり

と。異國に逃れなば神を離れ得べしと思ひしに、思ひきや神は彼をはなし給はなかつた。神は何處までも彼を逐ひ來つて、其鍛錬と恩惠の聖手を離し給はなかつた。かくてヨナは「神の至らざる處なし」てふ眞理を學び得たのである(二章全體)。

われ何處に行きて汝の聖靈を離れんや。
われ何處にゆきて汝の御前を逃れんや。
われ天にのぼるとも汝かしこに在し、
われ我床を陰府に設くるとも視よ汝彼處に在す。
われ曙の翼をかりて海のはてに住むとも、

かしこにて尙汝の聖手我れを導き、
汝の右の聖手われを保ち給はん。(詩百卅九篇七節—十節)

かくの如くにしてヨナは二大眞理を學んだ。その第一は人類一如の思念である、その第二は神の全世界に在すてふことである。「人は皆同じ人である、そして神は全世界に在して全人類を愛護す」と、これ彼の新たなる犧牲を以て得たる新たなる思想である。且つ神は苦難の中の彼をも救ひ給ふてふ實驗の、益々正確となるものあつた。時にエホバの言再び彼に臨んで云ふた、「起ちてかの大なる市ニネベに往き、わが汝に命ずる處を宣べよ」と。そして既に心靈の準備成り居たる彼——心に革命を經たる後の彼は、直に此聲に聽いてニネベ市に到つた(三の一—三)。そして彼はニネベの市民に向つて、速に其罪惡を悔いざる時は間もなくして其市の滅ぶべきを告げた(三の四)。記す處は僅かに一節である、しかしヨナの言語と努力は少なくはなかつたであらう。異邦淆亂の民、いかで卒然として來りて巷に叫ぶ一外人の聲にたやすく耳を傾けやう

や。迫害もあつたであらう、嘲笑もあつたであらう。さはれ天火に浴して立てる彼の聖姿と熱誠とは遂に彼等を動かした。先づ民は動いた、王も亦動いた。王の命により て悔改の式は一般に行はれた。たとへ一時なりとは云へ、彼等は罪を悔い惡を離れ神を畏むの實を表はした。神は即ち彼等の罪を赦し給ふた。「神かれらの爲す所を鑑み、その惡き道を離るゝを見そなはし、彼等に爲さんと云ひし所の災禍を悔いて之をなし給はざりき」とある(三の五—十)。

明かにヨナは異邦傳道の目的を達したのである。しかるに何故に彼は「この事を甚だ惡しとして烈しく怒」つたのであらう(四の一—三)。此市に災禍を降すことをエホバの中止し給ひしを彼は怒つたのであうううか。否々彼はそれがために此處に來たのである。もしニネベの滅亡が既定の事實として避け得ぬことであるならば、彼れは何を苦しんでか遙々此土地に來ようや。之に悔改を促して其滅亡を免れしめんために彼は來たのではないか。然らば彼は何を怒つたのであらうか。彼はニネベの民が猶太教を

受け入れずして唯單なる悔改に依りてのみ赦されしを奇み、且怒つたのである。見よ、彼等の營みし悔改の儀式は全くアッシリヤ風のものではないか。彼等は自國の宗教を棄てずして、たゞ罪を悔改めしのみである。その異教の信仰と儀式とを棄てゝサダヤの宗教と儀式(ヨナに取りては絶對の眞理たるもの)を採用したのではない。彼等は悔改したけれども改宗したのではない。そしてヨナに取つては、猶太教を受け入るゝに至らざる悔改は眞の悔改ではない。然るにエホバは此不完全なる悔改の故を以て、ニネベの罪を宥し給ふた。彼はエホバのあまりに慈悲深きを怨んだ。

エホバよ我れ尙ほ本國にありし時かくあらんと云ひしに非ずや、さればこそ前にタルシシへ逃れたるなれ、そは我れ汝は惠みある神、憐みあり、怒ること遲く、慈悲深くして、禍を(下すを)悔い給ふ神なりと知ればなり(四の二)

と、これ神に對する彼の不平の訴へであつた。彼は懊惱のあまり「エホバよ願くは今我生命を取り給へ、そは生くるよりも死ぬるかた我に善ければなり」と叫んだ(四の

三)。

彼は野外に一の小屋を造り、それに坐して市の運命を見んとした。瓢の木は生ひ出で丶、綠葉は茂つて彼の頭上を蔽ひ、彼は綠蔭の凉味を味ひつ丶彼の憂思を慰めた。しかるに瓢の木は一夜にして枯れた。翌日は蒸暑き日であつた、强き日光は容赦もなく彼の頭を照らした。さらぬだに憂に沈める彼は東風と烈日に心亂れ、唯一の慰藉者なる瓢の木は失せて、彼はひたすら死を願ふに至つた(四の五—八)。懊惱の極に達して光明は突如として彼の心に臨んだ。自ら「勞を加へず育てざる此一夜に生じて一夜に亡びし瓢を」すら彼れは太く惜んだ。その枯れしを彼は哀惜するの情に堪へなかつた。孤獨の彼を慰めし友は失せて彼の心に大なる淋しさが臨んだ。かくて彼は「十二萬餘の左右をわきまへざる者と許多の家畜とある此大なる市ニネベを」エホバの惜み給ふ聖慮を知るを得た。曾ては大苦難を下してヨナの狹隘を開き給ひし神は、茲に美はしき天然の啓示を以て再び彼の狹隘を開き給ふたのである。

茲に於てかヨナは第三の大眞理を示されたのである。そは人は必ずしも猶太教を經由せずとも救はるゝことである。一人が眞に眞心をひらいて悔改する時に於て天の神はこれを嘉納し給ふてふことである。割禮を受けざる者と雖も、猶太教の儀式を守らざるものと雖も、國と民との區別なく、苟も人類の一員たる者が眞心を以て罪を悔ゆる時に於て、神は之を嘉納し給ふことを彼は知つた。神の大愛は測り知られぬ、國籍と宗派とは神の大愛の發動を妨ぐることは出來ぬと、これ彼の示されたる啓示であつた。後世パウロの敵たりし猶太的基督教の教師等が、「割禮を受けずしては異邦人は救はれず」と唱へたるが如きは、彼等の先祖たる豫言者ヨナに後るゝこと甚だしきものである。

二回の出來事によりて二度其の狹隘なる心を開かれ、三個の大眞理を學びたる彼は全然新なる人となりて本國に歸り來つた。それより後の彼の生涯については我等は何等知る處ない。たゞ此更新せられたる人格と思想を基として、彼が有意義なる一生を

送りたることは、察するに難くない。

＊　＊　＊　＊

以上の如くに約拿書の精神を解する時、我等は彼がパウロの先驅者たりしを認めざるを得ない。勿論彼の時代の人として又キリスト出現以前の人として、彼はパウロ程に徹底せる異邦傳道者ではなかつた。しかし乍ら一度異邦傳道をなし、又二回の試錬を經て上記の如き三大眞理を抱きし後に於て、彼が猶太の狹隘を脱して、世界大にして人類的なるに至りし點に於て、まことに能くタルソのパウロと相似てゐる。若しそれイザヤの大思想を以てキリストの先驅となし得べくば、豫言者ヨナは疑ひもなく異邦使徒パウロの先驅者である。而して患難の意味を擴張せんとして神と爭ひしヨブと神愛の廣大無邊なるを探らんとして神と爭ひしヨナとは、新光明を世に與へたる舊約の二大人物である。約百記と約拿書とが正史なるか稗史なるかの問題のごときは、そも〳〵末の末である。（大正五年五月稿）

永遠の確實

基督教的眞理の價値

「イエスキリストは昨日も今日も、然り永遠に變らざる也、樣々なる敎と異なる敎に動かさるゝ事勿れ」と希伯來書の記者は喝破した（十三の八、九）。彼が此言をなしたのは紀元七十年頃のことであつたと學者は云ふ。イエスの死後僅かに四十年、而して敎會の非運と信者の苦難の眞只中に敢て此言をなす、炬の如き眼光永遠の永遠を貫きて走るを思はざるを得ない。これ大確信の叫にあらずして何ぞ。パウロならずともパウロに似たる此書の作者の偉大なるかな。

此大確信の叫ありてより雨露星霜茲に千八百餘年を經過した。眼を瞑つて靜かに過去の千八百餘年を思ひ、又二十世紀の現時を考ふるに、この斷定の益々眞なるに驚く

ほかはない。我等は基督教の「永遠に」變らざるを信ずる、しかしそれは信仰の眼に映じたる未來の豫測であつて、既成の事實ではない。しかし「昨日も今日も」變らざることは、史的事實に基き又現時の實狀に照らして之を知ることが出來る。未來については之を各人の純直觀に任せるより外はない、たゞ過去と現在にのみ我一瞥を與へて見よう。

一、基督教は大切なる眞理を澤山に含んでゐる、然し「神の存在」てふ眞理は思ふに其最も重要なるものゝ一であらう。神が宇宙萬物を造りし事、之は或意味に於て基督教の出發點である。もし之が破るれば基督教その者は土崩瓦解する外はない。さりながら新約聖書は之を自明の眞理として、之について一言も云はぬ。猶太教の經典たる舊約聖書の劈頭に「太初に神天地を創造り給へり」とあるのみである。されば多くの學者が神の存在を理論の上に證せんとし、之に對して多くの學者が無神論を力說した。基督教と其教會とを好まざる多くの學者が、理論の上より基督教のこの根原的眞理を

破壞せんものをと、過ぐる千九百年間熱心なる努力をなした。唯物論と其隨伴者たる無神論は度々姿を變へて各時代に表はれた。しかし神の存在は――單に理論上よりも――今や益々確實になりまさりて、反對者の努力は何等の効果をも奏さぬのである。

在來の有神論は概ね四つの證明法の上に成立した。第一は宇宙萬物は現象なれば其奥に本體なかるべからずと云ふ證明法である、之を本體論的論證(ontological proof)と云ふ。第二は原因の原因に溯りて終に宇宙の根本原因を認むるのである、之を宇宙論的論證(cosmological proof)と云ふ。第三は整然たる大宇宙は或る意匠、或目的の下に成ると見る外はない、即ち宇宙は絕對者の意匠に成ると云ふのである、之を目的論的論證(teleological proof)と云ふ。第四は人に道德あるは宇宙の本源に道德的存在者あるためなりと云ふので、倫理的論證(ethical proof)とでも稱すべきものである。之等の論證は純理上の證明法としても何れも貴きものである。若しそれ信仰の眼を以て之等に對せんか、其一つ一つに深き天來の啓示を見るであらう。其無神論者より屢々

嘲笑を以て見られしにも係らず、又其價値の屢々疑はれたるにも係らず、又其舊くして科學の基礎を有せぬてふ缺點あるにも係らず、全く棄て去らるゝに至らざるもの、蓋し故ありと云はねばならぬ。

右の論證に立つ有神論は超絶の神を傳ふるのである、即ち「王」としての神を傳ふるのである、宇宙の外にあり人間を遠く離れ居て凡てを支配する絶對者を傳ふるのである。かくては餘りに神と人との關係遠く、我等は唯その大權下に一小蟲の如く儚く在ることゝなる。これ以上の如き有神論の一大缺點である。然るに幸なる哉、今や科學の基礎に立ちて「神の內在」なるものが唱へられつゝあるのである。今やラヂウム、ヘリウム等新元素の發見と共に、科學者の宇宙觀は一變した、宇宙萬象の中に潛む一大勢力が認めらるゝに至つた。枯死せる如き物質の中に限なき大活動があるので、物質は宇宙的大勢力の一表現と見らるゝに至つた。生物も無生物も共に神秘なる一大勢力の發現と見る外はないことゝなつた。かくて現代科學は宇宙に內在する一大神秘力を

萬物の根源として見るに至つたのである。我等は科學の辨證の上に我等の信仰を築いたのではない。科學は如何なることを唱へようと我等は驚かぬ。たゞ科學の進歩が宇宙の無神的解釋を益々不可能ならしむるは注意すべき事である。

二、基督敎の第二の根本的眞理は、神が人類を萬物中の最高貴なるものとして造つたといふことである。創世記一章廿六節以下に造化の終極としての人類創造が記されてゐる。又イエスは萬人を父なる神の愛子として見た。かくて人の尊貴が基督敎に於て主張される。從つて罪とは、高貴なる人として相應からぬ心的現象及び外的行爲を指すのである。故に人は罪より釋放せられて、高貴なる人としての天分を全うせねばならぬ。これ基督敎の重要なる根本義である。

地は宇宙の中心にして太陽は地を暖めるために地の周圍を廻るとは、昔の科學的眞理であつた。之は眼に映じたる其儘を眞理と見る人類の幼稚時代に於ては當然のことである。そして此地球中心說が基督敎に於て人類の特別創造と尊貴とを證する有力な

る根據であつたのである。宇宙の中心にある地球――其地球上の生物の靈長たる人――と斯く推論して人類は最も神に近きものであつたのである。敎會は此論證の上に立ちて安んじて永き惰眠をつゞけたのである。

然るに近世紀てふ新時代の開展に當つて一大旋風が基督敎を襲つた。コロンブスの亞米利加發見に後るゝこと五十年、ルーテルの宗敎改革に後るゝこと二十五年にして、波蘭人コペルニカスの太陽中心說が現れたのである。之に依りて、太陽は中心にして地球は他の遊星と共に其の周圍を廻ることゝなつた。地の價値は減少して宇宙の一小局部となつた。從つて人も宇宙の弱小者となつた。今迄萬物の上に立つと思ひし人類は萬物の下に屈む非境に立つに至つた。然り、地球は小さくなつた、然し基督敎は小さくならなかつた。旋風は家を覆へさずして無事に通過した。人類の特別創造てふ眞理は太陽中心說を認容せし上にて再建せられた。否、人は宇宙の眞相を窺ふを得て、益々神の大經倫を知り、大宇宙に繫がるゝ人類の重き位置を悟るに至つた。太陽中心

說は人類の尊貴てふ眞理を破らずして却て之を深くした。

第二回の大旋風は來た、それは十九世紀の中葉に於けるダアウィンの進化論である。人類は自然淘汰に依りて下等動物より進化し來つたものであると云ふダアウィン說が一般に認容せられて、人類の特別創造てふ敎義は破れんとするに至つた。神なくして原始動物より自然に進化し來りたるは人類であると云ふことになつて、神の存在も神の人類特別創造も僞りの敎義と見做されんとするに至つた。此時基督敎はその外見に於ては將に崩壞するかと見えた。敵は拍手しつゝ之を祝した。然るに今や如何。生物の進化は之を事實と認むるとしても、進化の原動力は遂に之を知る由もないのである。凡ての生物の起原たる原始生物――原始の生命、それは抑も如何にして生れたか。物を集めても生命は生れぬ、生命はげに一大神秘である。進化の外的原因についてすら今や難問百出して混沌を極めてゐる。ダアウィンの自然淘汰則や雌雄淘汰則は今や殆んど棄てられんとしてゐる。そして新說明は澤山に出づるが一として完全なものはな

い。他日完全なる說明の生まるゝ時が或はあるかも知れぬ。しかし生物其自身に環境に應じて變化する固有性があればこそ、生物は進化するのである。此の生物の進化的固有性の起原は如何、これたゞ神秘と名づくる外はない。かくて進化論は今や生命の神秘不可思議に驚き始めたのである、一小細胞に內在する偉大なる潛勢力に驚愕の眼を見開いたのである。されば今や眞面目なる科學者は甚だしく謙遜の人となつて、宇宙に漲る大勢力の前に屈服するのである。今や深き科學者によりて進化は神の創造の形式と認められ、神は天體を進化させ、地球を進化させ、生物を進化させて、更に生物の終極として人類を生み出したとせらるゝに至つたのである。知るべし、進化論は神の存在と人類の特別創造とを破棄しなかつた、否益々之を確實にしたのである。かくて創世記第一章は、其內的意味に於ては日進の科學によりて益々正確となつたのである。かくの如くにして第二回の大旋風も無事に去つて、「千歲の巖」は依然として碧空を指して聳えて一動搖をもせぬのである。

三、基督敎の第三の根本的眞理はキリストに於ける神の顯現である。此敎理も亦屢々疑はれ、屢々殘酷なる批判に會した。キリストを唯の人にしようとする運動は今も相當に盛である。露のトルストイ、獨のオイケン等、所謂進步的基督敎には鏘々たる勇士が多い。皆キリストを聖人の一人と見るのである、そして其遺訓を守らうと云ふのである。我國に於ても或は自由基督敎と稱し或は自由福音と呼びて、此種の運動が景氣よく行はれつゝあるは人の知る處である。かくの如き運動は決して今日に至つて勃興したのではない、基督敎の起原と殆ど同時に起つたものである。そして千八百餘年の間此種の人々がキリストの神性を否定せんと努力し來つた。しかしながら此の種の運動が常に敎界の一小部に限らるゝは、其表面の景氣盛なるにも係らず、內實に於て薄弱淺浮なるを示すものである。同時にキリストに於ける神の顯現てふ敎理に或る深き意味のあることを證するものである。

其理由は知るに難くない。凡そ人としてのイエスを知ること深ければ、遂に神とし

て彼を崇むるに至るは自然の數である。イエスの敎訓と人格と生涯との絕倫神聖なるは、眞面目に聖書を讀む者の遂に認めざるを得ざる處である。而して熱誠を以てイエスの精神を持して此世を渡らんと努むる者は、日に月に年にイエスより與へらるゝ靈化の特異なるを味ひ進みて、遂に感謝の涙となり歡喜の歌となり、イエスと我との直接にして神秘なる關係を斷たんとするも斷つ能はざるに至るのである。かくなりては誰かイエスを神として崇めざるべき、誰かキリストの神性を否定すべき、誰かイエスキリストに神の顯現を認めざるべき。さればキリストに於ける神の顯現は實驗上の眞理である。其の反對者の大聲疾呼に屈せずして、基督信者の靈力の根原として、今に至りて少しも衰へざるは故ある哉である。されば古來、淺薄なる又は信仰を失へる基督信者はユニテリアン風に墮ち行き、眞摯にして不徹底を忌むユニテリアン信者は遂にキリスト崇拜の信仰に入るのである。今や我國に於て自由基督敎信者と稱する者の淺薄にして靈味を缺けること、我等は之を認めざらんとするも能はない。

* * * * * *

余は以上に於て、基督敎の傳ふる眞理のうちより三個をぬき來つて、その「昨日も今日も」變らざることを述べた。これもとより全部の觀察ではない。キリストの生命そのものゝ不變については尙云ふべきことがあるが今暫く之を省く。さりながら「イエスキリストは昨日も今日も……變らざる」は過去千九百年間の實際事であつて、史的事實として現存する處である。かくの如くして遂にイエスキリストの「永遠に變らざる」を誰か否定し得よう。我等の常識も信仰も之を明瞭に豫知し得るのである。寔にカアライルの言ひけん如く「赤兒の如き弱き物と雖も、それが眞の物である以上はいつかは强くなる」のである、ならざるを得ないのである。千九百年前初てナザレの工人によりて唱へられし時、神の眞理は搖籃の中にあつて尙弱く見えた。學者は權力の地位にあつて其說く所は甚だ强く見えた。しかし强き物も眞ならぬは何時かは亡び、弱きも眞なるは遂に榮ゆる。學淺き工人の敎、世の政治家と學者に輕蔑されつゝも、

過去千九百年間あらゆる批判と反對とに屈せずして、他の學說、他の眞理の皆亡ぶる中にたゞ獨り今に至りて亡びない。其の永遠に生くべきは最も確實なる豫測である。あゝ信ずべく奉ずべきはイエスに依りて啓示せられたる神の眞理である。

我等の信仰は實驗の上に立つ信仰である。故に何等學者の辯護を要さない。科學的眞理と稱する常に變化しつゝある者―不確實なる者―の擁護に因りて我等は初て立つのではない。智者達者に隱れて赤子に現はさるゝ啓示の上に立つ我等は、學者の反對を恐れないと共に學者の辯護をも求めない。キリストは何等有神論を講じなかつた、彼はたゞ「我を見よ！」と叫んだ、何となれば神は彼の裏に充ち〳〵て居た。人は唯彼をさへ仰げば宜かつたのである、我等も斯くすれば宜いのである。然し乍ら過去千九百年間、此世の權者と學者とが其有する凡ての權力と知識とを以てして、少しもイエスと其敎とを破ることを得ず、今や冷澹なる知識の領域に於てすらも、斯敎の傳うる眞理の益々其力を增し進むは注意すべきである。誰か其の永遠の確實を否定し得よう。

「工匠の棄てたる石は家の隅の首石」となつた、これ「我等の目に奇しとする所」である、さはれ是れ「主の行し給へる事」である。（大正四年七月稿）

新舊兩約の結鎖

馬拉基書と馬太傳――預言者マラキと使徒マタイ

（一）

舊約聖書の最後は馬拉基書である。新約聖書の最初は馬太傳である。舊新兩約聖書は馬拉基書と馬太傳とを結鎖として相結べるものである。マラキの預言とマタイの福

音書とは、聖書（Holy Bible）に於けるその位置に於て近接せるのみならず、實にまた其思想に於て近接せるものである。

馬拉基書は預言者マラキの預言集である。舊約時代最後の預言者として、彼はそも〳〵何事を預言したであらうか。

彼の豫言の大部分は祭司と民とに對する叱責の語である。彼は自己の周圍を見た、そこには滔々として濁れる世があつた、刑罰の日の近きをも知らずして慘ましくも名利の巷に狂奔せる衆生があつた。豫言者の聖なる憤は火と燃えた。彼は彼等を責めざるを得ない。

彼は先づ僞りの身を法衣に蔽ひて僞りの生を營める祭司を責めた。彼等は父として神を敬はず、主として神を畏れず、エホバの聖名を侮りながら、「我等いかに汝の名を侮りしや」と云ふた（一の六）。祭壇の奉事を營むにあたつて多くの虛僞を敢てした（一の六以下）。「道を離れ、多くの人を律法に躓かせ、レビの契約を破」つた（二の

九）。抑も祭司とは何者ぞや。彼は天と地の間に立ちて、神を人に結び人を神に結ぶべきものである。生命と平安は彼を通して民に臨むべきである（二の五）。「眞理の法かれの口にあり、不義その唇にあらず、かれ平安と公義をとりて我れ（神）と共にあゆみ、また多くの人を不義より立ち歸ら」するがその本務である（二の六）。しかるに彼れ祭司等は此事を怠つた。「萬軍のエホバの使者」（二の七）たるべき彼等はサタンの支配にその身を托した。ゆゑに豫言者はエホバに代つて責めざるを得ない。

萬軍のエホバ言ひたまふ、汝等もし聽き從はず又これを心に止めず我名に榮光を歸せずば、我れ汝等の上に詛を來らせん、また汝等の祝福をのろはん（二の二）。

汝等はわが道を守らず法を行ふに當つて人に偏りしゆゑに、われも汝等を凡ての民の前に輕しめられ又賤しめられしむ（二の九）。

これ呪詛の語ではない、悔改を促す强き語である。かくまでに鋭烈なる態度を持して斯くまでに激越なる語を吐くは、偏に彼等を愛するがためである。

次に豫言者は滔々風をなして神とその眞理とを離れし民を責めた。人は神なくしては生きることは出來ぬ、ゆゑに眞の神をはなるゝ時に於て彼は他神に仕ふるほかはない。マラキの時代に於て民の仕へし他神は「此世の勢力」であつた。

汝等は語をもてエホバを煩はせり、されど汝等いふ如何に煩はせしやと、如何になれば、汝等凡て惡をなすものはエホバの目に善しと見え且かれに悅ばると言ひ、また審判の神は何處にありやと云へばなり（二の十七）。

惡人は榮えて驕りたかぶる、もし神ありとせばそれは惡を悅び給ふ神である、或は惡を罰する神なるものは無いのであると。これ不信なる彼等の語であつた。「語」は即ち彼等の人生觀である。また彼等民衆は云ふた。

神に服事ることは徒なり、われ等その命令をまもり且萬軍のエホバの前に悲みて歩みたりとて何の益あらんや、今われ等は驕傲者を幸なりと稱ふ、また惡を行ふものも繁盛になり、神を試むるものすら救はる（三の十四、十五）

と。信神は効なし、神を信じて世を狹く渡るは愚かし、むしろ如かんや惡を追ひ求めて榮ゆるものゝ態をまなばんにはと。これ彼等の人生觀であつた。豫言者は世を擧げてサタンを拜する現狀に熱涙を流さゞるを得なかつた。

神を棄てし彼等は當然神に獻ぐべきものを怠つた、「十分の一および獻物に於ける彼等の怠慢は著しくあつた（三の七—十）。豫言者はこの事に於ても亦彼等を責めた。

神を棄てし彼等は當然道德の弛廢を來した。凡そ國民の心に確固たる信念たゆる時に於て德義の衰頽は甚しい、そして其背德の種類は少なくない。さりながらマラキは其重なるものとして二つの罪を擧げた。

我等の父は皆同一なるにあらずや、われらを造りし神は同一なるにあらずや、我等先祖たちの契約を破りておのゝ〳〵おのれの兄弟に僞を行ふは何ぞ（二の十）。

これ第一の罪である。天の父を忘れし結果として人と人とが相欺く慘憺たる世の實狀を見て、彼は腸九回するの懷があつたのであらう。そして彼が擧げたる第二の罪は

離婚又は多妻等の輕々しく行はるゝことであつた。民の中には「他神の女を娶れ」る者が多かつた、すなはち異邦人の女を勝手に妻とする者が少なくなかつた(二の十一)。思ふにこれ正當なる妻の外に、異邦の女を納れて妾とせるもの多きを云ふたのであらう。また彼は次の如き語を發した。

つぎにまた汝等はこれをなせり、即ち涙と泣と歎とをもてエホバの壇をおほはしめたり、故に彼れ（神）もはや獻物を顧ず又これを汝等の手より悅び納れ給はざるなり、汝等はなほ何故ぞやといふ、そは是はエホバ汝と汝の若き時の妻の間にいりて證をなし給へばなり、彼女は汝の伴侶、汝が契約をなせし妻なるに、汝誓約にそむきて之れを棄つ（二章）。

これ民の間にはびこれる惡風であつた。棄てられし妻の訴ふるなる「涙と泣と歎」とが祭壇を蔽ふの狀態であつた。豫言者は此人倫の大罪の平然として行はるゝを見て叫ばざるを得なかつた、「汝等こゝろに謹みその若き時の妻を誓約にそむきて棄つる勿

れ」と(二の十六)、また「イスラエルの神エホバ云ひ給ふわれは離緣を惡み……」と(二の十七)。

かくの如くにして民の不信と罪惡とを責めたる豫言者は、更に進んで「我に歸れ、われ亦汝等に歸らん、萬軍のエホバこれを言ふ」(三の七) と宣した。これ實に馬拉基書の根本的精神である。「先づ汝等悔いて神に歸れ、然らば神汝等に再び歸りて汝等を惠まん」といふのである。汝等のなすべき務を充分に果たせ、宗教的にまた道德的に正しかれ、しからば天の窓ひらけて容るべき處なきまでに恩澤下らん、地の產物も葡萄も其收穫ゆたかならん、汝等は幸なる民となり地は樂しき處とならんと（三の十—十二)。律法遵守の結果としての恩惠の下附である。しかも物質的恩惠の下附である。敢て乞ふ、之を律法的信仰とし物質的思想として排する勿れ、又報賞的宗教として斥くる勿れ。之に大眞理のこもれることは思念を深くめぐらす人に明かなる事實である。

かくの如くにして民の不信を責めたるマラキは、遂に救主出現の日を豫言せざるを

得なかつた、「視よ我れわが使者を遣はさん……見よ彼れ（使者）來らん、萬軍のエホバ云ひたまふ」と。而して此使者は大審判者（great Judge）である。

されど其來る日には誰か堪へ得んや、その顯るゝ時には誰か立ち得んや、……彼は銀をふきわけて之を潔むる者のごとく坐せん、彼はレビの裔を潔め金銀の如く彼等をきよめん、而して彼等は義をもて献物をエホバに献げん、その時ユダとエルサレムの献物は昔の日の如くまた先の年の如くエホバに悅ばれん（三の二四）。

惡を滅ぼし善を生かす怖るべき審判である。なほ次の語がある。

萬軍のエホバ言ひ給ふ、視よ爐のごとくに燒く日來らん、すべて驕慢者と惡を行ふ者は藁の如くにならん、その來らんとする日彼等を燒き盡して根も枝も殘らざらん、されど我名を畏るゝ汝等には義の日出でん、其翼には醫やす力を具へん……（四章）。

審判である、恐ろしき審判である、驕慢積惡の徒を燒きつくす炎の審判である。されど救はるゝ者に取つては是れ大なる恩惠の日である。

（二）

以上の如く馬拉基書の特色に注意し來つた後、靜に馬太傳について考ふる時は、二者の相似を思はざるを得ない。馬太傳は他の福音書と等しくイエスの言行錄であることと固よりである。しかしマタイの目に映じたるイエスの言行の記載である。從てそれ自身の特色がある。我等は今この點を考へて見たい。

馬太傳に於て著しきはイエスの宗教家攻擊である。十五章と廿三章のパリサイ攻擊の鋭烈なるは他の福音書に見出し得ぬ處である。彼は彼等を呼んで「僞の豫言者」と云ひ、「蝮の裔よ」と名づけ、又「蛇蝮の類よ」と稱した。其他全體にわたりてイエスの宗教家詰責は處々に强き語を以て表はれてゐる。之を馬拉基書のそれに比して、深さに於ても强さに於ても大なる相違はあるが、二書の特色の類似を語るには充分である。

馬太傳に於てイエスが此世を—此世の民衆を—責めたる態度はいと鮮かである。彼は「姦惡なる此世」と二度云ふた（十六の四及び十二の三九）。エルサレムの不信を深き愛の語を以て責めた（二三の三七以下）。六章、七章は多くは當時の世の弊風を戒めつゝ、之と相對して新道德を說いたものである。約翰傳が此世の大多數者の不信を記せし書であるならば、馬太傳はその不信を責めし書である。そして此世を責めし所に馬太傳と馬拉基書の類似點がある。

前述せし通りマラキが擧げたる民の不道德は二つあつた。一は同胞相互の憎惡にして二は結婚の輕視であつた。そして不思議にも此二つは馬太傳の特色をなしてゐる。但し馬拉基書が同胞相互の不義を責めたるに對して、馬太傳は同胞相互の愛を薦めてゐる。（これ豫言書と福音書との根本的相違にして如何とも致しかたない）。山上の垂訓にある無抵抗と愛敵の敎は有名なものである（五の三八—四二及び同四三—四八）。人の罪を赦すこと「七度とは云はじ七度を七十倍せよ」とあつて、しかも續いて一の

例話がある（十八の二一以下）。路加傳に「七度免せ」とある（十七の四）のみとは大に異つてゐる。そして馬太傳特有の最後の審判の光景（二五の三一以下）に於ては、「兄弟の最微者の一人に行へる」小かなる愛の行爲が、其人の天國に受けいれられる條件となつてゐる。次に離婚を禁ぜる語は山上の垂訓にあり（五の三一、三二）、且十九章三節以下に於て根本的なる一夫一妻論と離婚禁止論とがある。かく馬拉基書特有の問題は亦馬太傳特有の問題である。

馬太傳に於て著しきは善行に伴ふ報賞の思想である。施濟をなす時、祈る時、斷食する時、凡て人に知られぬやう之をなせ、さらば「隱れたるに見給ふ汝等の父はあらはに報い給ふべし」、凡そ如何なる善事と雖も「汝等人に見せんために其義きを人の前に爲すことを愼め、然らずは天に在す汝等の父より報賞を得じ」と。これ馬太傳に著しき思想である（六の一—十八）。汝等人を赦さずば天の父も亦汝等をゆるさじ、人を赦す者はまた神の赦免をも得んと（十八の三五）。これ馬太傳の極力主張する處である。

「わが弟子なるを以て小さき一人のものに冷かなる水一杯にても飲ますものは、誠に汝等に告げん必ずその報賞を失はじ」(十一の四二)とある。されば天國に入るの條件も亦道義の實行である。

我を呼びて主よ主よと曰ふ者悉く天國に入るにあらず、たゞ之に入る者は我が天に在す父の旨に遵ふ(行ふ)者のみなり(七の二一)。

人の子は父の榮光を以てその使等と共に來らんその時各々の行に由りて報ゆべし(十七の二七)。

とある。そして二十五章所載の三個の天國の比喩は、何れも此意味を明示せしものである。馬拉基書が律法遵守の結果としての物質的恩惠の賦與を說くに對して、馬太傳は心靈的恩惠の賦與を說いてゐるのであらう、さりながら其律法的又報賞的なる點に於て兩書はまことに酷似してゐる。我等は律法的、報賞的の語に惑はされて其福音的ならぬを咎むべきでない、その如何に貴き眞理を藏するかを實驗的に究むべきである。

そは兎も角、此點に於ける二書の類似は注意すべき事實である。

同じくキリストの出現である、しかし之を恩惠の側に於て見ると刑罰の側に於て見るとは違ふ。同しく神の審判である、しかし之を救濟の方面より見ると亡滅の方面より見るとは違ふ。敬虔者は救はれ不敬虔者は亡ぶといふ一事實に對して、敬虔者の救はるゝ方面を主として見れば救濟は主にして亡滅は從である、不敬虔者の亡ぶる方面に重きを置けば刑罰が主にして恩惠は從である。そして前者の見方をするものは路加傳で、後者の立場に立つは馬太傳である。即ち馬太傳のキリストは一大審判者である、王の王、主の主である。

われ汝等につげん、凡て人のいふ所の虛しき言は審判の日に之を訴へざるを得じ(十二の三六)。

我が天の父の植えざるものは皆拔かるべし(十五の十三)。

それ呼ばるゝ者は多しと雖も選ばるゝ者はすくなし(二十の十六及二二の十四)。

之等はいづれも馬太傳特有の語である。天國の門より逐はれ、外の幽暗に投出されて、哀哭みまた切齒する者の多きことは、幾回も幾回も記してある（八の十二、二一の三一、同四三、二二の十三、二四の五一、二五の十二、同三十、同四一等）。キリストは怖るべき審判者にして意はざる時に來らんとするものなれば、その日その時を知らざる汝等は「怠らずして守」らねばならぬ、常に準備に於て全くなくてはならぬ、然らずば悔ゆるも詮なきに至るであらうと（二四の四二—四四、及び二五の十三等）。これ馬太傳の天國觀の著しき一方面である。言ふまでもなく馬太傳は福音書である。ゆゑに「罪ある人を招きて悔改めさせんがため」に來りしキリストを傳ふるものである、救濟の恩惠を宣べ傳ふるものである。しかし乍らそれと共に大審判者たるキリストを紹介するものである。

* * * * * *

馬拉基書と馬太傳とは以上のごとく相近接せる書である。マラキの豫言を醇化して之

に福音を加へしものが馬太傳である。使徒マタイにして若し紀元前三世紀に生れたならば、彼は必ず馬拉基書を編したであらう。豫言者マラキにして若しイエスの弟子たりしならば、彼は必ず馬太傳を草したであらう。かくの如くにして馬太傳と馬拉基書とは新舊兩約聖書の結鎖である。神の大眞理は馬拉基書まで進み來つて舊き世界の最後をなし、一轉して馬太傳に於て新生命に入るのである。一は舊き世界より新しき世界に手を伸ばし、他は新しき世界より舊き世界に手を伸ばし、兩手相握られて、玆に聖書は渾然たる一生命の記錄をなすのである。

さりながら馬太傳は新約聖書の全部ではない、從つて基督敎の全部ではない。馬太傳は新約聖書の卷頭にあるが如く、實に基督敎の門戸に立つものである。更に進んで馬可傳の世界的思想となり、路加傳の恩惠的救濟となり、約翰傳の永遠的生命に至ることを要する。これ我等の忘れてはならぬ點である。（大正五年三月稿）

イエスの無教會主義

生命自由の聲

(一)

基督教會——現代の一大獅子身像(スフインクス)！ 余は自ら其内部を見、教會信者たる友人の實驗談を聽き、又歐洲に於ける其の歴史を少しく研究して、教會といふものは「俗社會に於ける俗團體」たるに過ぎぬといふ結論に達したのである。そしてかく信ずるに至つた最後の理由は「キリストが無教會主義者であつた」といふ事である。キリストの無教會主義——これ餘りに大膽なる肯定であるかも知れぬ、あまりに輕卒なる結論であるかも知れぬ。しかし此事については余は長い間四福音書を讀み、且考へ、徐ろに判斷したのである。これより少しく此問題について述べて見たい。

(二)

四福音書を讀んで著しく讀者の心を惹くのは其自由の聲である。潑溂たるイエスの行動、其至醇の天性よりおどり出づる言、其人性の根本に穿ち入る教——自由にして虚僞なく、形式制度を超越して事物の眞源に肉薄する偉大——まことに勞めず紡がざる野の百合花である。此教を今日の教會の信條(ドグマ)と神學とに比して何等の大なる相違ぞ、其儀式と祈禱書と晩餐式とに比して何等の大なる相違ぞ、其統計と計畫とに比して何等の大なる相違ぞ。實にイエスの單純眞直なる教訓と今日の教會の基督教との間には、あまりに大なる差違がある。もし吾々が凡ての先見を去つて、(教會とか信條とかいふものゝ存在を知らず、此世の教師に何事をも教へられずして) 忽然として福音書を手にして讀んだとしたならば、イエスが今日のごとき教會の必要を認められたなどゝは夢にも思はないであらう。

余は四福音書を精細に調べて見て、イエスが教會の必要を説かれたごとく見ゆる個

所の、まことに少いのに一驚を吃したのである。即ちかゝる箇所はこれだけに過ぎぬ。

(一)　馬太傳十六章十八節、十九節（十八章十七節、十八節）。

(二)　同　二十八章十九節。

(三)　馬可傳十六章十五節、十六節。

(四)　約翰傳三章二十二節。

(五)　同　廿一章十五節—十七節。

路加傳には一個所をも認むることは出來なかつた。そして右の中(四)はイエスがバプテスマを施し給ひしことを記したもので、イエスが洗禮を施されたことは教會の必要を示されたものと見るわけにゆかぬ。今日でこそ洗禮と教會とは密接の關係を持つて居るけれども、もと〳〵此二者の間には、何等必然の關係はないのである。現に此場合に於ても、イエスは澤山の人に洗禮を施されたやうであるけれども、そのために教會といふものは生れなかつたのである。此洗禮は唯悔改の印であつたのみである。バプ

テスマを行はれたことが即ち教會組織の命令とは、到底見られないのである。且つもし教會及び洗禮なるものが缺くべからざるものであるならば、イエスは今日の傳道者のごとく一生洗禮を施し、教會の建設又は擴張に從事せられた筈である。然るに此事なきを見れば、イエスに取つては之等は小問題であつたのである。(イエスが洗禮を施し給ひしことは此處の外に記してない。イエスに取つて洗禮は肝要なことでなかつたのである)。

次に(二)(三)は傳道の必要を述べられ、それにバプテスマを施し云々と云ひ加へられた所であつて、前同樣教會の必要を說かれたものとは見えぬ。其上馬可傳十六章九節以下は後人の附加せしものと云ふことに略ぼ一定し、又(二)（馬太傳廿八章十九節）のバプテスマと云ふ語は靈的再生を示すとするが正しい故、この(二)と(三)は洗禮の命令としてすら甚だ薄弱である。まして之を教會組織の命令とすることは非論理の極である。

次に(一)について考へて見たい。イエスはペテロに向つて「我教會をこの磐の上に建

つべし」と命ぜられた。羅馬教會の據て立つ根據は茲にある。しかしイエスは既往現在の如き教會の設立を命じ給ふたのではない、たゞ「信徒の團體」の意に於て教會の語を用ひ給ふたに過ぎぬ。信徒の團體の基礎がイエスをキリストとする信仰であるべきことを示されたのである。これを教會建設の命令と認むる時は極て不完全なるものである、之を信仰の根柢を示せしものと見る時は完全なるものである。とにかく此節は所謂教會の建設を命じ給ひしものとしては不充分であると云はねばならぬ。(馬太傳十八章十七節、十八節も之に似たものである)。

さて最後の(五)(約翰傳二一の十五—十七)は、イエスが教會建設を命じ、且ペテロを其首長に任ぜられた場所と解釋せられて居るやうである。しかし公平に考へてみて「我羊を牧へ」とだけの言葉は教會建設命令の語とは見えぬ、唯「自分の失きのちの信者の指導を賴む」といふ位の意味にしかとれぬ。到底教會の必要を明かに說かれた語とは見えぬ。殊に二十一章全部が後年に附け加へられたものであるとの推定は、今日極て有力なのである。

右のごとく教會組織の辯護ともなるべき場所は極て少く、且無効又は薄弱なる辯護であつて、福音書に極めて微かな色をなして居るにすぎぬ。何故に人は此微かなる色を重んじて彼鮮かなる色を棄てるのであるか。彼鮮かなる色とは之から自分の述べやうとするイエスの無教會的說教である。まことにトルストイの云つた通り、今日の教會なるものは福音書中の弱き部分、曖昧なる部分を重んじ、其大部分なる强き箇所、明瞭なる箇所を棄つるものである。教會とか儀式とか教義とかいふものは、此弱き小部分を妙な風に解釋して其上に成り立つて居るものである。甚しいかな、彼等の人の子を誤るや。

(三)

余の思ふ所ではイエスの無教會的精神は次の各節にあらはれて居る。

馬太傳九章十二—十三、同十四—十七、十一章廿五—廿六、十二章一—八、同九

—十三、同四十九—五十、十五章一—二十、十八章十九—二十、二十章廿五—廿八、二十三章全部。

*馬可傳二章十八—廿二、*同廿三—廿八、*三章一—六、*同三十四—三十五、*七章一—二十三、*十二章三十八—四十。

*路加傳五章三十三—三十九、*六章一—五、*十一章三十七—五十四、十三章十—十七、十四章一—六。

約翰傳四章二十一—二十四、五章一—十八、十章十六、十一章二十五—二十六、十五章一—七、十六章一—二。

使徒行傳一章五、同八。

實に二十九箇所の多きがあるのである。其中*印を附けたものは前掲のものと等しい所なのである。それ故*印を附せる此等九箇所を除くと二十箇所になるが、余はこれを凡てイエスの無教會的精神の發現と見るのである。讀者もし上掲の各項を聖書にて

讀み、熟思せられたならば、イエスの教會、形式、制度に對する意見と態度を知るに於て充分であらうと思ふ。自分は右の各項について一々詳述し度いのであるが、あまり煩瑣に亘る故、簡略に記すつもりである。

附、使徒行傳より二個所採つたのは、此書の一章の前半は尙イエスの言行を記したもので、福音書の中に入れて考うべきものであると思うたからである。

馬太傳九の十二—十三

バリサイ人は猶太教の宗教家であつた、教會信者であつた。其儀式を守るの嚴格なること他に比なく、もし今日の教會信者たらしめば、其集會に出づるの規則正しきこと、其儀式を嚴肅に行ふこと、其傳道や聖書研究に熱心なること等に於て、先づ模範信者であつただらうと思ふ。彼等は決して惡人ではなかつたのである、彼等は熱烈なる宗教的黨人であつたのである。此教會信者をイエスは「康强(すこやか)なる人」として自分に用なきものとし、「病ある者」に親まれたのは、イエスが當時の教會以外の野に獨立傳

道をされたものと見ざるを得ない。稅吏や罪人がイエスの友であつた。そして今日の基督敎會なる者は、果してイエスのやうに稅吏や罪人（犯罪人）を友とするものであらうか。否余の看る所では社會が惡人とするものは敎會も惡人とし、社會が貴ぶ人は敎會も貴ぶ。社會に棄てられた人を敎會が輿論に反對して庇護したことは、寡聞なる余の知らぬ處である。そして社會的地位のある者を敎會は信者の優秀なるものとして貴ぶ。富者、役人、代議士が會員中にあればそれが其敎會の誇となる。これが敎會の實狀であつた、又實狀である。罪人の友なるイエスが今日生れたならば敎會に贊成されるとは思はれない。

且「矜恤を欲みて祭祀を欲まず云々」の語は、イエスが儀式を好まずして實行を重んじたことを示す。イエスは儀式のやうなことを一生爲なかつた、神を祭る儀式といふものは一向爲なかつた。もし宗敎に儀式、形式が必要ならばイエスもなされた筈であるのに、これなきを以て見ればイエスは儀式を好まなかつたに相違ない。イエスの

形式打破、無敎會の精神は明かである。

馬太傳九の十四—十七

イエスの弟子は一向斷食をしなかつた、ヨハネの弟子の詰問に對するイエスの應答たる「……のち新郎をひきとらるゝ日きたらん其時には斷食すべき也」のすべき也は、するならん又はするなるべしと改譯すべき處である。(shall they fast が改訂聖書には will they fast と訂正してある)。自然に斷食をするであらうと言ふ意味である、儀式としてゝはない。

十六、十七節は十四、十五節の接續として見て、新信仰に舊儀式を被せることの害惡を述べられた語と思ふ。我新しき信仰には儀式を要せずと、これ儀式的宗敎の舊套を脫して自發的信仰を說いたものである。

馬太傳十一の二五—二六

「智者達者に隱して赤子に顯し給ふを謝す」と。智者達者とは神學者宗敎家の類を

指して言ふ。教會は常に神學の巖の上に建つ。アウガスチン以來教會の根柢は神學にあつた。神學を以て反對說に當り、神學を以て說教をし、又神學を以て牧師を養成す。神學と教會とは古も今も不離の關係を持つてゐる。しかるにイエスは神學者を輕んじた。以て教會の精神とイエスの精神との相乖離して居ることがわかる。イエスには神學は一毫もなかつた。四福音書は天然の聲に充ち〳〵て居て、人造の聲なる神學を容れる餘地がない。甚しいかな教會の精神のイエスの精神と異れるや。イエスの大精神は教會に反對してゐるのである。之に氣が附かずに聖書に據つて教會が立つのは危險至極である。中世紀の天主教會が、神學を教へて聖書を禁じたのは首尾一貫せる賢き方法であつた。今の教會も自家を防禦せんためには宜しく之に倣ふべきである。

馬太傳十二の一—八

之も形式無用、儀式反對の個所で前と同じ精神である。之を唯パリサイ攻擊として

のみ見て安心して居る教會は淺眼者である。イエスは茲に萬古の眞理を道破されたのである、即ち眞の信仰には儀式、形式、規則は要らぬとの眞理である。此イエスの大精神を閑却して、徒らなる辭句に拘泥して、教會を組織し儀式を定め、化石的宗教を擁護してゆく教會は、パリサイの轍を踐んで居るのである。

馬太傳十二の九—十三

これは前と同樣である。

馬太傳十二の四九、五十

「すべて我が天に在す父の旨を行ふものは是れわが兄弟わが姉妹わが母なればなり」と。バプテスマを受けしものは我兄弟なりと言はず、教會に入りしものは我姉妹なりと言はず、晩餐式に列するものは我母なりと言はず、唯天父の旨を行ふものは然りと。愛の行爲、犧牲の行爲—かくてイエスの兄弟となる。以てイエスが教會なる組織物を必要としなかつたことがよくわかる。教會が一の組織物を造り、それを以て「神の國」

と稱し、此中に在るものゝみ天國に入りて、其外のものは滅亡すべき憐れなる罪人と見る考の、如何に狹量幼稚にして現世的、小兒的なるよ。イエスには形の上の區劃などは眼中にない、偉大なる人は皆さうであつた、唯物の眞に穿ち入る。我等は隨處にありてこのまゝにて聖旨を行ひ、以てイエスの兄弟姉妹となるのである。何ぞスパイア（高塔）と十字標とを要せん。

馬太傳十五の一—二十

此處を讀んで第一に感ずることは神の誡と遺傳との對照である、道德と制度との對照である、善行と因習との對照である。パリサイは儀式に拘泥したゝめ善行を怠つた、儀式だけの實行で安心してしまつた。イエスは儀式を犯し遺傳に背いて道義の上に立つた。「遺傳により神の誡を廢くせり」（六節）とは餘程考ふべき言葉である。此よりはもと by とあるのを改訂聖書には because of としてある、即ち故を以てと譯すべき處であらう。儀式の故を以て善行を怠れりとの意味である。それ故此語はイエスが

儀式の弊害を說かれたものと見ねばならぬ。儀式を重んじ遺傳を固守するを以て宗教的義務と心得居るものは、それを行つたゞけで滿足し、それだけで宗教的生活であると考へて、實際的信仰生活を怠り易いものである。即ち教會の外にある時と儀式以外の時間には全くの俗人となりがちである。それ故儀式の過重は神の誡を忘れしむるものであるとイエスは教へたのであらう。

我等は實際これを認める。あゝ教會の靜肅なる廣間、其莊嚴なる聖壇、其美妙なる音樂、其感情に訴ふる說教——まことに我等の宗教的感情を刺戟し、我等はそのまゝに天國的慰樂を受けるやうな氣がする。併し我等はそれが自分の宗教的生活の全部であると思ひ易い、それだけで滿足する。それで殘りの六日には信仰はないのだが平氣で居るといふことになる。眞の信仰の敵は遺傳、形式であるとの言をなしたイエスはどうしても教會の味方ではない。尙ほ十節以下も同一の精神であることは眞ぐわかる。

馬太傳十八の十九、二十

「二人のもの心を合せて求めば父はこれを成したまふ」と言ひ、「わが名のために二三人の集れる處には我も在り」と言ふ。どう見ても此二三人の集合は教會の集會とは思へぬ。唯「二人のもの心を合せて」と言ひ、唯「二三人の集れる處」と言ふ、此語に何等の教會的制限はない。唯二人のものが集りさへすれば宜いのである。實に濶い御言葉である、教會に屬するものゝ集會と言はぬ。教會に入らねば信者でないといふ現今の教會の狹い、小供らしい申分と比較にならぬ。唯イエスの名のために二三人のものが集りさへすれば其場所にイエスは在りたまふのである。

且自分は二三人といふ語に注意するものである。現今の教會に二三人の集會といふものはない、もしあつても其願ふ處でない、已むを得ざる處である。教會は大集會を望み信徒の數の多きを誇り且願ひ、多數の力に依て勢を張らうとする。それで人が多ければ教勢盛なりと言つて喜ぶ。甚しきは「今年は是非とも何十人の信者を造らねばならぬ」などゝ計畫する、まるで政黨と少しも選ぶ所がない。しかるにイエスは二三

人の集れる處と言ふ、まる〳〵彼が教會を必要とせられなかつたことがわかる。

馬太傳二十の二五—二八

これは現世と弟子の團體との區別を説かれたもの、又俗人と信者との別を説かれたものである。現世人の理想は人の上に立つて權者富者たるにある、信者の理想は低き現世的階級に安んずるにある。然るに現世の權威を貴び富者權者を重んじ、又自らの組織を現世の王國に倣つて法王、大監督、監督、牧師、傳道師、信者等澤山の階級を造る教會は果してイエスの嘉したまふ所であらうか。あゝ宗教の現世に降る、天下の醜陋こゝに至つて極まる、イエスは到底教會の破壞者である。

馬太傳二十三章全部

パリサイ攻擊である。實に形式的宗教家を詈り得て盡して居る。宗教の固形物がパリサイ宗である。教會はパリサイ程甚しくはなからう、しかしパリサイに似た所が果してないか。教會、神學、教條、儀式——これは宗教の形骸である、これに拘泥する

とパリサイになる。二十三章を熟讀して余は思ふ、程度の差こそあれ古へのパリサイと今の教會とは其種類を同じうする、イエスが現世に生れたならば教會の味方でなくて其敵であつたであらうと。

實に不思議なのはイエスがあまりに多くパリサイを批難したことである。必ずしも惡人ならぬパリサイ、矢張り宗教信者なるパリサイ、等しく神を主とするパリサイを其敵としたのは不思議に思はれる。思ふにイエスは眞宗教と僞宗教との區別を明かにし、形骸的儀式的宗教を痛く排斥し、後者を以て最も醜陋なる最も危險なるものとして排擊したる大宗教改革者であつたからであらう。詩人マシュウ・アーノルドの云つたとほり、宗教と神學とが同意語で倫理が宗教の反對語であるのではなく、宗教倫理が同意語で、神學形式等が宗教倫理の反對語なのである。眞の宗教は形式を超絶する、固形的宗教に反對する。イエスは教會の敵である。教會はイエスを主としながら、二千年前イエスの死を賭して排擊したるパリサイの覆轍をしてをるのは、むしろ大なる

悲劇ではないか。

約翰傳四の二一—二四

「靈と眞とを以て父を拜す」といふ。此のところを讀んで我等はイエスの超形式的精神を鮮かに知る。唯靈と眞とを以て神を拜すれば宜いのである。「此山のみにあらず又エルサレムのみにあらず」、到る處、隨處隨意に父を拜す、要は唯靈と眞とのみ、必ずしも教會を要しないのである。到底イエスは教會の組織を命ずるやうな人ではない。

約翰傳十一の二五—二六

「我を信ずるものは活くべし」と言ふ、洗禮を受くるもの、教會に入るものは活くべしと曰はず、唯主を信ずるのみで活きるのである。有形的條件は一つも無いのである。

約翰傳十五の一—七

前同樣、唯キリストに繋(つなが)れば宜いのである。「汝等われに居れ、さらばわれ亦汝等に

居らん」。團體や儀式はどうでも宜い、唯各自がキリストに繋がれば宜いのである。

約翰傳十六の一—二

弟子を會堂より黜け、又弟子を殺すものがかくして神に仕へてをるのだと誤想する時が來るだらうと云ふのである。どうも教會はイエスの味方ではない。教會はイエスの弟子を黜けて以て神に仕へて居ると思ふ處であると曰ふ。會堂とは猶太教のであるかも知れぬ、しかしとにかく教會といふものは得てかゝることをするものである。神の忠僕が却て教會より黜けられ殺されるのである。これは歴史上其例に乏しくない。ルーテルのごとき其著しき例である。數年前トルストイの死を祈願した某高僧が露國にあつた。此語を發したイエスは少くとも教會の味方ではない。

使徒行傳一の五

聖靈のバプテスマを重んじ水のバプテスマを輕んず、イエスの形を輕んじて實を貴んだことがよくわかる。

使徒行傳一の八

聖靈臨んで主の證人と成るべしと曰ひたまふのみ、教會を組織せよとも、洗禮を授けよとも、又色々の儀式をせよとも命じ給はない。さうしてこれがイエスの最後の御命令であるのを見れば、教會組織の命令は無かつたものと思はれる。もし教會組織が大切のことなれば、最後のことゝて固く且明かに命じたまふた筈である。

(四)

右のごとく教會反對もしくは形式反對の個所は數多く且明瞭であるのに、教會或は洗禮の必要を主張した處は數も至て少く、且其語は明かにさうとは取れぬ所である。異むべきは教會が彼の多と明とを棄てゝ此の少と不明とを執つて其上に立つことである。余は上述の理由により「イエスの無教會主義」といふことを敢て云ふのである。

詩人ローエルは唱つた。

一の心情が歎ぶ所、

窮しむ所、
一の心情が
更らに眞實高貴の生活を努むる所、
そこに眞人の誕生地あり、
これぞ廣濶なる祖國なれ。

と。預言者ラスキンは叫んだ。

眞の敎會は一人の人が援助の手を伸ばして他の人に接する所にあり、是れ曾て有りし所の又あらん所の唯一の聖公會又母敎會なり

と。あゝ神の大宇宙は自由にして廣濶である。我等は野の百合花の如く、花より花へ飛ぶ蜜蜂の如くあれば宜いのである。無益の形式は徒らに吾等を縛つて俗世の人たらしむ。大自由の生涯は我等の願である。これを妨ぐるものは此世の形式習俗である。吾等は獨創の人たらんと願ふ故に、已むを得ず形式の敵となるのである。(明治四十四年七月稿)

第三編　實驗と感想

『歎異鈔』を讀みて感あり

基督信者より見たる親鸞上人の信仰

(二)

日本紀元第十九世紀、平安朝の末葉、世は源平爭覇の巷と化して、騷亂天下を亂し、人心一日も安きことなかりし頃、獨り東山吉水の邊に行ひすませし聖者あり、法然上人と云ふ。「南無阿彌陀佛、往生之業念佛爲本」と專修念佛を唱道して淨土宗を創始し、天下靡然として之に赴く。一代の聖德數へ難きものあり。高弟親鸞更に之を普く北越關東に傳へ、一向念佛の旨を更に發揚して、此敎益〻醇化し、淨土眞宗茲に興る。かくて佛敎は眞に能く下層民間に浸潤して我國民的生活の生命となれり。

親鸞上人全集の中『歎異鈔』を以て其最大傑作となす。彼が信念の眞髓は遺憾なく

之に表れたり。其所說の深刻にして徹底せる、其文字の痛切にして直に肺腑に迫る、其全體に亘つて强烈なる實驗の光を放つある、まことにこれ日本宗敎文學中最大の作たるを思はしむ。否吾人は寧ろ之を以て我國二千六百年間第一の文學と呼ばんと欲す。何となれば、若し彼『源氏物語』にして日本最大の文學と稱し得べくば、我『歎異鈔』は遙かに之に勝る深奧の內容と、それに伴ふ切實の文辭とを有すればなり。約百記を出し羅馬書を產することなかりし我等の祖先も、幸に一『歎異鈔』を產み出せり。我等聊か慰むる處なからずや。余は玆に基督敎徒の一人として、『歎異鈔』讀後の所感を述べんと欲す。

附言、『歎異鈔』の解釋に就ては專ら曉烏敏氏の『歎異鈔講話』に依れり。又余は親鸞上人の信仰を尙能く了解せんがために、多田鼎氏の『正信偈講話』其他眞宗に關する五六の書をも併讀せり。余の佛敎知識の極めて淺薄なる、誤解を抱けるもの多からん、讀者の寬恕を乞ふ。

(三)

(一)信仰の根抵＝彌陀の本願

親鸞の信仰は絶對他力にあり。如來は絶えず我等衆生を救はんとしつゝあれば、我等此光明に依れば可なりと、これ彼が信仰の根抵なり。先づ曰く、

彌陀の誓願不思議に助けられ參らせて、往生をば遂ぐるなりと信じて、念佛申さんと思ひ立つ心の起る時、乃ち攝取不捨の利益にあづけしめ給ふなり

と。之を解せば、阿彌陀佛即ち如來は一切衆生を救ひて之に安慰を與へんとの願望を有し給ふ、されば此佛力に助けらるれば大安心の境に生るゝなりと信じて、「南無阿彌陀佛」と念佛を唱へんと決心する時は、如來我を攝め取りて永久に捨てず必ず大安慰の境に導き給ふとの意也。神を信ずる者の安心の根抵も亦實に之に外ならず。若し「彌陀」に代うるに「神」を以てし、「往生」に代うるに「永生」を以てし、「念佛申さん」に代うるに「信仰的生涯を送らん」を以てすれば、此語はまことに鮮かに基督教徒が心靈的實驗を表はすものたらん。

神は我等を救はんと常に焦慮し給ふ。我等神の救濟を信じ、悔改して父に歸らば、我等にして自ら棄てざる限り、父は永久に我等を棄て給はざるなり。

イエス其弟子に曰ひけるは、誠に汝等に告げん富める者は天國に入ること難し…

…弟子之を聞きていたく驚き曰ひけるは、然らば誰か救を受くべきか、イエス彼等を見て曰ひけるは、是れ人には能はざる處也、されど神には能はざる所なし(馬太傳十九の二三―二六)。

實に人は自ら己を救ふこと能はず、唯神のみ人を救ひ給ふ。神の我を導きて救濟に入れ給ひしことを信じて、初て信仰の不動を感ずるなり。我等は積罪暗迷の罪人、惡を重ぬる多くして些の功なし。然るに不思議なるかな、大愛の天父は絶望悲愁の底より我を救ひ上げて、天國の幸福を得しめ給へり。恩惠何ぞ大なる。而して恩惠は之に止まらず、我等の心の「中に善き工を始めし者これを主イエスキリストの日までに全う」し給ふ。而して此の凡てはたゞ一に我が小なる悔改に基く。即ち我は父を棄てし放蕩

息子にして、一度び「父よ我れ罪を犯したれば汝の子と稱ふるに足らざるもの也」と叫びて父に歸りしに、父は「見て憫み走り行き其の頸を抱きて接吻し」、美服を着せ、指環をはめ、履をはかせ、肥えたる牛を宰りて祝宴を催し給ひし也。わゝ無限の恩惠、これぞジョン・ハッスを起たせ、ルーテルを起こし、クロムエルを奮起せしめし福音的信念に非ずや。あゝこれぞ多くの信徒をして感奮興起、十字架を擔ひて主の跡を逐はしめし原動力に非ずや。あゝこれぞ使徒パウロをして彼の大なる献身的生涯を送らしめし大確信にあらずや。

「往生」の一語、聖書の「永生」、「天國」又は「神の國」と相似たり。此世にて此儘の安心の境を「往生」と云ひ、此狀態の續きて來世に至るをも「往生」と云ふ。これ健全なる信仰的狀態なり。現世は兇惡修羅の巷なりとするも、我等はイエスと共にある境涯の「神の國」なるを信じ、イエス我と偕なる以上死も尙ほ此境を破り得ずして、永久に「神の國」を感得すべきを想はざる能はず。猶太人は「神の國」を遠き未來の

地上に想像し、有形の天國を仰望せり。イザヤの大なるも其希望は係りて一に此處にありき。「神の國は何れの時來るか」(路加傳十七の二十)との問は寔に猶太人恰好の質問なりき。然るにイエスの答の意表に出づるを見よ。

神の國は顯はれて來るものにあらず、此に見よ彼に見よと人の云ふべきものにもあらず、神の國は汝等の衷に在り。

寔にイエスは其天國觀に於てユダヤの時代思想を超絶したるにて、所謂現在安住の趣茲に鮮かなりと云ふべし。イエスは又曰へり。

永生とは唯獨りの神と其遣しゝイエスキリストを知るこれ也(約翰傳十七の三)。

我が言を聞き我を遣しゝ者を信ずるものは永生を有ち、且審判に至らず死より生に遷れり(約傳翰五の二四)。

「遷れり」と云ふ此動詞の文法上現在完成なるに依て、我等は「永生」なるものゝ此世にて此儘にて享受するものなるを知る。而して現在の實驗を源として未來に及ぶも

のとなす。是れイエスが獨創の新信仰に非ずや。さればこそ「神の國は近づけり、汝等悔改めて福音を信ぜよ」と宣言し給ひしなれ。未來のみに偏せず現在のみに執せず、現在の連續として未來に迄及ぶ、眞生命にして且永生なり。我等イエスの絶大を思ふと共に、親鸞の偉をも敬せざる能はざるなり。

『歎異鈔』は尙曰へり。

彌陀の本願には老少善惡の人を選ばれず、唯信心を要とすと知るべし、其の故は罪惡深重煩惱熾盛の衆生を助けんがための願にてまします

と。正にイエスの「康强なる者は醫者の助を需めず唯病ある者之を需む……夫れ我が來るは義人を招くために非ず、罪ある人を招きて悔改めさせんがためなり」(馬太傳九の十二、十三)と曰へるに似たり。又曰ふ、

然れば本願を信ぜんには他の善も要に非ず、念佛に勝るべき善なき故に。惡をも恐るべからず、彌陀の本願を妨ぐる程の惡なきが故に。

と。これ危險なる敎として古來より批評の的となりしものなりと云ふ。吾人は念佛なるものゝ効果如何を知らず、暫く之を信仰の意に代へて信仰萬能の意を表せしものと見るに、玆にパウロの福音的信仰の芳味を見ざる能はざるなり。

只キリストイエスの贖に賴りて神の恩をうけ功なくして義とせらるゝなり(羅馬書三の二四)。

……律法より釋され儀文の舊樣に由らず靈の新樣に由りて事ふ(同七の六)。

……然れど神汝等をして凡ての罪を赦し彼と偕に生かしめ、且手にて錄しゝ所の我等を攻むる規條の書即ち我等に逆ふものを塗抹し、これを中間より取去り釘を以て其の十字架に釘け給へり(哥羅西書二の十四)。

「行に由つて救はれず信仰に由つて救はる」と、これ使徒パウロが大膽なる宣言に非ずや。善行を以て救はるゝに非ず、善行を爲す能はざるも敢て怖るゝを要せず、惡を行ひつゝありとも敢て失望するを要せず、罪の身の此儘にて神は我を救ひ給ふ。「神そ

の子の靈を汝等の心に遣りアバ父と呼ばしむ」(加拉太書四の六)、我等唯アバ父と呼びて神の許に至れば足る、敢て其他を要せずと。

而してパウロは、當時の教界に於て、一般の基督教傳道者は云はずもがな、使徒等のなかに於てさへ、彼れのあまりに透徹せる福音主義に公然反對の矢をはなちたるヤコブの如きありしと雖も、萬難を排して之を主張して恐るゝなかりき。我等は哥林多書に於て加拉太書に於て、彼が「僞教師」を排し「異なる福音」を斥け、「我等にもせよ天よりの使者にもせよ、もし我等が曾て汝等に傳へし所に逆ふ福音を汝等に傳ふる者は詛はれよかし」(加拉太書一の八)とまで激語せし健鬪を見て、驚歎の聲を發せざるを得ず。彼れ何が故にかくまでの狂熱を以て彼の福音主義を擁護せしぞ。曰くこれ、彼が長き深刻なる煩悶の實驗を嘗め絶望海中に溺れんとせし時、彼を救ひあげて大安心の境に入らしめし「喜の音」なればなり。吾人は羅馬書七章に於ける彼が靈肉衝突の苦悶の一閃影のしかく熾烈なるを見て、彼が煩悶苦鬪の歴史の如何に悽慘切實なりしかを想ふ。實に先づ道德的苦悶の或時期ありて、而して後福音主義の靈的歡喜に入るを得るなり。

吾人は親鸞上人の求道の熱烈と其靈的苦惱の熾烈なりしとを聞く。蓋し「我行ふ處のものは我れも之を是とせず、我願ふ處のもの我れ之を爲さず、我惡む所のもの我れ之をなす……あゝ我れ惱める人なる哉、此死の體より我を救はん者は誰ぞや」とのパウロのそれに等しき煩悶を經てこそ、彼の如き絶對他力の信念に入るを得しなれ。

パウロの福音主義、親鸞の純信仰主義を評して危險となす者は、之を一の教義又は命題と解して實驗の聲とせざれば也。寔に之をたゞ一の教義として了解するに止まらんか、其の危險は甚だ大なるものあり。曰く「善も要にあらず惡をも恐るべからず」と、これを辭義なりに取りて、人間存在の基本、社會成立の根柢も崩れん。然れども己れの極罪迷執に苦しむ暗中に泣く赤子には、こは眞個救拯の音れに非ずや。

パウロは此事を慮りて警告する所ありき。

そは兄弟よ汝等は召を蒙りて自由を得たる者なれば也、されど其自由を得るを機會として肉に循ふ勿れ、惟愛を以て互に事ふるとをせよ（加拉太書五の十三）。

われ云ふ汝等靈に由りて歩むべし、さらば肉の欲をなすと勿らん（同五の十六）。

然れどもパウロの時既に、淺薄者流の自由を得しを機會として平然として惡に走り、尙且つ信者を以て任せしものありしと等しく、法然が念佛往生の敎を說くや、之を淺く解して却て惡事を行ひ、恬として羞ぢざる末派ありしと云ふ。さりながら末派の迷妄の故を以て此貴き敎の價値は一毫も減ずるにあらず。「光欲しゝと暗中に泣く赤兒」（テニスン）に取りては、福音主義は依然として絕對の價値を有するなり。あゝ「時は滿てり、神の國は近づけり、汝等悔改めて福音を信せよ」と、此語何ぞ我靈をして躍らしむるぞ。「瞽者は見、跛者は行み、癩者は潔まり、聾者は聞き、死にし者は復活され、貧者は福音を聞かせらる」と。あゝ我等心靈の瞽者、跛者、癩者、聾者、死者、貧者も福音に由りて復活するを得。何たる絕大の幸福ぞや。われ等天父の恩愛に感泣せざらんと欲するも能はざる也。而して之に似たる芳味を親鸞の信仰に見て、我等は心靈の共鳴を感せざるを得ず。

（三）

（二）智識以上の信仰＝信仰は宗敎知識に非ず

親鸞上人が晩年京都に還り住みし時、關東より態々尋ね來りし人々に語りし處左の如し。

各〻十餘ヶ國の境を越えて身命を省みずして尋ね來らしめ給ふ御志、偏に往生極樂の道を問ひきかんがため也。

然るに念佛より外に往生の道をも存知し、又法文等も知りたるならんと、心にくく思召し御坐てはんべらんは、大きなる誤りなり、もし然らば南都北嶺にもゆゝしき學匠たち多く坐せられて候なれば、かの人々にも會ひ奉りて往生の要よくよく聞かるべきなり。

親鸞に於きては、たゞ念佛して彌陀に助けられ參らすべしと、よき人（法然を指す）の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なき也。

之を吾人の語を以て曰はゞ「信仰は宗教的知識に非ず、信仰は唯信仰なり」となる。まことに疑ふ能はざる眞理なり。

信仰もしくは靈的生命の化して知識となりたるもの、之を「宗教」と曰ふ。これ生命の形骸に知的裝飾を加へしもの、所謂「白く塗りたる墓」の類なり。之に命なく、生氣なく、切るも鮮血の迸るなし。生命なく熱氣なき尨大なる怪物！しかも人を虐げ世を賊ひ、常に僞善を生み紛騷を釀し、時に流血迫害の慘をも敢行す、カーライルの僞信（カント）と呼び僞善（ヒポクリシ）として極力排斥せし處のもの也。これ專ら信仰を知的了解の對照物とし、內的生命の把持を度外視し（有意識的に或は無意識的に）、偏に了解即信仰に終始するに由る。大なる自己欺瞞に非ずして何ぞ。所謂基督教とそれに伴ふ神學は概ねこれなり。所謂佛教と稱するものは概ね是れなり。何れも煩瑣なる知識を携へ來つて砂

上に家を築かんとす、危からずとせんや。しかも此危きを敢てなす者世に甚だ多し。

エマスン曰く、

人は一度行ひて次に其行爲の犧牲となり奴隸となる、一行爲は其人をして之を繰返へさしむ、試驗的の第一行爲は神聖犯すべからざるものと化す、熱火的改革も自己の偉感（アスピレーション）を儀文とし誓約とすれば、同志と共に形式に執着して偉感を失ふに至る、クェーカーは友派を建て、シェーカーは僧院を建て舞踏の式を起せり、而して各〻靈を喋々すと雖も、既に靈は失せて「反覆」殘れるのみ、而して反覆は靈にあらずして死なり

と。一個人にして尙且つ然り、況んや開祖死後の信仰的生命に於てをや。其枯死して知識と化するの傾向ある、まことに人界の常態なり。然り人界の常態なりと雖も、我等は飽くまで知識以上の信仰を思はざる能はざるなり。

然り、信仰は知識以上なり。生命は實驗に由り感得せらるゝなり。知識に非ず、又

知識の基礎を要せず。有神論と贖罪論と基督學（Christology）とは生命の實得に些の交渉を有せず。去れよ、彼の紛々たる談理、此の擾々たる教説！我等は實驗の信味の芳烈を慕ふて、抽象の神學論に耳を假さじ。さればイエスは云へり、

天地の主なる父よ、此事を智者達者に隱して赤子に顯し給ふを謝す（馬太傳十一の二五）

と。而して屢、嬰兒を祝して之を天國に居る者に比し、知識に執着するパリサイの人の僞善を忌憚なく喝破せり。而して此點を最も明かに祖述せしものを使徒パウロとなす。コリント前書第一章第二章は是れ「信仰非知識」の雄渾なる一大宣明に非ずして何ぞ。

それ十字架の敎は沈淪者には愚なるもの、我等救はるゝものには神の力たるなり。……そは汝等の信仰をして人の智慧に由らず神の力に由らしめんと欲へばなり。……ギリシャ人には愚なるもの也、されど召されたる者には……キリストは神の大能又神の智慧なり。

知識の立場より見ては極て愚なるもの、されど實驗の上に立ちては明かに神の力なり。知識の精巧と優美とは之をギリシャ人に求めよ、我等救濟と能力を希ふものは單純に十字架のイエスを信ずるのほか道なしと。世の煩瑣の知識を一蹴し去るの態度、甚だ鮮かなるものありと云ふべし。

我等は念佛其者の功德、効果を知らず。然れども、念佛は唱ふべきが故に唱ふるのみ、之に何等の知的根據なしと宣し、

念佛はまことに淨土に生るゝ種にてやはんべるらん、又地獄に落つる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり

と迄に極言して、實驗の信味を唱道し知的了得を排したる親鸞の態度を、偉大なりとするものなり。

(三)道德以上の信仰＝罪人の救濟

善人尙もて往生を遂ぐ況んや惡人をや、然るに世の人常に曰く、惡人尙ほ往生す、

如何に況んや善人をやと、此條一旦その謂れあるに似たれど本願他力の意趣に背けり。

其故は、自力作善の人は偏に他力を賴む心缺けたる間、彌陀の本願にあらず、然れども自力の心を飜へして他力を賴み奉れば、眞實報土の往生を遂ぐるなり。煩惱具足の我等は、何れの行にても生死を離るゝことあるべからざるを、憐み給ひて願を起し給ふ本意、惡人成佛のためなれば、他力を賴み奉る惡人もとも往生の正因なり。

此一段は罪人の救濟を述べしもの、「善人尙もて往生を遂ぐ況や惡人をや」、義人にして尙且つ救はるゝならば罪人の救拯はいと易しと。若し此語を「惡事を犯しつゝある盜賊や詐僞漢も念佛さへすればかの淨土に生るゝなり、盜賊はそのまゝにて宜し、唯念佛さへ唱うれば極樂往生す」との意味に取れば、甚だしき妄語と斷ぜらるゝも已むなし。然れども我等は、少くとも親鸞に於ては別種の意味ありしを思はざる能はず。

何となれば是れ彼が長き道德的苦鬪の後の光明的自覺なるを知ればなり。之を一つの敎義として見し上の是非はいざ知らず、之を罪人に對する「喜の音」として見るの時、我等はその包含する慰藉力の大なるを認めざる能はざるなり。

先づ一度「自力作善の人」として道德の實踐に力め、惡を去り善に就かんと努力して、而も一惡去りて又一惡來り、一善を行ひて又一惡を行ひ、善を爲すも之に私欲汚情の伴ふを覺りて、遂に我爲す所悉く惡なりと斷じ、悶々の懷ひに堪へ難く、「煩惱具足のわれ等は何れの行にても生死を離るゝことあるべからざるを」味ひ、己を「罪人の首」なりと斷ぜし者に取りては、「罪人救濟の敎」は眞個天來の福音なり。

路加傳十五章にある羊の比喩、金錢の比喩（一節—十節）は罪人救濟の福音にあらずや。

一人の罪ある人悔改めなば、悔改むるに及ばざる九十九の義人よりは尙ほ天に於て喜あらん（路加傳十五の七）

と。惡人成佛は彌陀の本願也、罪人救濟は神の意志なり。我等罪人之を知りて唯神に還れば可なり、焉ぞ遲躊して迷誤に迷誤を重ぬべけんや。更に思ふ、世に善人なし、萬人皆罪人なり、善行に由て天國に入る能はず、早く悔いて福音の恩惠に與るべし。親鸞の意味亦茲にあることを疑はず。

(四)信仰以上の信仰＝薄信怖るゝに足らず

宗教信者に取りて最も苦しきことは、信仰薄弱の實感なり。信仰不足の嘆、これ我等が往々にして發する苦悶の叫にあらずや。

念佛申し候へども踊躍歡喜の心おろそかに候ふこと、又急ぎ淨土へ參り度き心の候はぬは、如何にと候ふべきことにて候ふやらんと、申し入れて候ひしかば、親鸞も此不審ありつるに唯圓坊同じ心にてありけり。

これ唯圓坊（親鸞の弟子）が疑問に對して親鸞が同感を表したるものにして、疑問の一は踊躍歡喜すべき筈の救濟に入りながら踊躍歡喜の念薄きことなり、疑問の二は來

世往生の希望を抱きながらも淨土へ往くの願なきことなり。一言にして云へば、信念希望共に極て微弱なるは何故ぞやとの懷疑なり。之に對して親鸞上人の「親鸞も此不審ありつるに」と返答せしは、其五十三歳の時發せし「悲い哉愚禿鸞、愛欲の廣海に沈沒し、名利の大山に迷惑し、定聚の數に入るを喜ばず、眞證の證に近づくを快しとせず、恥づべし傷むべし」との語と併せ見て、其の切實なる告白を偉とせざる能はず。

よく〳〵案じ見れば、天に躍り地に躍る程に歡ぶべきことを歡ばぬにて、いよいよ往生は一定と思ひ給ふべき也。

歡ぶべき心を抑へて喜ばせざるは煩惱の所爲なり、然るに佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願は斯くの如きの我等がためなりけりと知られて、愈〻頼もしく覺ゆるなり。

これ第一の疑問に答ふる語なり。而して第二の不審には何と答へしぞ。

又淨土へ急ぎ參り度き心のなくて、聊か所勞の事もあれば、死なんづるやらん〻

心細く覺ゆることも、煩惱の所爲なり。

久遠劫より今迄流轉せる苦惱の舊里は棄て難く、未だ生れざる安養の淨土は戀しからず候こと、誠によく〳〵煩惱の强盛に候にこそ。名殘惜しく思へども、娑婆の緣つきて力なくして終る時に彼土へは參るべきなり、急ぎ參り度き心なき者を殊に憐み給ふなり、之につけてこそ愈、大悲大願は賴もしく往生は決定と存じ候らへ。

救濟に入りて大歡喜の生ずべきに生せざるも、來世の希望ありて死を怖れざるべきに死を怖るゝも、これ皆煩惱の所業なりと。深刻骨に入るの語と云ふべし。

我等は自己の薄信を歎じ、神に賴る心の乏しきを悲み、又我信念、希望の甚しく私欲的なるを悔やむ。而して己れの實狀を痛切に示さるゝ時、我信を悉く虛僞となして絕望懊惱の奴隸となり、懷疑の黑雲は十重二十重に我を圍みて天の光明を遮りて示さざるを悲む。然れども飜て思ふ、我等かゝる薄信の輩なればこそ神は却て我等を救はんとし給ふなり。

我を信ずる此の小子の一人を礙かする者は、磨石をその頸にかけられて海の深みに沈められん方尙ほ益なるべし（馬太傳十八の六）。

かくの如くこの小子の一人の亡ぶるは天に在す汝等が父の御心にあらず（仝十八の十四）。

パウロも亦「信仰の弱き者を納けよ」（羅馬書十四の一）と云へり。我等信仰の赤子にして、薄弱比なしとするも、我等は神を信じ神に依り賴むことを捨つべからず。自己の薄信を知りては自己の「煩惱の强盛」を覺り、自己の煩惱の强盛を覺りては益々信賴の念を起すべし。神赤子を救ひ給ふ、我等何ぞ恐れんや。

(五)無碍の一道＝偉大なる確信

親鸞は宣して曰へり、

念佛者は無碍の一道なり、その謂れ如何とならば、信心の行者には天神地祇も敬服

し魔界外道も障碍する事なし、罪惡も業報も感ずること能はず、諸善も及ぶことなき故に無碍の一道なり。

これ羅馬書八章三十一節以下に記されたるパウロの大確信に似たり。偉大なる宗教家の所信に固く執持することの强烈旺盛なる、まことに讃歎の外なし。大なる哉「愚禿」親鸞！

（四）

以上論ぜし所極て簡なりと雖も、要するに『歎異鈔』の中心思想の茲にあることを疑ふ能はず、從て又親鸞上人が根本信念も亦之れ以外に求むべきにあらずと思はる。吾人は尙進んで根本信念以外二三注意すべき思想を指摘し、然る後『歎異鈔』の內容について少しく吾人の所見を開陳せんとす。

(六)兄弟主義＝師なく弟子なし

專修念佛の輩の、我弟子、ひとの弟子と云ふ爭論の候らうらんこと、もての外の

仔細なり。親鸞は弟子一人も持たず候、其故は我計らひにて人に念佛を申させ候はゞこそ弟子にても候はめ、偏に彌陀の御もよほしに與りて念佛申し候ふ人を、我弟子と申すこと極めたる荒凉の事なり。

つくべき緣あらば伴ひ、離るべき緣あれば離るゝ事のあるをも、師を背きて人につれて念佛すれば往生すべからざるものなりなんと云ふ事、不可說なり。

如來より賜はりたる信心を、我もの顏に取り返さんと申すにや、かへすがへすも有るべからざることなり。

自然の理にも相かなはゞ佛恩をも知り、又師恩をも知るべきなり。

熟讀玩味して大信仰家が靜謐穩雅なる態度の慕はしきものあるを懷ふ。曰く、信仰はこれ如來より賜はりしもの、救濟はこれ如來の施せし所、人の力之を爲せしにあらず。されば信者は皆如來の弟子なり、甲の弟子にあらず乙の輩下にあらず、緣ありて合し緣ありて去る、來る者をして來らしめよ、去る者をして去らしゆよ、來らば共に

信味を語らん、去らば去りて其爲すが儘に任せん。如來の賜はりし信仰の友を我弟子と思へばこそ、其來るを喜び去るを悲むなれ。凡てを如來の御計らひに任せ奉れば、我等は人界紛々の去就以外に悠々別天地を樂み得るなりと。言は短しと雖も、我等一生の鑑戒たらん。

あゝ黨派心—これ我等が深き病なり。我黨を立てゝ之を唯一眞正の者となし、他派を排して其缺陷を訐き、互に相責め相爭ひて盡くる所を知らず、其極政爭の比にあらざる惡虐醜陋の紛爭を重ね、天使たらんと力めしもの却て地獄の魔鬼となる。我等は多くの敎派が自派を呼んで the only Church（唯一の敎會）となし、己れ獨りイエスより授けられたる權威を把持すと誇稱し、我敎派に入らざれば救はれずと宣するを聞きて、其妄を怒れども、一度己れの衷に之に類する黨派心の伏在するに想到しては慄然たらざるを得ざるなり。自派の多きを喜び、會衆の數に喜憂し、友人の增加に誇る—我等は統計的宗敎を嘲りて自らも亦統計的宗敎の罠に陷らんとす、危きにあらずや。

我等は親鸞の語に鑑る處なかるべからず。

「斯かる人は……唯神に由りて生れし也」、「それ召ばるゝ者は多しと雖も選ばるゝ者は少し」、「天の父の植ゑざるものは皆拔かるべし」、我等焉ぞ神より「賜はりたる信心を我物顏に取りかへ」すべけんや。イエスも敎へ給へり。

汝等はラビの稱を受くること勿れ、そは汝等の師は一人即ちキリストなり、汝等は皆兄弟なり、……又導師の稱を受くること勿れ、そは汝等の導師は一人即ちキリスト也（馬太傳二三の八、十）。

あゝ我等師たる勿れ、弟子たる勿れ、而して人界の離合集散以外に悠々の境を樂まん。「親鸞は弟子一人も持たず候」と、一語の芳味—我等をして深く之を味はしめよ。

(七)眞正の慈善—念佛のみ其他を要せず

慈悲に聖道淨土のかはりめ有り。

聖道の慈悲と云ふは物を憐み、悲み、はぐゝむ也、然れども欲ふが如く扶け遂ぐ

ることは極めて有りがたし。

又淨土の慈悲と云ふは、念佛して急ぎ佛になりて大慈大悲心をもて、欲ふが如く衆生を利益するを云ふべき也。

今生に如何にいとをし不便と思ふとも、存知の如く援け難ければ、此慈悲始終なし、然れば念佛申すのみぞ、末とほりたる大慈悲心にて候ふべき。

其意に曰ふ、有形的慈善は一時的にして範圍甚だ狹く、慈善は慈善ならんも深き意味に於ける慈善にあらず。眞の慈善とは念佛唱名のことなり、何となれば之に由て淨土に生れ、靈化せられ、佛の境涯に入り、無碍自在の力を頒たれて後、思ふがまゝに衆生を濟度するを得ればなり、これこそ眞の靈的慈善と稱すべけれと。親鸞の師法然の語を以てすれば左の如し。

いま一際とく〳〵淨土に生れて覺を開きて後、急ぎ此世界に還り來りて、神通方便を以て、結緣の人をも有緣の者をも、譽むるをも謗るをも、皆悉く淨土へ迎へ

取らんと誓を發してのみこそ、當時の心をも慰むるにて候。

念佛は萬事なり、念佛のみ爲さばおのづから慈善を生むと親鸞は唱へし也。即ち彼の唱導する所は「念佛萬能論」也。

我等は此所說に二の假定の豫想せらるゝを見る。念佛するものは如來之を淨土に迎へ給ふとすること其一なり、淨土に生れたる者は佛となり此世に還りて、衆生を濟度するに神通無碍の力を有すとなす其二なり。而して此二の前提を眞としてのみ「念佛即慈善」の結論に達し得るものなること、明々白々なり。前提の二つは假說なり、然れども信仰とすれば信仰なり。吾人は此假說（もしくは信仰）について、茲に是非の論を爲さんとするものにあらず。唯「念佛即慈善」てふ思想が二の假說を前提としてのみ成立するものなることを明かにせんと欲するのみ。

かくの如く彼の信仰は飽くまで念佛中心なり、念佛の外一切を不要とす。其形に於てバウロが信仰に絕對の價を附せしと甚だ相類似して、大なる宗教家の透徹を認むべ

し。然れども其形に於て二者の類似を說くべく、其實に於て未だ俄かに類似を云々すべからざるなり。

(八)眞正の孝道＝念佛のみ其他を要せず

親鸞は父母孝養のために一遍にても念佛申したること未だ候はず。

其故は一切の有情は皆もて世々生々の父母兄弟なり、いづれも〳〵此順次生〔此次の生の意〕に佛になりて助け候ふべき也。

我力にて勵む善にても候はゞこそ、念佛を廻向して父母をも助け候はめ、唯自力を棄てゝ急ぎ淨土のさとりを開きなば、六道四生の間何れの業苦に沈めりとも、神道方便を以て先づ有緣を度すべきなり。

彼は先づ一切の有情物を父母兄弟となし、次の生に之等一切を救濟するを以て眞正の孝道となす。而して之がためには念佛して淨土に生るゝことを要すれば、念佛こそ眞正の孝道に導く物なれ、否念佛こそ唯一眞正の孝道なれと謂ふ。前段說く所の「眞正

の慈善」と名を異にして實に於て全く一なり。されば此二を合せ考ふれば、念佛こそは唯一眞正の慈善にして又唯一眞正の孝道なり、六字の唱名は同時に善事の實行となると云ふなり。而して前段既に此思想につきて述ぶる處あり、今茲に贅せず。

親鸞が、父母の爲に念佛を唱へず一切の有情皆これ父母兄弟なりと說きし處、イエスが母と兄弟の來るに會して「我が母は誰ぞ我兄弟は誰ぞ」と喝破し、手を伸べて弟子を指し「これ我母我兄弟なり、そは凡て我が天に在す父の旨を行ふ者は、是れ我兄弟、我姉妹、我母なればなり」と宣し給ひしに相似て、偉大なる迷執打破の聲と云ふべし。親子兄弟の關係を輕くせしにあらず、唯衆生と家族的關係に入らんとするなり。これ偉大にして强烈なる信念の上に立ちてのみ初て出づる語。「親鸞は父母孝養のために一遍にても念佛申したること未だ候はず」と、「忠孝爲本」の十重二十重の包圍中にある我國人にして、深く茲まで進み敢て此言を發し得しもの、まことに其偉大に驚歎せざる能はず。

『歎異鈔』については尙ほ傳ふべき點あれども、既說を以て重要の個所を紹介し得たることゝ思ほるゝ故、此外の點は玆に說かず。

(五)

以上親鸞上人の信念について吾人をして少しく批評する處あらしめよ。吾人もとより親鸞を偉とし、其人格と信仰とに對して大なる尊敬を拂ふもの、其生涯と其信仰と我を勵まし我を慰むるもの多々、感謝多くして批難あるなし。然れども吾人は彼に敎へらるゝ所多きと同時に、彼に全然の滿足を感ずる能はず。『歎異鈔』一卷、讀了し卷を閉ぢて瞑目一番するに何となく「物足らぬ感」の起るものあり。これ吾人の求むる或物が彼の中に充たされざるに由る。吾人は我要求の悉く充たされんがためには到底ナザレのイエスに至らざる能はず。されば吾人は親鸞に無くしてイエスに在るもの(歎異鈔になくして聖書にあるもの)を玆に少しく記載せんと欲す。吾人は今基督敎と眞宗との優劣を論ずるを以て目的とせず。親鸞に至つて凡ての心靈的飢渴を醫さるゝ人

に取りては、眞宗は絕對の宗敎なり。イエスに至つて悉く靈性の要求を充たさるゝ人に取りては基督敎は絕對の宗敎なり。余は唯一個の實驗として、親鸞に於て充たされずしてイエスに至つて初て充たさるゝ二三の點を揭げ、聊か同信の士の參考に供せんと欲するのみ。然り唯余一個の實驗なり、敢て客觀的眞理となして二敎の優劣を云々すべきものにあらず。

(一)吾人は先づ「如來」なる觀念に對して少しく云ふ處あらんとす。抑も如來とは何ぞ。

『歎異鈔講話』の說明に曰ふ。

> 彌陀とは阿彌陀佛の略稱にして、三世に亘り十方界に滿ちて私共のために心を碎き身を勞して居らるゝ慈悲の如來の御名である、即ち彌陀とは私共の眞實の親である、師である

と。而してかくの如き如來の實在を知るは、專ら人々心靈に其大慈大悲を味ひて、恰も親の慈愛に接したるものが親の實在を信ずるが如く信ずるなりと曰ふ。

諸君よ信じないで如來の實在を云々し給ふなよ、私は實際上から申しますと、私の心中の苦悶は、日々夜々に此如來の御力を思ひ出し御名を唱へる事によつて、拂はれつゝ慰められつゝあるのである。(歎異鈔講話より)

即ち信じて効果ある事は信ぜざるを得ずと曰ふに等し。吾人は其痛切なる實驗の上に立つ實際的信仰の潑溂たるを羨み、かの基督教徒にして徒らに三位一體の神、人格的の神 (the personal God)、全智全能の神を理論の上に高唱して、心靈要求の上に立つ實驗の靈味甚だ乏しき者あるを慨かざる能はざるなり。

吾人は如來の觀念については曉烏氏の説明に據りたれど、親鸞の意も同一なりしことを推知す。

親鸞の云ふ如來の觀念は移して以て吾人の「神」てふ觀念に用ひ得べし。我等が心靈に「愛の神」を實感する時、如來の慈悲に感泣する眞宗教徒のそれと甚だ相似たるものあるを思ふ。さりながら吾人はイエスキリストに據りて神の實在を知り、イエスキリストに據りて神と交はる。吾人淺眼凡視、且罪惡の大に心靈を壓するものあり、

キリストなくして神を信じ神と交はる能はず。もしナザレのイエスなからんか、吾人にとりては神とは唯空漠なる觀念に過ぎず。イエスなくも、理論の上に「造物者たる神」、「全智全能の神」の實在を證明することは容易ならん（其非實在を證することの容易なると等しく）。然れども神の愛を如實に味ひ、「父よ！」と心靈奥底の叫を發せんことは能はじ。イエスなくしては我等は理論的有神論者、觀念的一神教信者として、却て無神論者に勝る無限の寂寥と不快なる矛盾とに惱まざる能はず。これ我が過去の苦き實驗の告白なり。

イエスを見し者は神は見しなり、キリストは見ることを得ざる神の狀なり。これ我等が神に對する信仰の實驗にして、又其根柢なり。我等にして空漠なる觀念を抱いて滿足せば宜し、若し然らずして「聞き、又目に見、懇ろに觀、わが手捫りし所のもの」にあらずんば信ずる能はずとせば、如何にするも、イエスキリストに至らざるべからざるなり。然り、千九百年前猶太の僻陬に生れ、三十年間勞働の生涯を送り、後起ち